

# 女の言いたい放題誌

わいふ NO.251.

逐次刊行物

平成6年12.5

国立婦人教育会館  
婦人教育情報センター



● 豪華集合住宅での子育て  
● 特別養育父と旅した五〇〇キロ  
● 特別養育 現代お見合事情



# 農文協

〒107 東京都港区赤坂7-6-1  
☎03(3585)1141 ●内容見本室  
(全て税込価格)

大好評! たちまち5刷!

**うおつか流 台所リストラ術** 解説・立松和平  
魚柄に之助著 ●ひとりひとにつき9千円 穀物・乾物中心・肉少々の食の組み立てと食材の使い回しで、驚くほど安くうまい! \*13000円

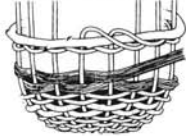
**うおつか流 清貧の食卓** 解説・橋口亮  
し切著 ●からだによければ地球によい 食材と向き合い生きし切る、ユニナシ生活で健康・地球によい暮らし。 \*14000円



▼朝日新聞で絶賛紹介!

## フイリピン家庭料理入門

朝日新聞で紹介 / 大反響の本 / 写真・イラストでよくわかる!



**野山の薬草** 自分で健康茶つくろう健康茶 ●身近な野草 ●健康風呂 ●アウトドアを楽しむ本  
薬草の見つけ方と食べ方の図鑑 伊部谷自然友の会編 \*13500円  
季節に合わせた採取法・利用法 大母 淳著 \*17000円  
薬草の採取・加工法のコツ 大母 淳著 \*23000円

●入門 ↓ 基本 ↓ 応用へと、イラスト・写真でよくわかる! **ネイチャーズ あけびを編むクラフト**  
谷川栄子著 あけびを中心に26種の植物のつるの採集方法、つるの特徴と作品作りまでを初心者でもわかるように解説。親子で楽しめます。●カラー写真24頁付 \*26000円

萌文社 東京都千代田区富士見1-5-12 ☎03(5341)9008

あなたの住んでいる自治体の福祉水準が比較できる  
**図説 東京の福祉実態**  
●一九九五年度版 ● 東京の福祉研究会  
B5判・一七六頁 定価二〇〇〇円 東京自治問題研究所  
執筆陣 ●高橋紘一、太田貞司、木下安子、矢部正治ほか  
●首都東京の区市の福祉水準をデータで比較  
●過去数年間の推移をオリジナル図表で解明  
●高齢者福祉・在宅福祉・保健医療・障害者福祉・児童福祉・暮らしの保障・区市の実態(収支、職員数、福祉費など)・都道府県比較など80項目の実態を独自に資料作成  
●福祉行政のあり方を図表でとらえた保存版

## 高福祉社会にみる教育とくらし

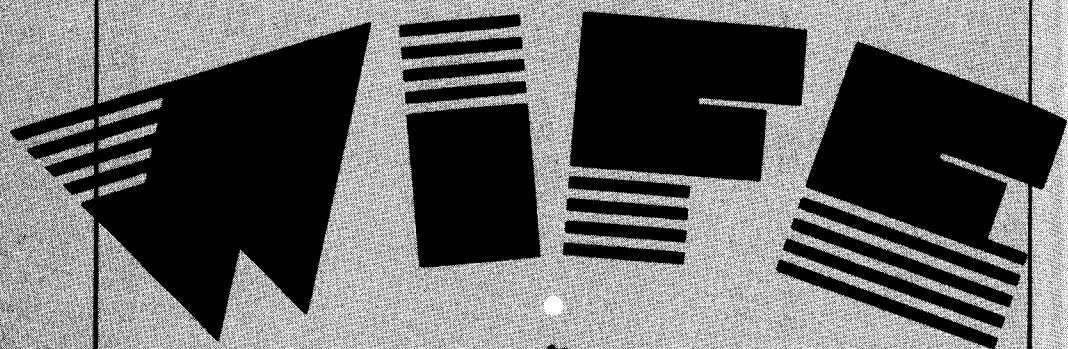
—デンマークと北ドイツを訪ねて—

福祉と教育を考える会編

B5判 / 192頁(カラー頁4頁) 定価2,500円



高福祉の法律と税のしくみ、高齢者施設、補助器具センターなどの福祉現場を紹介しながら、それを支える教育(保育園や高等学校など)はどのように行なわれているかを考える。そのほか性教育、男女平等と別姓、デンマーク人の住生活と暮らし方、共同生活コレクティブハウス、環境保護などの実態と、シュタイナー学校をはじめドイツの教育と福祉も紹介



あなたのフリースペースです。

4 私のこと場 ⑩

装丁家・林 佳恵

文／レイアウト・林 佳恵 写真／佐々木恵子

10 ●特集 集合住宅での子育て  
オムツはずし競争

鈴木田美

14 隣人はもと保母さん

藤田勝美

18 子育て環境満点

大目木智美

22 エッセイスト・クラブ

斉藤博美・北恵美子・柳澤幾美

27 ワンポイント情報

好きなテレビ番組

宇都宮典子・宮崎貴子・大味恵子  
杉山千佳・風間真弓・林 啓子

32 骨粗しょう症にならないように

小林智枝

36 父と旅した五〇〇〇キロ

高松恭子

43 サーフレシーブ

葉田野妙子・青木和子・伊東容子  
潮田京生子・高松恭子・神山寿子  
細野清美・服部親子・大井二美  
大庭杷子・十文字圭子・福田豊子  
加藤君子・林 直美

54 精神科外来の窓辺から

安斉みちよ

58 ズバリ一言

千藤順子・横山昭子・望月敦子  
鈴木美奈・前川理絵

64 **パリが突然やって来た!**

藤永洋子

69 **おさない子を育てる**

石井しのぶ・金子由美子・三野友子  
宮崎貴子・新坂英子・村瀬智子

78 **母校の「停学事件」を考える**

十文字圭子

82 **人間マンドラ**

佐藤ゆかり・香山なおみ・神山寿子

88 **現代お見合事情**

Y・M

96 **女の時事放談Ⅱ**

「性の自由」

木村澄子・杉山千佳・鈴木由美子  
田村幹代・山口遼子

106 **情報コーナー**

107 **平成おつたまげーシミンⅦ** 西田淑子

108 **読んでみました**

安井礼子・太田差恵子  
刀祢啓子・後藤裕子

112 **コミック●痛快ノ一般人㊤** 栗田笑

116 **フリースペース**

須賀まり子・中松ミナ子・山梨摩世  
田中恵子・福田幸子・飯塚真里  
西尾ありか・歌川敦子・鈴木和美

134 **ブック情報**

138 **わいわいがやがや**

田中優子・浅田節子

141 **シンポジウムのおしらせ**

次号投稿募集——140 投稿規定——142 編集だより——144  
わいふ原稿整理方針——15 バックナンバー——98  
自費出版は「わいふ」へどうぞ——102  
各地で文章講座を——128 添削希望の方へ——140

# 私のしごと場

17

ブックデザイナー

## 林 佳恵

東京都新宿区

この10年  
仕事着は  
キモ!

紹介してもらった  
雑誌、新聞のロー  
ふ、持ち寄り  
自由



装丁した本や  
ホンの一部  
でございまる  
ホント



ミシェル・フーコー  
大好き!!  
目標の人  
鶴見和子先生



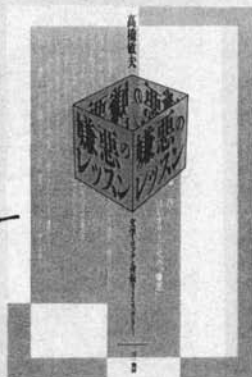
● お気に入りの装丁本  
リスト



3年目に入った早稲田  
大学テンプル学生のわたし。高橋ゼミ  
の学生たちとわが家で  
コンパ



薫陶を受けただけ  
のヒアリ!.....  
でしょうか?





上野千鶴子に評  
まるごこち一冊 林 佳恵。  
著にもかからぬ大風呂敷に  
ニャアヒの声もあり



念原良、小林エヒコ  
コンビ  
力を入れた。



火鉢にローテーブル。  
人かみで 神楽坂 峠の  
茶屋。あるいは香み喰い  
処ばやし。  
ホストのシロヒ



バックの中にはいつも著  
者。著置きには目かない。  
自慢の著置きコーナー

●出版記念パーティーのふ容さる



指圧の池越先生



アジア経済学者 板垣興一先生



大地主の会 藤田和芳会長



カント学者 高峯一愚先生



料理研究家 小林カッ代さん



林佳恵さんの出版を祝う会  
「箸と風呂敷と猫」



社会学者 鶴見和子先生



新潟県農協青 長員喜太郎 武田智晴さん



ガラス工芸作家 岩田リツちゃん  
元大洋ホエールズ キャッチャー 伊藤勲さん



セーラ服を着てに 20数年前.....  
美濃村市長 市川紀行さん



衆議院議員 小杉隆弘



の '94 月一度は俳人かほりとなりお  
PTAではありせんゾ"



ひかり  
やま  
東山書房

615 104

東京都中央区新川2-1-1  
京都市右京区山ノ内大町5-3

03(3553)8358  
(841)9278

# 性からだる こころ



悩みはパイ!  
毎日中学生新聞連載

村瀬幸浩・堀口雅子著

悩むことはいいこと。人の苦しみ・悩みのわかることは大切。でも時には、1人で考え過ぎず、「助けてー」と声を出すことも大事。みんなの悩み・性編、からだ男の子編、からだ女の子編、こころ編に2人が明快に答えます。(中学生に勧める本、主な思春期外来リスト付き)

四六判／定価1500円(税込)

“人間と性”を考える話題の総合情報誌

# Human Sexuality

「ヒューマン・セクシュアリティ」

- 編集長 ●村瀬幸浩
- 企画編集 ●“人間と性”教育研究協議会
- 季刊 日5判・128頁●定価1600円(税込)

17号(新刊)《特集》家族—その将来の明暗を問う

- 【特集鼎談】「未来の家族像」を展望する  
〈ゲスト〉斎藤孝・金城清子 〈司会〉原田曜美子
- 【特集論文】法制審議会の試案がもたらすもの……二宮周平  
国際家族年が意味するもの……伊藤セツ
- 【特集ルポ】家族—個人化の時代  
インタビュー 門野彌子+庄司洋子+柳原富士子+  
塩田咲子+丸岡玲子+樋口恵子 他
- 【新連載】人間の性のルーツを探る①……櫻木知郎  
近代性学名著探検記①……山本直英
- 【海外レポート】ストックホルム・サンフランシスコ  
モスクワ・ベトナム

16号 エイズ—共生・共存の展望をひらく

15号 女性の性的欲求と性行動

14号 10代の性と「純潔教育」を考える

13号 いま、あらためて人工妊娠中絶を問う

●専送定期購読者費付中●郵振 京都4-1067第  
1年目6,400円／2年目12,800円(送料・税込みです)

# 母と息子

—フェミニズムの流れのなかで

森崎和江・若桑みどり・永畑道子  
駒野陽子・向井承子・富永孝子  
小沢牧子・高野貴子・田中喜美子

戦後のフェミニズムの流れのなかで息子を育ててきた母親たち。彼女たちにとつて息子とはなんだったのか。息子たちの現実とその息子を見つめる母の思いを描く。

定価1600円

# 30年目の同窓会

—民主教育一期生の「女の時代」

木村 栄

戦後五〇年、女性をとりまく状況はどのように変化したのか。時代の最前線を走るように期待されたお茶の水女子大卒業生の個人史に重ねて、「女の時代」の内実を問う。

定価1850円

筑摩書房

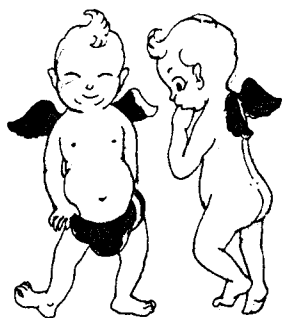
ご注文・お問い合わせは下記へ  
Tel. 048(651)0053 (サービスセンター)

表示の価格は税込定価  
東京都台東区蔵前2-5-3 (本社)

●  
特集

集合住宅での子育て





# オムツはずし競争

東京都板橋区  
鈴木由美(26歳)

## (軽い情報交換から始まって)

巷では運動会シーズンまっ盛りだが、当社宅でも激しいデッドヒートが繰り広げられている競技がある。それは、オムツはずし競争である。

五月の連休明けあたりから、二歳児を中心に四人の幼児が参加させられている。S家のタカちゃん、Y家のヨシくん、T家のチャー坊、N家のハルちゃん。彼らは母親達の熱い視線などぞ知らぬ顔で、仲よく遊んでいるのだが、それを監視する彼女らの熱い戦いは、しだいに加熱している。

最初は軽い情報交換から始まった。

「もう二歳の夏だもの、今のうちにオムツ取らなきゃ」

「そうよね、来春から幼稚園入れるなら、オムツ取れてないと、後あと面倒なものね」

「オムツ取れてないと、断られることもあるんだってよ、入園」

「それは私立の有名な所だけでしょ」「ちがうのよ、今、三歳までに取れて

いるのが当たり前でしょう」

「えー、ウチ取れなかったら、どうしよう。赤ん坊がいるから自信ないなあ」

「トレパン、もう買った？」

「うちは紙のだったら、もう使ってる」

「えっ、いつから」

「二週間ぐらい前から」

「いやだ、私も早く買ってこよう」

そんなことで始まった話が、次第に情報量を増し、あちこちからの助言や励ましもあって、彼女たちは悩むようになってくる。

「もう八月も末だね、ヨシくんオムツ取れた？」

「ウチはうんちは完璧だけど、おしっこは気分なの。チャー坊は大体言うらしいよ」

「えっ、あの子まだ一歳十カ月じゃない。ウチのタカ二歳九カ月なのに、うんちしか教えないよ。いいなあ」

「タカちゃん、この前、おしっこ教えるって言ってたじゃない」

「それがお盆に旅行したら、教えなく

なっちゃったのよ。ずっと車だったから、オムツしてたのよね」

「あらら、また一からやり直し」

「うーん、うんちは教えるんだけどねー」

「Nさんは」

「ハルは……まだまだ。もともと口数少ないし、部屋の隅で隠れてするんだけど、教えてくれない。チャーフより四カ月、早く産まれたのになあ」

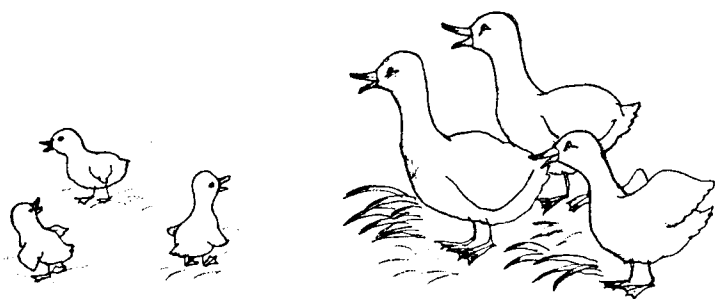
「だって、Tさんはスパルタだもの。教えないとお尻ひっぱたくって言ってたわよ」

「そこまでしたくないしネ」

「そうだよね。でも、甘えさせてたら、いつまでたっても取れないかもよ」

### (勝つもの敗けるもの)

かくして、憶測と噂が乱れ飛ぶ。リードしている親は自分の成功を自慢し、遅れをとった親は、なるべく井戸端会議に参加しないように気を配り、仕方なく話す時にはもっぱら聞き役。



そして家にこもって悶々と悩む。

(ウチのタカが、あんな子に負けるだなんて……。あの子より半年以上先に産まれたのに。そりゃあ、歩きだすのだってウチの子は遅かったけど、今はしっかりしてるわ。なんで？ やっぱ私の育て方が悪いのかしら、過保護なのかしら。叩いてでもしつけるべきなのかな。でも育児書には、叱らずに、自然にトイレに行くように促せと書いてあるし、ひどく叱ると、心のトラウマ(外傷)になって性格が歪んだり、話すのが遅れるっていうじゃない。ただでさえウチの子は外に出ると無口だったっていうのに、どうしよう)

競争をしないこと。これが重要なのだが、競争は自然に発生してしまう。

自分の子が、少しでも他の子より出来れば嬉しい。嬉しいのでみんなに大きな声で話してしまう。

話を聞くほうは、自慢されているように感じる。自分の子が見下されているようで、悔しい。負けられないように尻をたたく。

そんなことで、ますますエスカレーターしてしまふ。話に乗らなければ、自然と会話する人も減って、仲間はずれになってしまふ。

心は揺れ動くのに、よいい拍車をかける奴がいる。夫と姑、それに自分の親。

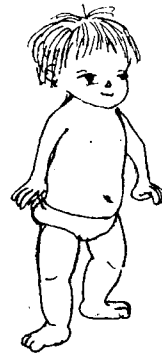
「なあ、タカもうすぐ三歳だぞ。オムツまだ取れないのかよ」

「うーん、ヨシくんはもう取れたんだって」

「えーっ、あのナスビ顔に負けたのかよ。お前、昼間なにやってんの。ちゃんとしつけないきゃ、ダメじゃないか」  
「だって、ウチは赤ん坊もいるし、そればかりしている訳にいかないのよ」

「テレビ見て、ゴロゴロしてるんじゃないの。先輩のところなんか、二時間置きにトイレに連れていってしつめたんだってよ」  
「そんなこと知ってるし、そうやってるよ」

「じゃ、何で取れないんだよ」



「分かんないよ。私だって必死でやってるんだから!!」

両おばあちゃんは、ちよくちよく電話をかけてくる。

「もうオムツとれた」

「いいえ、まだなんです」

「あらー、私が子育てしてたころは、一歳半過ぎたら教えたものよ。紙オムツで育てたからいけないんじゃないの」  
「はあ、でも、もうすぐ取れると思う」

ます」

自分の親なら言いたいことも言えるが、姑さんとなると構えてしまつて何も言えない。そんなことがある度に、母親の心は暗くなつてしまふ。

（あー、もう嫌だ。なんで私だけがこんな目に会わなきゃなんないのよ。杜宅じゃなけりゃこんな思いはしないのになあ。引越したくなつちゃうよな。ここは姑さんとも近いし、どっか遠くに行きたあい）

### （小さな差で大騒ぎ）

さて、集合住宅に住んで困ること。

それはお互いの生活レベルが、大差ないことに由来するのではないだろうか。

会社や学校で起こることも、団地ですぐ生活に反映される。同じ間取りで、似たような電化製品に囲まれ、同じような家族構成で暮らす人々にとつては、小さな差がものすごく大きな事に受け止められる。

杜宅となれば、ダンナの学歴が分かれば、給料がどのくらいあるか察しが

つく。ポーナスだって差がつけられるから、ダンナの学歴とポーナスの話はご法度である。

子供の話と、ダンナの実家の悪口、ワイドショーネタが井戸端会議の三本柱なのだが、幼児を育てる母親の間では、子供の発達の早い親は、胸を張ってその話のリードを取るようになるのだ。

一步離れて、こんな生活の有様を見てみると、みんな子供のためだけに生きているように感じる。

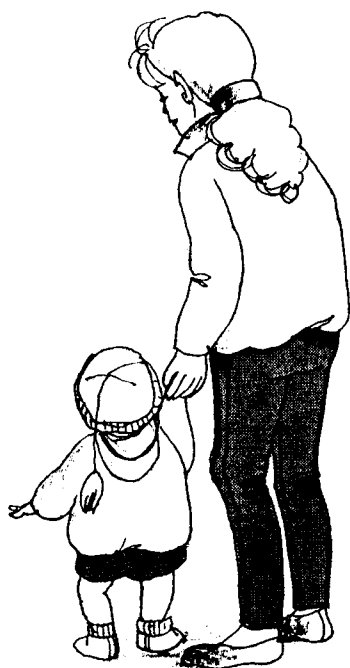
独身時代は自分のためだけに生きていられた。結婚してからだって、勤め

ているうちは、自分の時間と家庭の時間がきちんと分けられていて、その両方を上手くやっていられた。

でも、妊娠して、辞職し、専業主婦として生き始めてから、自分に対する評価は子育てだけになってしまった。

よい子Ⅱよい家庭Ⅱよい母親(自分)今まで自分のために費やしていた、おしゃれや趣味も、生活のエネルギーすべてを、子育てに注ぎ込んでしまっている。伸ばし放題の髪は一つに束ね、服は毎日ズボンにトレーナー。時にはスウェットで一日中過ごす。

自分のことはほとんど構わないのに、



子供のことになる、いちいち口を尖らせて、服装から食事、テレビの番組まで母親の好みで、母親の理想とする子供に洗脳しようとしているのだ。

本当の子育てって何だろう。「育児は育自」という言葉があるが、子供を育てることで、自分自身も成長すること。でもこれも理想で、そんなこと分かっている、それが出来ずに多くの母親は悩んでいるのだ。

子供の発達や評価で競争するのは、その子にとってとても失礼なことだ。

母親は自分の子を一人の人間として認め、子供と共に生きるという意味を、集合住宅で暮らすなら、なおさら見つけて生きていかななくてはならないと思う。そのためには強い意志が必要とされる。しかし、悩む。

悩んでいるうちに子供は大きくなって、オムツは少し競争も、入園準備あれこれも、お受験も過ぎていく。過ぎてしまえば、子育ての苦労も忘れてしまふのだろうか。そうかもしれないのに母親は悩み続ける。



# 隣人はもと保母さん

千葉市花見川区  
藤田勝美(31歳)

## (泣かす母親は無責任)

忘れもしないあれは七月の暑い午後、生後三カ月の次男を家において長男だけを公園に連れて行った。三歳になる長男はとでもではないが一日中家にいるなんてできない。しかしやっと首がすわった次男をこの炎天下に何時間も外に連れ出すこともまたできない。そこでミルクをのませ、おしめを替えて、クーラーをかけて家においてきた。その公園に我が家の隣に住むNさんが自転車でとび込んで来てこういった。

「藤田さん、嵩司君がもう二十分も泣いているけれど。あまりにも無責任すぎるのじゃないかしら？」

実は、この日の午前中にも私は次男をおいてクリーニング屋に行った。マンションの近くまで戻って来た時、私を捜しに息急き切って走って来たNさんに会い、

「ずっと泣いていてかわいそうよ。自転車が無いから近くだと思って捜しに

来たのよ」と言われているのである。

これを善意ととるか、悪意ととるか。嵩司はめったに泣かないが、泣き声は人一倍大きい。確かにうるさいだろう。しかし二十分も泣いているよと時間まで計る必要があるのだろうか、しかも近くの公園をご丁寧にも三つも捜してくれたというから不思議。

彼女と私は隣同士。しかも私の長男と彼女の次男は同じ平成三年の七月生まれ。そして彼女は十数年保母をしていたというキャリアの持ち主。

私のすることがいちいち気になるのだろう。ドアを開けたままで嵩司を泣かせていたら、ファンデーションを片手に持って玄関の前に立っていた。「こんなに泣かせて何かあったの？」と言って。

「放っておけば寝ちゃんうですよ」と答えたら、心底あきれた顔をされた。

私がこのマンションに住んで三年になる。全部で百世帯ほどの三階建て、こぢんまりとしたマンションだが、引っ越してきた時は、私達のような二

十代の夫婦はまれで、随分と身上調査をされた。

ご主人の勤務先は？

出身学校は？

お若いのに社宅ではないの？

などなどである。

## （悪事？ 千里を行く）

ひととおり私達への質問が終わったから今度は子育てへの批判が始まった。

Nさんはマンション内に友人が多く年中行き来している。ということは、朝健嗣が階段からシャボン玉をまいたこと、Nさんの家のA君にかみついたこと、全てお昼までには知れわたるということである。「気にしなければいい」というのは百も承知している。しかし英語のテープを子供に聴かせていると、次に会った時に、「藤田さん、英語を教えるには時期があるのよ」とくる。

ゴミ収集車が大好きな健嗣を、一人で共同階段の角に立たせてゴミの収集をみせていると「三歳児はたくさんい

る、一人だけ朝から外で騒ぐと他の子も皆が外に出たくなる」といわれるのである。そしてそれがその日の内にマンション中に知れわたるのである。「藤田さんって案外非常識なのよ」という前置き付きで。

Nさんの家も男の子が二人であるが、この二人はとも聞き分けがよい。私だって自分の子供が扱いやすい子供だったらきつと鼻たかだかで、他人の子供を批判したろうな。

Nさんは明言する。

「いくら健ちゃんもエネルギーが豊富だって、三歳になれば言って聞かせればわかる。もしわからないのならば、そのように育てたのも産んだのもあなたなのよ」と。

まだまだ続く。

「集合住宅に住めないような子供なら、ご主人の仕事など考えずに野中の一軒家に住むべきね」

私が話をしていて感じるのは彼女との価値観の相違である。もちろん年齢の差も十歳近くあれば、それも当然だ

## わいふ原稿整理方針

◆投稿誌であるので、「原稿尊重」の方針で整理しています。

◆常用漢字表にない漢字または読みであっても、間違いない限り、原則としてそのまま載せています。ただし次のような語はかな書きに直しています。

又↓また 程↓ほど 位↓くらい 為↓ため 頃↓ころ 丈↓だけ 方↓ほう 様↓よう 御↓ご 迄↓まで 良い↓よい 沢山↓たくさん 中々↓なかなか 苦↓はず 更に↓さらに 但し↓ただし 何故↓なぜ e t c.

◆送りがなについては、一応次のような方向で統一しています。

例 変る↓変わる 浮ぶ↓浮かぶ 話合う↓話し合う 気持↓気持ち 行う↓行なう 表す↓表わす

◆用字用語の原則は三省堂発行「用字用語辞典」に準拠しています。

といえる。しかしそれだけではなく、私が普段生活をしているうえで何気なく子供に許していることが、彼女にはしつげができていないと感じることも多いようだ。そこで私は絶えずピリピリしてしまふ。特に子供達のたてる音や声には過度に反応してしまふ。

「うるさい。どうして静かにできないの。隣のA君はできるのよ」と必要以上にどなっては子供を泣かせる。

でも私が思っているより子供のほうがよくみている。健嗣がある時主人に「健嗣ね、A君のママ好きくないの」と言っていた。健嗣の前では決して悪口を言わないように心掛けていたから、私が色々と言われていたのを聞いていたのだろう。

### (ちよつといいこともあるけれど)

でも感謝していることもある。経験がものをいう病氣に関してはさすがによく気がつく。虫にさされたわけでもないのに健嗣のまぶたが両目共はれたことがあった。それをみたNさんがす

ぐ言った。

「これアレルギーよ、卵か大豆か乳酸菌かをたくさん食べたでしょう?」

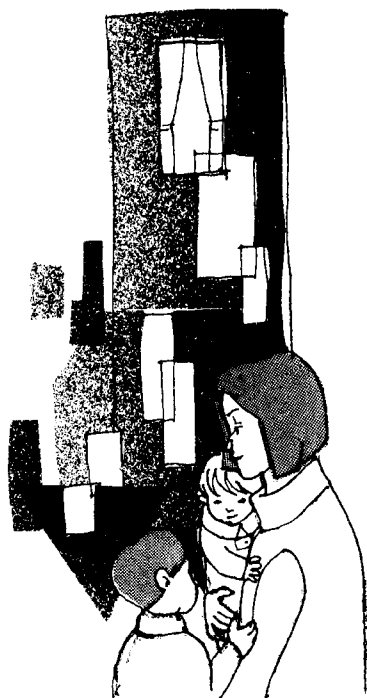
そう。その通り。卵かけごはんを食べたのです。病院に行ってみると、やはり卵のアレルギーで新鮮すぎるのは子供によくないと教えられる。こういう時は、とてもありがたいなと思う。しかし割合的には、こう感じることはほうが少ない。あーあ。嫌だな。引越したいなと思うことのほうがずっと



多いのである。

今まで色々なことを言われ続けた私であるが、これがとどめという話がつがある。

私は以前より長男をスイミングスクールに通わせたかった。しかし私の妊娠、出産がありなかなか入れられなかった。七月に三歳になったことだし、夏休みも終わった九月から通わせることに決めた。送迎のことも考え自宅に一番近いHスクールに決めた。そ



こはNさんの長男もずっと通っている  
ので一言挨拶しておこうと思い、

「九月から健嗣を日スクールに入れよう  
うと思います。お世話になることもあ  
ると思います。よろしくお願いします」

と言うと、「へえ」と驚きながらも  
入室方法や水着のことを教えてくれた。

ところが翌日、朝八時前に家のチャ  
イムがなるので、出てみるとNさんが  
立っている。

「昨日のスイミングの話だけど健ちゃん  
にはむかかないと思う。健ちゃんは少  
し神経質だし、第一子でプールにも出  
入りにくいでしょう。そのうえ、  
お母さんと嵩司君が二人きりでいると

ころをプールからみたら、今よりもつ  
と嵩司君をいじめると思うよ。うちの  
主人も、来年から幼稚園に入れるのな

ら半年でクラスを替えたらかわいそう  
だと言ってるわよ。余計なことかもし  
れないけど忠告までに」と言う。

私は思わず顔色が変わったと思う。

しかし、（ここで言い返したりしては  
いけない。何といってもお隣さん、う  
まく付き合わなければ）と思う余裕も  
あったようだ。

「よく検討してみます」と返事をした。

（こんなマンションにいないければ）

そして今は家から車で三十分はかか

るスクールに通っている。誰にも内緒  
でこっそりと。しかしNさんに忠告さ  
れたようなことは全くなく「明日は

プールの日なの？」と日に何回も尋ね  
るほど楽しみにしている。プールのあ  
る日は嬉しくって見境なしに「健嗣今

日プールなの」と話をするので、その  
内Nさんにも言ってしまうのだろうか  
と少し不安である。

ここまで干渉された時は、さすがに  
主人も私も自分達の両親に相談した。

でも結局は「そんな人もいるんだ」と  
妙に感心されただけだった。主人の母  
は私に、

「気にしなさんな。流行の育児ノイ  
ローゼになるよ」と心配してくれたが  
……。

とにかく、子育てに関しては皆とて  
も一生懸命である。私だって自分の子  
育ては一番正しいと信じていた。ただ、  
今の私の本音は、もし私がこのマン  
ションに住んでいなければ、もっと違  
う子育てができたのということだけ  
である。



# 子育て環境満点

兵庫県川西市  
大目木智実(29歳)

(密室でないのがよかった)

集合住宅での子育ては難しい?――

いえいえ、とんでもない! 集合住宅と一戸建の住宅の両方での子育てを経験している私から言わせてもらうと、集合住宅でのほうがうんと楽で楽しかったのです。むしろ集合住宅だったからこそ救われたこともあるほどです。

それは何かというと、集合住宅での育児は「密室育児でない」という点。集合住宅には私と同じような乳幼児を抱えた家庭が多く、親子とも友人探しに苦勞せずにすんだうえ、「みんなで子育てできた」ということです。

少子化が進み、地域のつながりをもたない核家族、転勤族なども多い現代、孤独な育児を余儀なくされている私たち母親にとって、まだ集合住宅のほうが、子育てしやすいのです。

私は結婚直後から、長男が二歳半、長女が生後五カ月までの四年間を、民間の「ハイツ」と呼ばれる集合住宅で過ごしました。二階建の軽量鉄骨つく

りの建物が二棟、計十四世帯の、集合住宅といっても小規模なものでした。

新婚さんが多かったため、次々に赤ちゃんが生まれました。私も入居半年後に長男を妊娠しました。私より先に妊娠・出産した人が三人おり、私は、おそらく生まれて初めて「新生児」なるものを実際見せてもらいました。生まれたての赤ん坊の世話の大変さ、三時間ごとに夜中も起きないといけない事実もこの時、初めて知りました。

母親になったことのある人なら誰でも知っていることも、この時は全然知りませんでしたし、今まで赤ちゃんなんてさわったこともないのが私たちの世代です。「ひえー、生まれたらこんなに大変なのかー」と覚悟を決めたのです。

そして、出産。産後一カ月経って実家からもどってきた時も、夫のいない昼間、赤ちゃんと二人きりで過ごす核家族の新米ママにとって同じハイツの仲間たちは心強い支えでした。このころ、長男は、昼と夜が逆になって夜中

寝ないことも多く、私は睡眠不足でクタクタ。おまけに、一カ月健診で、若い医者に「太りすぎてる。お母さん、泣くたびに母乳あげているんでしょ。」

三時間あげないとダメだよ」なんて言われ（三キログラムで生まれた長男は、一カ月で五キログラムにもなっていた）、私はパニックになってしまいました。医者者の指示どおり三時間あげようとしても、おっぱいの欲しい赤ん坊は大声で泣きわめくばかり。そんな時、同じハイツのお母さんに、「うちの子もよく太っていたよ。欲しがった時に飲ませればそれでいいよ。きつとよく飲む子なんだよ」と言われ、スツと肩の荷がおりたような気がしました。

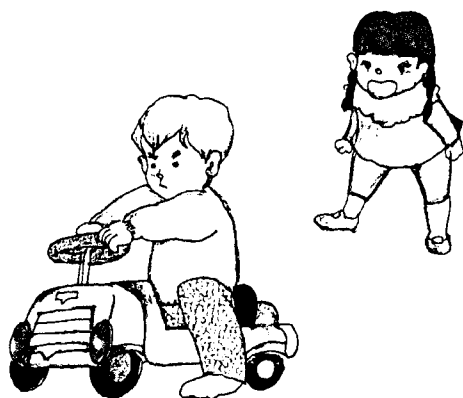
初めての子どもの育児、今思えばなんでこんなことで悩んだんだろう、と思えることも、当時は、真剣で、不安だったのです。ハイツの仲間は、私のように実家も遠く、援助を頼めない人が多かったこともあり、私たちはちよっとした心配事を相談し合ったり、わからないことを教え合ったりし

ました。簡単な離乳食の作り方、食べさせ方から、夫が遅い時、一人でお風呂呂に入れる方法まで、私たちは教え合いました。育児書や育児雑誌には載っていない生の情報・知恵のようなものを、回りにいる人たちから直接得ることができたのです。赤ちゃんがいると外出もしにくいし、なかなか0歳児を抱えて近所で友人づくりもしにくい中、一歩玄関をあげれば誰かいるというのは、本当にありがたいことでした。

### （同じ仲間と楽しめた）

ハイツの前には広いスペースがあり、赤ちゃんが歩けないころは抱っこして、また、歩けるようになると子どもたちを遊ばせながら、私たちは井戸端会議です。季節のいい時は、一日五時間以上外遊びをしていたこともあるくらい、よく外へ出ました。子どもも子ども同士よく遊んだし、母親のほうもひとりです育てしているという孤独感に苦しむことなく、楽しく子育てできました。手のかかる幼児を相手に大

変な毎日だったけれど気が追いつめられることはありませんでした。自分子どもだけではなく、よその子どもたちもたくさん見られたから、「うちの子だけじゃないんだなあ」と安心したこともあります。神経質で心配症の私が育児ノイローゼになることなく、親子で悩み苦しむことなく過ごせたの



も、ハイツの『子育て仲間』のおかげでした。

子どもたちにとっても、一つ屋根の下に遊び友だちがいるというのは、とてもよかったと思います。二歳くらいになるとお互いの名前を呼びながら、毎日外で遊び回っていました。子どもは子ども同士が一番楽しいらしく、物の取り合いをしながらも、一緒に育っていったのです。特に下の子が生まれてからは、下の子の授乳の間など、誰かにみてもらって外遊びをさせることができ、とても助かったものです。

小さな建物だったので、上下、隣同士の物音や、子どもの泣き声、騒ぐ声、はたまたお母さんの怒鳴り声までよく聞こえましたが、お互い小さな子どもがいたということで、それほど気を使わずにすみしました。むしろ、聞こえることで得た安心感のほうが大きかったように思います。

「〇〇ちゃんはまた泣いているなあ」とか「〇〇くんのお母さん、怒ってきつと、手をやいてるんだらう

な。あの気持ちよくわかるわ。私もそうだもの」とか。乳幼児って、やたらぐずったり泣いたりするものですが、「子どもってそういうものなんだ。どこの家の子も同じだ」と納得したこともあります。

そんな手のかかる子どもを相手に、二十四時間奮闘する母親の大変さを、お互い共感できたことも大きな心の支えでした。私だけじゃない、誰でもそうなんだ。そしてどんなに大変でも、それを共感し合える人が、身近にいるのだと思うことができたのです。

私たちは毎日のように、前の広場で子どもたちを遊ばせながら、おしゃべりに花を咲かせましたが、誰かの家に



集まるということは、ほとんどありませんでした。部屋が二DKと狭かったこともありましたが、玄関を開ければすぐ隣の玄関があるのが集合住宅です。密接して住んでいるからこそ、お互いのプライバシーなどところへは立ち入らない、お互いの生活のペースを崩さないという暗黙の了解があったように思います。だからめめ事や人間関係のトラブルもなく、何年間かを過ごせたと思うのです。

## （一戸建に移って）

その後二DKでは手狭になった我が家は、中古の一戸建を購入し引越しました。今では当時の仲間たちのほと

んだが、転動やもっと広い家を求めて引越していきました。

我家も家は広くなつたし、どんなに騒いでも隣近所に迷惑になることはありませんが、まわりは幼い子どものいないお家ばかり。私も子どもも、気軽に近くで遊んだり、おしゃべりしたりする友だちを失ってしまいました。公園に行っても、すでにできあがっているグループには入れず孤独でした。

遊び相手のいない子どもは退屈しぐずる。ぐずる子どもを私はイライラして叱る。そしてその後で必ず後悔して自己嫌悪におちいる、の繰り返しでした。一緒に子育てする仲間のいないことが、こんなにも苦しいことなのかと思ひました。一日中、夫以外の大人と口をきくこともなく、子どもとだけ向き合って暮らす密室育児の毎日。出口のない暗いトンネルに入ってしまったような毎日でした。そして静かな住宅街に響きわたる我が子の泣き声や、私の怒鳴り声を想像するとよけいにみじめになったものです。

引越してはや一年半たち、今では児童館や公民館の共同保育グループなどで、親子ともたくさん知り合いができました。家を行き来する近所の友人もできたし、来春から長男が幼稚園に入ること、より地域とのかかわりもできることでしよう。でも以前ハイツに住んでいた時ほど、気軽に親しく、とまでなれていないのが現状です。まさに、「二つ屋根の下」。よくも悪くも母親同士、相手の生活から何から何まで、わかつてしまふ集合住宅ならではの仲間だったのかな、と今になって思います。他の家の子どもも、自分の子どもと共に成長していったのを毎日この目で見られたから、自分の子どものようにかわいかったのを覚えています。

私は今、乳幼児をもつ母親ネットワークに入ったり、住んでいる川西市で、「0歳児を持つ母親の交流会」を友人たちと企画し、知り合いもなくひとり子育てしているお母さんたちの声を聞いたりしています。

たまたま住んでいるところに、子ども

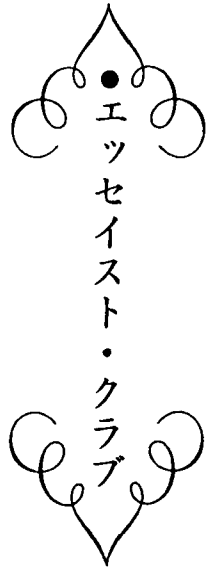
もや赤ちゃんがたくさんいるか否か——によって楽しく子育てできるかどうか決まるといっても過言ではないのです。それが今の多くの若い母親たちの現状なのです。

一戸建のお家に乳幼児のいる確率は低けれど、集合住宅は若い世代も多いし、子どもがいるお家の割合は高く、親子が孤立しにくいのではないかと思います。

私がハイツを去る日、仲間の一人がくれた手紙には「まるで学生時代のよう楽しい毎日でした。ここでの生活は一生心に残ると思います」と書かれてありました。

ベランダに干し切れないおしめや子ども服を、ハイツのまわりにみんな競って干した日々。ビニールプールを持ち寄って、朝から晩まで一日中水遊びをさせた夏の日々。子育ての第一歩を楽しく過ごせた集合住宅での生活は、私にとっても一生忘れられない思い出深いものなのです。

(え・小島佳子)



## ●エッセイスト・クラブ

こたつ

東京都世田谷区 齊藤 博美

昨日私の部屋に“こたつ”が届いた。妹夫婦の所が新しい“こたつ”を買ったので、いらなくなつた“こたつ”をもらったのだ。

ひとり暮らしを始めて三年。エアコンがあるし、部屋が狭くなるので、“こたつ”はいらない、とずっと思っていたのだが、なぜか今年の冬は“こたつ”を買おうと考えていた。

そんな矢先ふと目の前に、少々(?)型は古いが、行き場のなくなつた“こたつ”が現われたのだ。まだ使える、捨てるのはもったいない、買わなくてすむ、とその時はあまり深く考えずに、その“こたつ”をもらう気になつてしまった。

届いて早々、私は“こたつ”のそうじを始めた。板のまん中にある、赤くて四角いザルに似たカバーをはずすと、オレンジ色の大きな電球のようなものが現われた。

「わあ、イカの沖漬けみたい」と心の中でつぶやきながら、そこに薄らと積もつたほこりを、ぞうきんでそつとふいた。すると、今まで何も感じていなかったのに、この“こたつ”に、とても不思議な縁を感じたのだ。

そもそも、この“こたつ”の最初の持ち主は、私が以前勤めていた会社の後輩だった。

彼が住んでいたアパートは、“こたつ”に当たっていても底冷えのするボロアパート。そこにあつた唯一の暖房器具が、この“こたつ”だったと思う。

後に彼は、私の先輩と社内結婚をするのだが、ゴールインするまでの道のりは険しかった。彼と彼女と私、“こたつ”を囲んでは作戦会議に明け暮れた日々、今となつてはなつかしい思い出である。

そして二人はめでたく結婚した。彼は結婚を機にアパートをでることになる。その時、実にタイミングよく、私の妹の結婚相手が、親元から独立したいという話が舞いこみ、ならばそのアパート

へ、と入れ替りに入ってしまった。

まだ使えるからと、後輩が置いていってくれたものの中に「ごたつ」もあった。

新しい持ち主と新しい生活を始めた「ごたつ」。今度は妹たちの結婚にまつわる話を、たっぷり聞かされることになったわけだ。

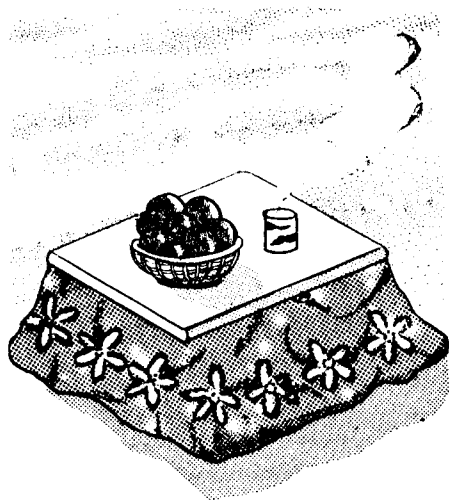
そして妹たちも結婚。いよいよポロアパートとお別れだ。しかし「ごたつ」はまだまだ現役。

ごく自然に、妹たちと一緒に新しい土地へ移って行った。さらに、妹に子どもができて、自分の実家のそばに越した時も、「ごたつ」はちゃんと妹たちについて行った。

とうとう「ごたつ」は、妹の子どもともご対面。たたかれたりひっかかれたり、時にはゴチンとやり返したり、老体(?)にムチ打って現役バリバリでがんばっていたが、ついに買い替えられる時が来る。

もはやこれまで、と思いきや、またまた新しい持ち主が現われた。それが私である。

ざっと考えても七、八年、めぐりめぐって私の所へ来た「ごたつ」、なんとも不思議な縁である。今度はどんな時を私と一緒に過ごすのだろうか。残念ながら、まだ私には結婚のけの字もない。しかし、みんなをしあわせにできた「ごた

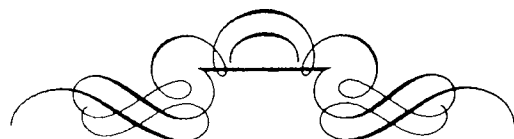


つ」が、私の所へ来たということは、私の春も近いのでは……。

花柄のテーブルクロスをかけられた「ごたつ」は、すでに私の小さな部屋を占領している。みんなの思い出がいっぱいつまっているんだな、としみじみ見つめていたら、心の奥がフワッと暖かくなった。

今年の冬、「ごたつ」に当たって、からだも心もポカポカになったら、私の春もおぼろげに見えるかもしれない。

「どうか私にとっても、しあわせの「ごたつ」でありますように」と真剣に祈ってしまった。



## 掘っ建て小屋の老人と いちじくの木

大阪府貝塚市 北 恵美子

私が月に一度電気の検針に行くその地域は、旧水間街道に沿った貝塚市の山手側にある。

もともとが富農の土地柄らしく、広い田畑や、昔ながらの大きな門構えの屋敷が散在している。そんな豊かな村の風景の中に、数カ所に突っかい棒をあてた粗末な小屋がある。私が初めてそれを見たとき、小屋の住人には失礼だが、まさか人が住んでいるとは信じられなかった。

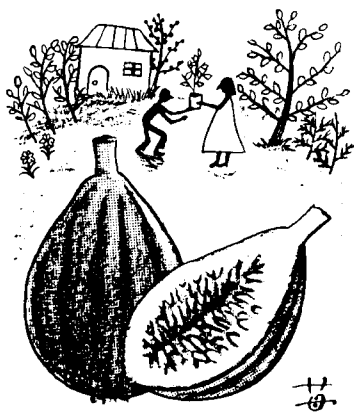
だが、電気のメーターは動いて、中からテレビかラジオの大きな音声が聞こえてくる。伸び放題の雑草、その間に季節の花が咲いて、木の枝には洗濯物が干してある。

何度目かに訪れたとき、顔を合わせたら、七十歳はとうに過ぎたであろう独り暮らしのおじいさんだった。

私がこの地区へ来ると、毎回同じ時間帯に散歩中のその老人と出会う。

「おはようございます。おっちゃんも朝早いね」私が声をかけると、「はい、呆け防止ですわ」、少しはにかなだ表情でこたえる。

穏やかな人柄らしく、訛りはあるけれども、とてもいいねいな言葉つかいで話す。鹿児島出身で、娘さんが一人いるが消息不明だということを話のしはしで知った。



いつごろからそこに住むようになったのだろうか。娘さんのほかに家族はいないのだろうか。

色々聞きたい気もするが、他人のプライバシーにかかわること。向こうから話さないのにあまり立ち入ってはいけない、とせんさくは控えた。

老人は植木や花が好きなようで、雑然とではあ

るが、いつ行っても何がしかの季節の花が咲いている。草花の世話で独り暮らしの生活を潤しているのだろう。

あれは三年前の梅雨の季節。小屋の前にあるいちじくの木に小粒の実がなっているのを見つけた。

「おっちゃん、私いちじく大好きやねん」

という、色づいて熟したのは二、三個しかないにもかかわらず、もいで私にくれた。

「帰りに寄いなさいよ。根っこをつけたまま切っ  
といてあげるから。今なら雨が多いのでつく  
でしょうよ」と、思いがけず株分けしてもらった。

あのとき植えたいちじくの木。この夏、初めて  
青い小さな実がついているのを見た私は、  
「ワァー」と歓声をあげた。お盆に早速熟した実  
をもいで、初物だからと仏壇にお供えた。

「おっちゃん、うちのいちじくもや々と実がな  
たよ！」

「ほお、そうですか、そうですか」

先日検針に行った折に報告すると、老人も満足  
そうだった。

掘った建て小屋の老人との出会いはかれこれ七年  
近くにもなった。単に仕事で出向いているだけの  
知り合いなのに、気になっている。

いつだったか小屋のメーターが止まっていた。

私は、もしや？と悪い予感（故障だった）。台  
風のときや、風の強い冬の夜など、あの小屋は大  
丈夫かな、とつい心配してしまふ。翌月そこ  
行って小屋があると、なぜかほっとする。

ある月に訪れてみると、小屋も老人もすべて無  
くなっていた、ということが現実にあるかもしれ  
ない。

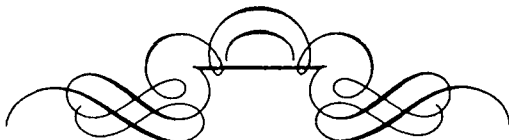
だが、老人から株分けしてもらったいちじく  
の木は、いつまでもわが家の庭で実をたわわに実  
らせつづけることだろう。

## 大学院入試受験顛末記

名古屋市守山区 柳澤 幾美（37歳）

猛暑の一日であった。その日も私は朝からだ  
だらの家事を終え、洗濯物を干し終えたベランダ  
から、ぼんやり外を眺めていた。そこには、真夏  
の町の風景がゆらめいていた。

と、私の視界に、ふと飛び込んできたものがある。  
ぼうつとした私の目の前に、ドーンと聳え  
たつ、その正体。それはすぐ近くの某女子大学のシ



ンボル、時計台であった。

大学か、懐かしいな、と思った。そういえば、大学院の入試って九月ごろだったんじゃないかしら。そう思いつくのと同時に、私はもう電話の受話器をとって、その大学の電話番号をブッシュしていた。

それから約一カ月後。某大学大学院博士課程前期入試受験者控え室に、大学卒業前の若い女性たちがまじって、恐れ知らぬ三十七歳の受験生が一人、でんと座っていた。

何だか誇らしいような、恥ずかしいようなそんな気持ちでいると、ふいにその待合室のドアがどんと開き、「ああ、遅れた、遅れた」と言っ、どたどたと入ってきた女性がいる。どう見ても、五十代半ば過ぎの「場違いなおばさん」(自分のことをすっかり棚に上げてしまっている)である。えっ、この人も受験生？

午前中の二科目の試験を終え、午後からの面接を前に彼女といっしょにお昼を食べた。

「私、孫もおるんだわ。こんな年で大学院の試験なんて、やっぱ無理だがね。もう、ぜんぜんわっかれせんかった(全然わからなかった)。むずかしかんわ(むずかしくてだめだわ)」

そのことを聞きながら、ほとんど解答用紙を



うめることができた私は、万一私が落ちて、この人が受かることはないわ、と、少し救われたような気持ちになっていた。

そして三日後。私は、不合格の通知を茫然と眺めていた。とにかく、試験の前に少し面識ができた教授のところへ行っ、こよう。

「ああ、きみね。全くできてなかったよ。もうめちゃくちゃ。だいたい一週間や十日で無理だよ。一年くらい準備しなきゃ」と教授。

「あの、やっぱり年かなあ。もうひとりのおばさんもそう言っていました」

「えっ、あのおばさん？ あの人、ほとんど満点、一番で合格したよ」

その言葉を聞くや否や、私はすでに来年再受験する決心を固めたのだった。

(え・梅村 庵)



## 大相撲ダイジェスト

神奈川県綾瀬市

### 宇都宮典子

私の好きなテレビ番組は「大相撲ダイジェスト」である。大相撲の場所中（奇数月の十五日間）、テレビ朝日、午後十一時十五分から三十分間、土曜日は十一時から、日曜日は一時間放映される。

好きな理由のその一は、タイトル通りダイジェスト版で、幕内力士の全取り組みを三十分で

放送すること。

その二は、解説するゲストは各部屋の親方だが、力士現役時代には寡黙だった人がよくしゃべったり、アナウンサー相手に組み手など実演したり、意外性があることだ。

例えば、元大関・若島津は話し方に特徴があって面白い。「あのですね、……はね、……でね」と語尾にねをよくつける。今は松ヶ根親方である。

その三は、短時間勝負なので、生放送を見た日でも、もう一度じっくり見たいと思うなどである。また、NHKの実況放送ではないようなコメントが楽しい。カラオケ百曲を歌える春日富士とか、絵筆が玄人はだしの巨砲etc……。

局に問い合わせたところ、昭和三十五年七月場所から放送しているとか。たいへんな長寿番組である。私はそれほど前から



は見えていないが、昭和四十五年に結婚しそれ以来のファンである。

帰宅時間の遅い夫が、夕食？というより夜食をとりながら見ていたのを今思い出した。若手の千代の富士が、そのころ私たちの推奨株であった。

二年ほど前から日曜日だけ、放送時間が一時間になった。これはブームのためと思うがダイジェストはダイジェスト。三十分で充分であると思う。

月～金 23時15分～23時45分  
土 23時～23時30分  
日 23時～24時

## ひょうりどできるもん

大阪市旭区

宮崎 貴子（30歳）

毎回必ず楽しみに見ているテレビ番組というのがほとんどない私だが、これは結構いける

ぞ!」とお勤めするのが、NHK教育テレビの「ひとりでできるもん」である。

「何じゃ? ふざけた題だな」と思われるかもしれない。そりゃそうだ、何たって子供(幼児も含む)向け料理番組なのだから。

たかが子供向けだろう、なんて馬鹿にしちゃあいけない。二十分のこの番組、結構面白くてためになるのだ。

この春からは主人公が替わって、小学二年生のテンちゃん(男)とレンちゃん(女)の二人が色々な料理に挑戦する。去年までは小学四年生(だったと思ふ)の舞ちゃんが、そりゃもう色んな料理を作ってくれた。

例えばクリスマスシーズンなら簡単な(本当に簡単!)ケーキの作り方。ケーキ作りにはあまり自信のない私でも「これなら簡単でとっても可愛い」と感

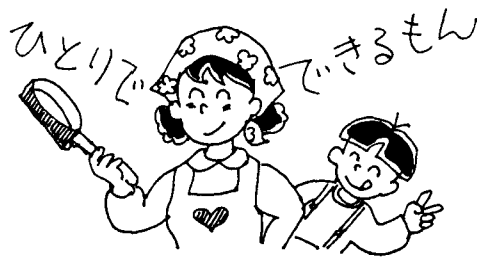
激して思わず作ってしまったほど。

そして子供番組らしく「なんでも歌で作っちゃおう」という試みが楽しくってなぜかすんなり頭に入るのだ。おいしいアップルティなどは、友達が遊びに来た時に歌を歌いながらさっさと作れて重宝している。

ちょっとしたパーティでは、寒天やゼラチンを使ったユニークデザートやひんやりアイスクッキングのオンパレード。子供だけでなく大人にも喜ばれる私の自慢料理になっている。

この番組のおかげで随分カレーのレパートリーも増えたとし、手作りマヨネーズも今や我が家には欠かせない。

また単に料理の作り方だけでなく、スパゲッティで計る油の温度の計り方や、飲茶の席でのエチケット、ミルク(牛乳)の歴史、上手な包丁の運び方など



お料理に関する豆知識も歌に乗せて、楽しく紹介してくれる。とにかく大人も充分楽しめる私のイチオシ料理番組の「ひとりでできるもん」、毎日二歳の息子と楽しく見ている。

月々金 16時40分~16時55分

(再放送あり)

## 好評のピアノレッスンシリーズ

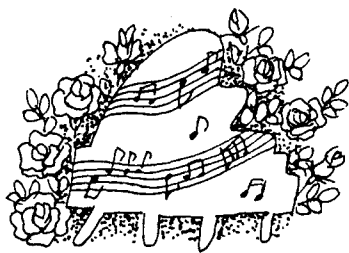
千葉県船橋市

大味 恵子(39歳)

モーツァルト生誕二百年の年に、NHK教育テレビで「ピアノでモーツァルトを」という番組が放送された。講師は、モーツァルトの演奏にかけては定評のあるワルター・クリーン氏であった。生徒もウィーンに留学中の日本人音大生ということで、師弟共に一流であった。

ずっと以前、「ピアノのおかげいこ」という小学校の生徒を中心としたレッスン番組があったのだが、今度のは、さらにレベルアップしたものだ。いわばピアノの公開レッスンが茶の間に届けられたわけで、ピアノを勉強する者にとっては待望の番組であったと思う。

まず驚いたことは、留学する



ほどの優秀な人たちがクリン氏に次々と欠点を指摘されていることだった。モーツァルトの曲は、楽譜を見る限りは決して難しくはない。番組で扱った曲の大部分を私も以前、弾いたことがあった。

しかしクリン氏の指導を拝見しているうちに、私は愕然とした。今まで何と無神経に弾いていたのか。モーツァルトなど弾いていなかった。ただ楽譜

をなぞっていただけだったのだ。音楽の神髄を極めた氏の細やかな指導に目の覚める思い。長らくピアノのレッスンから遠ざかっていた私にとって、新鮮な感動を与えてくれた密度の高い番組であった。

次の年には「ショパンを弾く」が始まった。講師のシプリアン・カツァリス氏は、表情豊かに、生徒に具体的なイメージを与えながら上手に指導をされる方だった。氏の人柄も親しみやすく、とてもわかりやすいレッスンだったと思う。蛇足だが、この後、氏のファンクラブまでできたそう。

さてこのシリーズは「ベートーヴェンを弾く」を経て、この秋から「ピアノで名曲を」にバトンタッチされた。今までのシリーズと違うのは、一人の作曲者の曲だけを取りあげるのではないこと、生徒も小学生か

ら大人まで幅広い年代層が登場することである。このほうが見ている側にとっても、親しみを感ずるかもしれない。ピアノ大好き人間の私にとってまた楽しみが一つ増えた。このシリーズがまだまだ続くことを願ってやまない。

月 21時25分〜21時55分

(再放送あり)

## 中村「鬼平」に酔う

埼玉県川口市

杉山 千佳

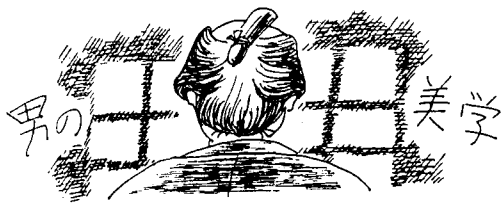
私がその日、その新番組の時代劇を見たのは、まったくの偶然としか言いようがなかった。退屈しのぎにチャンネルをひねり、

「へええ。ナカムラキチエモンって結構カッコいいじゃん」とつぶやいたものだ。

が、十四、五のころから必殺

シリーズを欠かさず見、時代劇にはかなりうるさいほうだと自認している私である。五分ほど見たところで、

「これはいつものヤツとは違う」



と看破した(いつものヤツと言うのは、実は先の副将軍とか、実は將軍様なのだと言組が終わる二十分くらい前に名乗りをあげて、悪に土下座をさせる例の

アレ。

鬼平犯科帳。

「フジテレビがこれを作ったのか？」

私はうなった。

いやいや、一回目だからセツトや役者にお金かけてるのよ、二回目からは例のアレになってしまふのよ。と思いきや、画像がいつも凝っている。平蔵の食べる食事にまでいちいち配慮が行き届いている。レギュラー出演者が個性派ぞろいだ。毎回のゲストもすげえ奴ばかりだ。しかもみんな渋めのいい演技をする。筋も趣向を凝らしてあり、完成度がめっぽう高い（ワンシーン毎に洋服を着替え、惚れただの嫌いになっただのと流行のお店をはしごしながら、仕事もしないで悩んでいる若者向けのちゃっちゃいドラマなんか足元にも及ばない渋さ、奥深さ！）。

私はすっかりこのドラマの「虜」になってしまったのである。

今までは、「おやじの読むもの」として敬遠していた池波正太郎先生をむさぼるように読みふけり、

「やっぱりこの長谷川平蔵役がハマるのは、中村吉右衛門さま以外には絶対いないワ」

などと溜め息をつく始末。

ドラマには見事なウソをついてももらいたいと常々思っている。六十分なら六十分で、その時間をめいっばい使って一分たりとも無駄にしない、凝縮された美しいウソを見せて欲しい。それが、なかなかない。

「鬼平」は、いい原作をいいドラマにしようとスタッフも役者も一緒になって、こだわってこだわって作ったさまが画面からひしひしと伝わってくる。

お金をかけてるな、というの

もううれしい。今まで知らなかった池波流「男の美学」をきっちりと娯楽ドラマに仕立てあげている。これをおやじや、お年寄りだけの楽しみにしておくなんてもったいない。

そして私は「おやじ主婦」とかげ口を叩かれながらも、せちがらい今の世の中ではやお目にかかることのない「男気」や、鬼平（吉右衛門さま）の渋い色気に惚れ惚れしながら、日々のストレスをこの時間だけ気持ちよく忘れるのである。（現在は放映されていません）

## フル・ハウス

新潟県新潟市

風間 真弓

最初は単なる子供向けドラマと思っていたが、一度見ただけですっかりファンになってしまった。



ドラマの舞台はアメリカのサンフランシスコ。内容は「三姉妹と父親、それに亡くなった母親がわりに家事・育児もやっている同居人の男性二人の日常生活あれこれ」と言ってしまうえば何でもないようだが、このドラマの底を流れる暖かな愛情と、あちこちにちりばめられたユーモアは、ほんとうにすばらしい。

気分さえない時でも、このドラマを見ると心が暖まり楽しい気分になれる。私も子供達も「フル・ハウス」のある水曜日が待ち遠しく、この日ばかりは夕飯もサッサと済ませ六時半にはテレビの前に集まっているといった調子である。

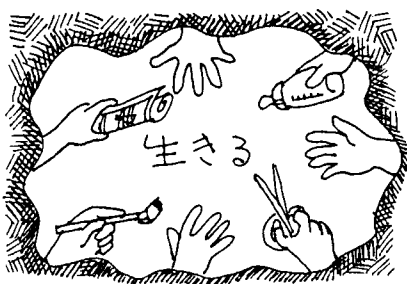
保証します。  
NHK教育テレビ  
水 18時30分～19時

**生きる**  
鳥取県八頭郡  
林 啓子（42歳）

BSSテレビの土曜日の午前十時三十分から始まる「生きる」が、私の楽しみにしている番組である。

それは、日本全国のさまざまな人達にスポットを当て、その人の活動と意見を紹介する番組である。登場人物が語っているあい間にその人の活動状況を映像で流し、それにナレーターの説明が入るといって構成である。たった十五分の番組であるが、うまく編集されていて視聴者に訴えかけるものがある。

ここで少し、今までの登場人物を紹介してみよう。おじいさん、おばあさんの人形を多く作っている人形作家、育児ノイローゼから脱した主婦、子供が登校拒否児になったため、登校拒否児と寝起きを共にする施設を作った元教師、どこにでも出張演奏する楽器奏者、停年後主夫となって家庭を支えている男性、なまずの飼育をする人など、ありとあらゆる人達が登場する。次はどんな人？と楽しみだ。



だ。

ちなみに、十月十五日の放送を紹介しよう。山谷の労働者に医療相談をしている、宮下さんという人が登場した。相談を受けている労働者の中には、人生半ばにして無念の死を遂げた人もいるという。そういう人達を描いたのが「山谷曼陀羅」である。

曼陀羅絵を描くことによって、その人達の供養となり、また今生きている労働者に生きる力を持って欲しいという願いを込めて描いているそうだ。山谷の労働者の中には、どん底からはい上がって自分達の生活をかちとった人もいる。その人達が宮下さんをアメリカ旅行に誘ったという。それを話す宮下さんの顔がとても嬉しそうであった。

土 10時30分～10時45分

（え・小宅昌校）

# 骨粗しょう症にならないように

## 腰痛は危険信号

私は現在五十二歳ですが、DIP法という手のレントゲンを撮って調べた結果、骨は六十歳の人と同じと診断されました。また血液検査では私の年齢なら〇・九ぐらいのところ〇・二という、体を動かすのに必要な最低限の数値でした。不安を隠しきれない私に、「治ります」と、医師はきっぱり言いました。

そんな訳で、ただいま治療中です。それとともに更年期真っ盛りで、ホルモンのアンバランスからくる症状に悩まされました。のぼせ、発汗、頭痛、肩こり、不眠、脱力感、けんたい感、集中力

の欠如、イライラと、自分でも何が何やら分からない状態でした。それらの症状はホルモン療法を始めてからおさまっています。

骨粗しょう症は普通、六十五歳くらいまで自覚症状がないそうです。では私はどうして分かったのかというと、腰が痛かったからです。

一年前に整形外科で、腰が痛くて診てもらったとき、筋肉痛でかたづけられてしまいました。そのころ私は、骨粗しょう症のことはよく知りませんでした。が、今にして思えば、その時すでに始まっていたのです。小柄でやせた女が更年期で腰が痛いといえは、「骨粗しょう症では

新潟県中蒲原郡 小林智枝（52歳）

ないだろうか」と疑ってみるのがプロじゃないかと、今では思うのですが、そのとき私を診てくれた若い医師は、「更年期ってどんなになるんですか」と逆に私に聞く有り様でした。そしてフィルムを見ながらつぶやいたのです。「それにしても薄い骨だなあ」

私はその一言に悪い予感がして、ずーっと心の奥に引っかかっていました。

腰痛のために退職し、体に無理なことはしないで一年が過ぎ、歩いたりプールへ行ったりして、回復への努力を重ねてきたにもかかわらず、悪くなるばかりでした。



一方、新聞やテレビで盛んに骨粗しょう症という言葉を見かけるようになり、「薄い骨」という言葉から、もしかしてと考えて、別の整形外科で検査をしてもらって分かったのです。

整形外科といえど、骨粗しょう症に対する認識はまだ浅いようです。

いつも早とちりな私は、これでようやく腰痛の原因がはつきりしたと、うれしくらいでした。しかしそれは甘い考えで、ほんとうは怖い病気だったのです。

今まで家庭で何気なしにやってきたことが、次々と出来なくなったのです。やれば出来るのですが、やると必ずガクンと具合が悪くなるので、後が怖くて出来ないのです。布団干しは厳禁です。しゃがんだり、中腰になったりはよくないし、重い物は持てません。掃除が思うように出来ないのは困ってしまいます。いつも腰が痛く、腰から背中の内側がただれるような感じがします。

ある時スーパーで、トマトジュースの安売りをしていたので、自転車だからいいかなと考えて十個かごに入れ、ほかに果物や牛乳などの重い物を入れて、レジの台によいしょと持ち上げたり、自転車まで運んだりしたら、その後骨がミシミシと痛くなりました。梅雨だったので、なおさら悪かったのかもしれない。ひじや膝までシクシクと泣いているように痛み、骨にひびが入っているのではないかと悩みました。

朝目覚めると、体が痛い一日の始まりに悲しくなるほどでした。そして「いたい痛い病」の人たちの苦しみが、どん

な大きなものだったろうと思いやられるのでした。

整形外科の先生には、首から下は全部痛くなると言われました。痛み止めの座薬を一日に二個も使い、三週間くらいして梅雨もあけ、痛みがおさまりました。痛みのひどいときには、憂うつになり、少しでもよくなるとうれしくて、つい動いて悪くなるということの繰り返しです。

家の中が汚れても、「気にしない、気にしない」と怠け者のお墨付きを公然といただいたけれど、いつまで続くかわからなくて、不便の上もない毎日です。今の私には、人々が普通に何でも出来ることが、不思議な気さえるのです。

### 骨は生きている

体の中のカルシウムは九九%が骨と肉にあり、あとの1%は血液の中にあって、心臓の働きをよくしたり、血が出たときに止める働きをしたりして重要なので、不足すると骨のカルシウムから補うため、骨は毎日変わっているのだそうで

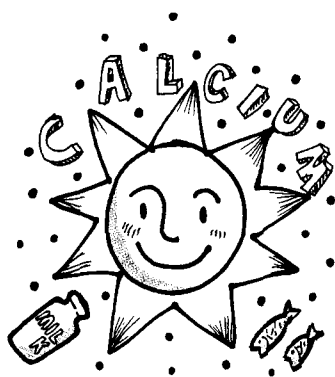
す。

女性の骨は十八歳くらいまでに形成され、二十から三十歳代が「最大骨量」となり、四十代までは維持され、閉経後、骨量はぐんと減少します。従って若い内に、丈夫な骨を作っておかなければならないのです（このことを知るのが遅すぎました）。

女性ホルモン（エストロゲン）は、カルシウムを骨に蓄え、無駄にしないように管理する大事な役目を果しています。閉経後、骨量が急激に減少するのは、女性ホルモンが不足するからです。

またいくらカルシウムを補充しても、ビタミンDが足りないと、骨には蓄えられません。ビタミンDは体を駆けめぐり、カルシウムを集める役割をしています。紫外線が作用すると皮膚の下でビタミンDが作られるので、積極的に戸外へ出るようにと、医師に勧められました。病気が治るためならば、日焼けやシミも何のその、夏の日差しさえもビタミンDとばかりに苦にならず、夫や息子たちと腕の黒さを競っています。

また、骨は適度な運動をすることにより、血液の循環がよくなるとともに、カルシウムを蓄えた骨を強くすることです。できればダンベルなどのように、体に負荷をかける運動がいいようですが、無理をしないで、自分に合った運動



をしたほうがいいようです。

それには歩くことがいいと、専門家が推薦しています。目安としては、一週間

に三回以上、一日三十から四十分、早足で歩くようにとのことです。歩くことの効用は外にも色々あるので、私も出来るだけ毎日歩くようにしていますが、これさえも最初は膝が痛くなりました。無理をしないで、少しずつ時間と距離を伸ばし、今ではもう痛くないし、楽しんで歩いています。

### バランスのとれた食生活

朝、昼、夜とバランスのとれた食事をしていれば、一日に必要なカルシウム量は十分に摂取出来るのですが、ワンプアーンな私には、ちょっと自信がありませんので、牛乳をせっせと飲んでいきます。

四十歳以上の女性は、一日最低六〇〇ミリグラムのカルシウムが必要といわれています（牛乳だけなら三本分です）。

牛乳や乳製品がカルシウムを多く含んでいます。吸収率もずば抜けてよく五〇％で、小魚は三〇％、野菜類は一七％と少なくなります。カルシウム入り食品など出回っていますが、それらに頼らず

不足分を補うくらいに考えて、牛乳や豆腐などの食品から摂取するほうがいいようです。

ビタミンDはバター、レバー、卵黄、魚、キノコ類に多く含まれています。成人の一日所要量は二〇〇IUで、魚類とキノコ類を一日一回は食べたいところですが、飽きてしまうので、やはりおてんと同様と仲よくしたほうがいいようです。

### 定期的に骨量検査を

私は骨粗しょう症になりやすいタイプでした。

母に似てそもそも体質がそうでした。少し調子よく食べると胃が悪くなるので食が細く、カルシウムも不足していたと思われます。体が細いので骨も細いし、若いころ運動をあまりしませんでした。これでは丈夫な骨が出来るはずがなかったのです。

何といっても体格のいい人は、丈夫でパワーがあります。食べ物も気持ちがいいくらい食べるので、栄養もしっかりと

れるし、骨も丈夫だろうと思いますが、六十歳くらいになると、体格は関係ないものでしょうか。立派な体格をしている私の知人が三人も、五十代後半に転んだだけで骨折して、大変だったそうです。骨がもろくなっていたからだといえます。

誰でも自分の血圧を知っているように、骨量も定期的に検査し、場合によっては治療することにより、健康で楽しい人生が送れると思います。今までは年をとると腰が痛くなるのは仕方がないと、あきらめる傾向がありました。が、七十歳を過ぎてからでも手遅れでないと、専門家は言っています。

活性型ビタミンDや女性ホルモン剤などの内服を続けることによるカルシウムの増加は、一年間で多くても八%だそうですが、それでも痛みは緩和されるし、骨折しにくくなるそうです。

このところ、骨粗しょう症に対する認識が急速に高まり、治療方法の確立を目指す方向にあるようです。新聞報道によると、

「七月二十一日から新潟市で開催された第十二回日本骨代謝学会では、骨粗しょう症にスポットを当て、薬効などの評価法や診断基準をつくる委員会を学会内に組織し、十月をめどに準備のための小委員会を発足させることを決めた」とのことです。

また、厚生省は九四年度から、六億二千七百万円の予算で、骨粗しょう症の予備軍となる低骨密度者の早期発見が予防対策のなめと位置づけて、十八歳から三十九歳までの女性を対象に、モデル的に全国五百カ所で開催をおこなう予定とのことです。対象外の四十歳以上の女性たちこそ、直面することなので、自分で考えなければならぬようです。これからは乳ガン検診、子宮ガン検診、骨粗しょう症検診で、女性の健康を守っていくたらしいなと思います。

私は回復するのに何年もかかるでしょうが、気長に治療を続けようと思っています。悩んだ後は何事もプラスに考えて、実年の健康作りへの警告と受けとめています。

# 5000キロ

奈良県生駒郡 高松 恭子

ヴェネチア

水曜日午後八時、NHKテレビからいつものテーマ音楽が流れ出す。この、どこか遊びを感じさせるポピュラーなメロディーを聞くと、私はいつも心暖まる思いがする。

「はるばると世界旅」

突然の病気で母を亡くした実家の父が、元気を取り戻したのは、まさにこの番組のお陰なのである。

## きっかけはナポリ

昨年の五月の連休のときだった。実家へ行くといつになく元気な声で父が、この前の「はるばると世界旅」はよかったなあと、話し出した。

「ああ、あのナポリのやね、私も見たよ。貧しいけれど底ぬけに陽気な下町の人たちがよかったね……」

父は人情味溢れる人たちをすっかり気に入ったようで、日本にはもうあんな人たちが少なくなかったと呟いた。そしてしきりにナポリがいい町だと言う。父がこんなに楽しそうに話すのは何カ月ぶりだろう。私は不意に言った。

「お父ちゃん、ナポリへ行くか」

「え？ ナポリへか？」

「ナポリだけやないで、行きたいところへ連れて行ったらげるで。三週間ほど休めるか？」

「うーん、ヨーロッパは死ぬまでに一回行きたいと思うてたけど三週間か……、考えとくわ」

私は意外だった。仕事を優先させるはずの父が即座に乗ってきたからである。考えておくとは言うものの、その返事には（行く）という決意が窺われた。

父はこのとき七十五歳、まだ現役で働いていた。小さな会社を経営していて、何よりも働くのが好きなことと後継者がいないため、この年までやめられなかったのである。しかし母を亡くして働く意欲が失せたのか、五月の株主総会後に代表を降りることになっていった。だからそう気にせず休むことはできそうだった。しかし七十五歳の心臓の悪い父を連れて、個人旅行が可能だろうか。父は荷物を自分で運べるだろう

# 父と旅した



か。

大丈夫だろうか……家に帰ってから  
も迷い続けていたとき、テレビから流  
れてきた谷村新司が歌う「<sup>きざし</sup>階」とい  
う歌が私に呼びかけた。

♪行かなけりゃ行かなけりゃ悔  
やむ気がするうゝ

そうだ、いま行かなければ私はいつ  
かきつと悔やむだろう。迷いはふっ切  
れた。私は父を連れて行く決心をし  
た。幸い夫も賛成し同行すると言っ  
てくれ、父の荷物は持てるだけ持つてや  
ると言う。しかし私は、父には自分で  
荷物を持たせるつもりだった。自分で  
荷物を持ち、自分の足で歩き、自分の  
肌でヨーロッパを感じとってもらいた  
かった。苦労は多いだろうが、業者  
ペースのツアーにない感動を味わっ  
てもらいたかった。

私はさっそく父に確認を取り、翌朝  
一番に格安航空券を扱う業者に何件か  
電話をし、かなり安い往復チケットを  
手に入れた。往きも帰りも一切変更不  
可、ストップオーバー不可、キャンセ

ル無効というリスクの大きなチケット  
なので、もうあとには引かれない。

私は父に内緒で旅行期間を三週間か  
ら二十六日に延ばした。連泊しながら  
ゆったり旅するには三週間は短すぎ  
る。慌ただしい旅は年寄りにはかえっ  
て疲れると思ったからである。

旅行が決まってからの父は、見違え  
るように生き生きし出した。隣に住ん  
でいる姉によると、毎日のようにルー  
ペを使ってヨーロッパの地図を飽かず  
に眺めていたという。

こうして父親連れの、イタリアを中  
心とした行き当たりバッタリの旅が始  
まった。

旅は父の希望でパリのモンマルトル  
の丘からスタートした。パリ市内を  
ざっと観光したあと、いよいよユーレ  
イルパス（ヨーロッパ十七カ国国際列  
車の一等車乗り降り自由周遊券二十一  
日用）を使っただけの旅である。

父をナポリへ連れて行ってやろうと  
いうのがこの旅行のきっかけであった  
が、実は私にはナポリなんかより、

もっとも父に見せてやりたい町があった。それはフランスのマルセイユである。

## 父と私のマルセイユ

ことの始まりは今から三十年前、私が十二歳のときに父が買ってくれた一冊の再話本だった。

デュマ作「モンテクリスト伯」

少なくともこの一冊は、それ以降の私の人生に十分すぎるほどの彩りを与えてくれた。物語のおもしろさもさることながら、とりわけ私を魅了したのは舞台となった南仏の港町マルセイユの描写だった。

マルセイユへ行きたい、大人になったら絶対マルセイユへ行こう、そんな思いで私は青春時代を過ごした。ある日、この思いを父に語ると、父は言った。

「お父ちゃんのことものは船で何カ月もかかってヨーロッパへ行っただけで、船の着くのがマルセイユや。今はパリやけど、あのころヨーロッパの

玄関はマルセイユやった」

私は、父も若いころ西欧に憧れていたに違いないと思った。マルセイユという響きには、父も私も知らない西欧文明の香りがした。だからこそ私が二十代半ばになってようやくこの思いを

実現させたとき、父にもこの町を是非見せてやりたいと思ったのである。

あれから十五年、あのとき急行で八時間もかかったパリーマルセイユ間はTGV（フランスの新幹線）のお陰で四時間半で行かれるようになった。持



フランスからイタリアへ 国境駅ヴェンティミリアで父と夫  
手前のキャスター付きバックパックが父のもの



北イタリアのマッジョーレ湖で湖上遊覧

病の不整脈も何のその、父は喜々としてマルセイユに足を踏み入れた。

この港町で三日を過ごした私たちは最後の日、名物のブイヤベースを食べた後、町のはずれの高台にのぼった。マルセイユ大学の校庭でもあるこの場所は市民の憩いの場にもなっていて、マルセイユの旧港全体を見渡すことができた。

夜の八時だというのに白夜のためあたりは真昼のような明るさだった。入り江には無数のヨットが停泊し、地中海の青と帆の白さが鮮やかなコントラ

ストを醸し出していた。

まるで一枚の絵のようなこの光景を飽かずに眺めていた父がしみじみと言った。

「まさか生きてるうちに来られるとは思わなかったなあ……」

この日の朝、父は初めて留守を預かる会社に国際電話をかけた。

「いまマルセイユや、フランスのマルセイユに来てるんや」

相手はおそらく仕事のことを話しているのだろう。父はうわのそらで返事をしながら再び言った。

「いまマルセイユや、え？ 場所か？ えーと、パリからずーっと下のほうへこう来てなあ……」

手振り身振りを交えながら嬉しそうに話すその様子は、まるで小学生のようだ。

「うん、いまマルセイユや、いい町やで」

電話料金が気になる私におかまいなしに、父はこの同じ言葉と同じ電話の中で四回も繰り返したのである。

## 老人連れ旅苦勞話

旅は意外にスムーズだった。私にとっては長時間座りづめで、最大の苦痛である往復の飛行機も、父はさほど苦痛ではなさそうだった。戦争の恐怖体験を持つ父には、撃ち落とされる心配もなく、次々に食事や飲み物が出てくる飛行機は、「昔は船で二カ月かかったんやで。半日で運んでくれるんやから結構な世の中や」ということになる。改めてむかし人間の我慢強さを見せつけられた。

苦勞したのは、父自身行き当たりバッタリの旅に慣れていないことであつた。老人独特の心配症がしょっちゅう頭をもたげてくる。

今夜の宿はすぐ見つかるだろうか、乗り継ぎ列車に間に合うだろうかなどなど。だから常に早め早めに行動しないと気が済まないのだ。

「あしたは七時に起きましよう」と夫が言う、父は七時には身繕いを済ませ、いつでも出発できるよう準備して

いる。ところが夫は七時に起きて洗面と着替えだけで二十分はかかるのだ。

テレビを見てもわからず外国語の新聞も読めず、部屋でじっと待っている父が可哀相で、私はよくホテルのロビーに父を連れだした。私たちの泊まるホテルはたいはい小さいので、フロントマンはきさくに話しかけてくれる。「ほら、お父ちゃんにこの町はどうですかって聞いてはるで」

「今日はどこへ行くのかって聞いてはるわ」

言葉はわからないのにこういった人との関わりが父にはことさらに嬉しいようだった。お互い十分理解しあえなかったとしても、知らない人との暖かい交わりは多少の緊張と笑顔を伴うから、気分を生き生きとさせてくれる。

私が父に味わってもらいたかったのはこの気分なのである。フロントマンの中には、「私にも八十四になるおやじがいてね、いやあ、お宅はまだ若いよ」と言ってくれる人もいた。どこへ行っても、年寄りにきさくに話しかけてく



マルセイユへ向かうTGVの中で

れる人の多いのは、本当にありがたいことだった。

次に気づいたのは年をとると飽きっぽくなることである。絵の好きな父があれほど楽しみにしていたルーブル美術館で、「もうこのくらいで十分や」と言ったことだった。桁外れに規模が大きく疲れたのだと思うが、だいたい

主だったものは見せたものの、ミレーやコロニーにたどり着く前に出るはめになった。

年とった父を退屈させないためには、ある程度の緊張と休息を交互に持ってくるのがいいと思った。そこであまり知られていない観光客の少ない静かな町を訪ねながら有名な町を組み込んでいった。有名な町は観光客も多く、物価も高くどこも同じインターナショナル的雰囲気を持っているので個性は少ないが、それでも誰もがその名前を知っている町へ行くというのは、それなりの満足は得られるようだった。

適度の緊張を保つためには列車の旅はともよかったと思う。ヨーロッパの列車は観光シーズンでも一等車はたいていガラガラで、指定券がないと不安な日本とはえらい違いだ。

ウィーンからひと駅だけ乗ったときには、偶然止まっているのに飛び乗ったら、それがハンガリーのブダペスト発。パリ行きのオリエント特急だったとして、列車好きの父は大喜びだった。

父を連れていてうんと得したのは、ユーレイルパスが、三人の割引で一人につき一万五千円ほど安くなったことと、ホテルで三人部屋を取った場合、これまた家族ルームということでかなり割安になったことである。

滞在費と観光費、食費はすべて父が



マルセイユ駅で

負担してくれたので、私たち夫婦で行くときとちがってケチケチする必要もなかったのだが、まあまあきれいな安いホテルがたいいていスムーズに見つかった。

個人で行くと断然割高になる日本国内と違い、ヨーロッパはやはり個人主義の地域なのである。個人旅行が気楽にできるしくみになっているのだ。現に父よりはるかに年上と思われる老人が二人連れで旅しているのを何度も見かけた。

列車はいつもゆうゆうと座れるし、移動のときの荷物も、父はキャスター付きのバックパックにしていたので背負ったり引っぱり張ったりで思ったほど負担にはならなかった。

旅行中、荷物は自分で運ぶ、洗濯は自分ですするという約束だったので父はすべて自分でやっていた。それでもついつい可哀相になって、たまには一緒に洗ってやつたり重いものは自分のリュックにしまったりで、私自身は結構くたびれた。

## 父の順応性

今回の旅で、老人にとって急に頭を切り替えるというのは、かなりむずかしいことだというのがよくわかった。

父はどちらかといえば順応性のあるほうで、食事なんかもちちちが気をつけて、「和食が食べたくない？」と聞いても、「ゼーんぜん」と、いつも喜んでおいしいワインや生ハム、地中海の新鮮な魚介類に舌鼓を打っていた。



野外オペラを見る



マルセイユ港 シャトー・ド・イフに渡る船を待つ

ところが生活感覚はスムーズに切り替えができないのである。ホテルに日本のように着替えの浴衣がついてないのをしきりに不便がっていた。トリプル（三人部屋）が取れたときにはいいが、別々の部屋のと きなど、ステテコのままでふらりと出てきたりしないかとハラハラしたものだ。父は風呂あがりの散歩にもう一度、服をきちんと着て靴下と靴を履くのが面倒だったようだ。またこちらの列車が日本のように正確に発車しないのも不満だったようだ。「何でこんなルーズなんや」と言う。何分の遅れでさえこれだから、何時間も遅れるのが当たり前前のインドなんかとても旅できないなあと思った。インド旅行をした知人によると、「列車はいいつつ来るのか」と尋ねたら、「いつか必ず来る」と言われたそうだから。

私たちはマルセイユからコート・ダジュール経由でイタリアに入ったのだが、国境駅で乗り換えたとき、たまたま昼で税関の係官はサンドイッチを食

べていた。パスポートを示した私たちに、ろくに見もせず、「行け行け」と言ったのである。

「何でこんないいかげんなんや」と父は言う。

「仕事より楽しく食事するほうが大切な国民性やねん」と言っても理解しがたいようだった。とりわけ勤勉な人生を送ってきた父には、自分を大切にしながら生活を楽しむ西欧の人々が、やや怠慢な人種に思われたようだ。

レストランでやたら時間がかかるときも、「まだか」を連発した。待つというのが苦手なのだ。食事がきたら今度、さっさと勢いよく食べてしまふ。早食いの典型的日本人なのである。これには私のほうがうんざりした。「郷に入っては郷に従え」を父に強要するのは無理なようだった。

イタリアの旅は前年、コロンブスの新大陸発見五百年祭が行なわれたジェノバからスタートした。

つづく

（写真提供・筆者）

# サーブレシーブ

## ノーテンキな 天皇礼賛に疑問

埼玉県所沢市

葉田野妙子

二五〇号の「天皇と私」には心底びっくりした。アメリカで天皇夫妻に出会えた興奮と感激ぶりは、海外で長く暮らす日本人の反応としてわからなくはない。でもどうして、あのような「結論」になるのだろうか。

天皇家のファンになるのは一向に構わないし、現天皇・皇后個人を好きになるのも自由だが、天皇観としてみると、とてもひっかかるものがある。この方も実際に二人に会うまでは別段の関心もなかったというのに、そばに行き、言葉を交わし、握手をしたということまで飛躍してしまふのはなぜなのだろう。

皇国史観の信奉者もいなくなったはずなのに、いまだき天皇を「神」と思う人がいるのだろうか。「日本人というだけで」天皇に愛されていると思う人がいるだろうか。それにこの考え方は、「天皇のためなら何でもします」と簡単にひっくり返ってしまう恐れがある。同時代の人物を神格化することの危険性を歴史はいくつも証明してきた。そもそも人を「生まれながらにして高貴」とあがめるのは人間の差別化につながるものだ。

「なんたって現天皇のお父様の昭和天皇は終戦までは『神様』だったんだから。古来、日本の天皇は『神』として君臨してきたのである。」などという安易な物言いは、見方によってはとんでもない誤解をまねきかねない。キリストを持ち出すに至っては、そんなムチャな！と言いたい。天皇は信仰の対象では決していないはずだ。

この方が、アメリカの大学で社会学を教える立場にあること、多数の若者に影響を与える立場にあるだけに、単にひとりの個人的印象にとどまらないのではと心配になるのである。外国から見れば天皇は今でも国家元首と受けとられることが多いという。「象徴天皇」の定義はあいまいでわかりにくい。しかし、民主主義社会における天皇のありようとは、伊藤さんのとらえ方とは違うのではないだろうか。少なくとも私は、日本人としてのアイデンティティの根拠を「天皇」に求めようとは思わない。

ところで、各種マスコミによって毎日のようにロイヤルファミリーの姿が私達の眼に入ってくる今日このごろ、「わいふ」誌上で、天皇・皇后の大写しの写真を見せられるのもあまり気分のよいものではない。本当に必要な写真なのか、大きさは妥当なのか、編集部の方々のご意見も伺いたい。

## “天皇は神様”という 感覚にシヨック

埼玉県上尾市

青木和子

二五〇号の特別寄稿「天皇と私」を読んで戸惑ってしまった。なんだかとても違和感を感じたのだ。伊藤さんはりっぱな知識人であり、大学で社会学を教えておられる教育者だ。そのような人、しかも戦後生まれの若い世代の人が無邪気に天皇、皇后両陛下に対面して感激にむせぶという気持ちがよくわからなかった。

私はなにも両陛下に個人的恨みはないし、美智子妃の失語症の原因は何なのか、雅子さんは現在皇室生活をどのように感じながら暮らしているのだろうかというミイハリの興味は持っている。

でも、ただニコニコと微笑を振りまかれ表敬訪問をされているお二人に、「日本人というだけで愛されている」「神様に会うような気がする」という感じを持たれたことは信じられない。

控え目に笑顔であたりさわりのないお言



葉を述べることに以上は許されていない皇室というものの現実を考えてみると、そうノンキなことは言えないと思う。

日本国民の幸せを願うだけ、平和を願うだけで、幸せや平和はこないことは自明の理であるし、天皇が「神様」であった時代は国民が自力で考えることを奪われ、悲惨な戦争の道を歩んだことを思い起こしてみると、「神様」なんていらぬ気がする。

明治になり、西欧思想の影響によって掲げられた「四民平等」という理想も実際は生かず、天皇制は差別、侵略の道具として富国強兵へと突入していったのではないだろうか。

天皇のことについて意見を述べるのはタブーに近い。とくに批判的なことを言うには勇気がいる。私はこの「天皇と私」を読んでもどうしてもひっかかるものを感じたので筆を取った。皆さんは、どのような気持ちで読まれたのかとても興味がある。

## 伊藤琴子様へ

兵庫県明石市

伊東空子（42歳）

「天皇と私」を拝見しました。

日本の戦争責任を大学で教えていらっしゃる方、天皇に対する結論にガックリ来ました。

税金がサポートする日本の最大新興宗教にミイハりは止めて!!

古来、日本の天皇は「神」として君臨してきたのかもしれませんが、その「神様たち」は朝鮮半島から来た渡来人です。要するに人間達がやって来て、戦争をして強い者が権力の座についたのです。

現代社会において、植樹祭の「天皇、お手すからの一本」のために、どれだけ多く

の日本の雑木林、山道などの自然が破壊されるか？

天皇制を日本独特の「あいまい文化」の象徴とみなす外国人ジャーナリストの見方はおもしろいと思います。

どんな中身の無い日本人にも「いんちき」と評価される新興宗教。聞ければ「教祖様は靈的に特別なお方」「神の地上代行者」と洗脳され暗示にかけられてしまします。

日本人は、歴史と社会的事実に基づき「天皇家」を再考する必要大ありではないでしょうか？

## 私もお会いした 美智子皇后

東京都品川区 潮田京生子(33歳)

伊藤琴子さんの「天皇と私」をワクワクしながら読んだ。実は私も以前、天皇、皇后両陛下にお会いしているのである。

正しく言うところ、間近でお姿を拝見しただけなのだけれど。

それは、昭和六十三年四月、瀬戸大橋開通の記念式典にご出席のため、岡山新空港

に到着されたお二人に私は遭遇したのである。

当時、私はメガネ・ファッションディレクターという仕事のため、その三日前から岡山を訪れていたのである。

やっと、その仕事から解放されたのは、瀬戸大橋開通の前日だった。

疲れて重くなった体をタクシーに沈めて私は空港に向かった。

出発の手続きをしていると、警備員が近づいてきて、「お二人がまもなく到着されるので、そこから動くな」と言う。ムツとした。が、仕方がない。言われるままそこに荷物を置き、立っていた。すると、前にいたビジネスマン二人の話が聞こえてきた。

「これじゃあ、(出発時間が)ずいぶん遅れるなあ。会議に間に合いそうにないな」  
いら立っている様子だった。私もつられてだんだん落ちつかなくなってくる。

「まったく運が悪いよな。こんな日にぶつかるなんて。あーあ、早く帰りたいよ」

心の中はこのつぶやきでいっぱいになっていた。

空港の外では、日の丸の小旗を持った子どもと大人がぎっしりと並んでいる。その旗が、いつせいに揺れ始めた。私は、目の前の階段に目をやった。すると、すーっとお二人が現われたのである。それは、まるでテレビを見ているように鮮やかで、とても現実の出来事とは思えなかった。

陛下の一步あとを美智子様が手をそっと振りながら、ゆっくりと階段を降りられていく。

うすい水色のスーツが、だんだんとはっきり見えてくる。あのビジネスマンたちは、直立不動で頭を下げている。まわりの誰もが同じように動かない。私もあわてて頭を下げた。

しかし、目はしっかりと美智子様を捉えている。なんてやさしいんだろう。なんて暖かいんだろう。心臓が高鳴り、熱くなる。同時に、涙がジワッとわいてきた。

お二人が横を通りすぎる時、隣のおばあさんが両手を合わせて懸命に拜んでいた。そして孫に、「これでいつ死んでもいい。冥土のみやげができた」と言って泣いていた。

機内で私は、それまでの疲れやいら立ちなどすっかり忘れて、その余韻に浸っていた。

とてもしあわせな気持ちだった。確かに、ずいぶん遅れて飛行機は離陸したけれど、もうそんなことはどうでもよくなっていた。

あの時、ほんの少しでも美智子様の気高さに近づきたい、近づこうと誓ったのだ。今、私はそれを思い出した。そして、再びあの熱い思いが胸にわいてきた。伊藤さん、ありがとうございます。

## いわれののない尊敬と差別

奈良県生駒郡 高松恭子

隠岐の島にまつわる一つの思い出がある。

十八年前、私は鳥取の大学病院に三カ月入院していた。ある日新しく入ってきた患者に、「お宅はどこですか？」と聞いたら、その人は伏目がちに「はあ、島です」と言った。

私は島という地名があるのかと思っていたら、同室の人が「島って隠岐の島のことやがね」と言った。そういえば隠岐から来ている人がほかにも何人かいたが、地元の人たちは彼らのことを名前を言わず、「島の人」と言っていた。「あの人、島やて」と小声で囁かれる響きには、まるで罪人を目指すような差別を感じられた。

確かに政治がらみで流された人の末裔もいたかもしれない。しかしたとえそうであっても、現在島に在住しているというだけで、なぜ差別めいた目を向けられなければならないのだろう。

私にはロマンの対象でしかなかった島が、地元では差別の対象になっている事実に愕然とした。

だから「近くて遠いカントリー・パラダイス」を書かれた西田さんが、何気なく質問された「ご先祖は何をして流されたの？」という言葉が気になったのだ。

話は変わるが、「天皇と私」を書かれた伊藤さんが、「クリントン」は所詮平民の出であるが、私たちの天皇陛下は生まれながらにしてとても高貴な方なのよ」と、書いて

ておられる。これはもちろんジョークで書かれたのだと思うが、私だって伊藤さんと同じ体験をしたならば同じように舞い上がってしまったかもしれない。これが天皇の持つカリスマ性のおそろしさなのである。これを読み手が当たり前に感じることに私はこわいと思う。

どちらも些細なことである。しかしその些細なことが現在に至るまで数知れない、いわれののない尊敬や差別を生んできたということも心に留めておいてほしいと思う。

## 二四九号の幻の水は……

栃木県鹿沼市 神山寿子

二四九号の栃木の山奥の幻の水「鉄鋼水」（注・正しくは鉄鉱水でした。編集部）は、ここ栃木では有名な水で、何にもよくタイガーバームみたいな水だと言われている。

TVや雑誌で紹介されたこともあり、各地から多くの人が、水を求めて山奥へ入っていくという。



「わいふの読者にも、「ゼヒ私も……」という人があるかもしれないが、十月六日付の読売新聞栃木版によると、十一月より鉄鉾水の取水はできなくなるといふ。

この鉄鉾水には、レッキとした取水権を持った人がいて、その人は取水口の周辺の国有林もちゃんと借りており、今まで取水できたのは「ご好意」であつたらしい。

しかし、二四九号の中でも「ゴミの山」というくだりがあつたように、登山者によつて周囲がひどくよごされ、水も汚染されかねない状況になり、取水口をふさぐ事

態にまでなつてしまつた、という報道である。

水を求める人には、取水許可保有者によつて、一リットル千五百円で販売されている由。

高いか安いかは、一口では言えないけれど、山登りをしなくて楽だと考える人より、苦しい思いをして取りに行かなきゃ意味がない、と思う人のほうが多いような気がします、いかがでしょうか。

## 有償ボランティア

神奈川県横須賀市

細野清美

二五〇号の大塚さんの、「ボランティアとは？」の内容を読んでびっくりした。老人ケアを専門とする団体に、千人もの人が登録しているとは、すごいことだ。

当地にもボランティア団体がたくさんあり、市が建てた立派な建物にボランティアセンターの事務所を持ち、たくさんの助成金をもらっている。しかし実際の活動内容といへば、老人の話し相手、買物、病院へ

の付き添いなど、比較的軽いものである。また、わたしの友人も長年登録しているが、一度も声がかかったことはない、と言っている。

七年前、これでは本当に困っている人のニーズに応えられないと、ボランティア団体を抜け、たすけあいの会を創設した人がいた。それが私の属している「たすけあい横須賀」という会である。気持ちはボランティアなのだが、なぜ有償にしたか。それは継続的な援助を責任をもってやり遂げるため、また依頼者の気持ちの負担をなくするためもある。

大塚さんの属している会は、よい活動をしているようだが、千人ものボランティアの人をコーディネートする人（各地域）にはなっていると（思うが）は、何人いるのだろうか。

わたしの属している会は百七十名くらいで、六名のコーディネーターである。活動に行く人が行かなくなった場合は、別の人を手配し、依頼があればすぐ家庭訪問に行く。コーディネーターは週一回事務所に詰めるが、無償に近い働きである。活動し

ている人も、市のヘルパーが市からもらっている半当での半分くらいだ。それでも市へ登録しないのは、自分たちでやっているという喜び、また大塚さんも言われるように、生涯学習の場としてふさわしいと思える会だからだろう。

確かにボランティアとは、無償のことである。当地でも「ふれあいお弁当（お弁当の宅配）」が、市の音頭取りで始まるが、市は週四日の配達をボランティアに頼むらしい。が、これを有償にするという話も伝わっている。そうすると行政も、今後は有償ボランティアのような考えを認めるようになるのだろうか。

## 避妊リング

埼玉県大宮市

服部親子

二四五号であった。「婦人科というところ」という文章を覚えていた方があったろうか。避妊リングについて書かれてあったが、少なくともサープレシープに反論の掲載はなかった。「わいふが読者でリングを

使用している人は、ほとんどいないということなのだろうか。

私の場合、装着は三年以上も前になる。

第二子が一歳半のころで、子供はもういいと思ってた。仕事を中断したくなかったし、経済的にもきつかった。なにより、遅れるたびに味わるあの恐怖から逃れたかった。その一心でほとんど下調べもしないままに、病院へ飛び込んだ。

そして、あの痛みと貧血は石川さんと同じで、予想だにしていなかったのだが、違う点もいろいろあった。いちばんの違いは、外す時期が決まっていなかったこと。取り外しの時期を尋ねたところ、「いや、今はよくできているから、大丈夫」という答え。かといって明確な時期を伝えてくれるわけでもない。その後一年半ばかりは定期検診を受けたものの、忙しさにかまけて、一抹の不安を抱きつつ、ずっとそのままにしていた。

けれど、先日ほかにも不安があり、やっと重い腰を上げて受診に行ったが、リングに関してはきちんと納まっているというところで何も問題はなかった。もちろん、異物

を入れているのだから、一年に一回は定期検診を、とは言われたが。

それにしても、なぜこうしたことを記した書物が出回っていないのか、不思議でしかたがない。料金も、出産と同じで場所によつてさまさま。近くの産婦人科では四万円ぐらいと言われたのに、受診した病院では一万円ぐらいと言われ、実際に一万円でちょっとおつりがきた。ただし、リングが合わない人もいるそうで、その場合取り外さなければならず、一カ月後にもう一度病院へ行かねばならなかった。

リングについて詳しい記述のある書物をご存じの方、いらっしやいませんか？

## 本名と匿名・ペンネーム

新潟県上越市

大井二美

二四九号の特集「夫の職業と妻の生活」に投稿する際、私は悩んだ。「本名で投稿していいものだろうか。そうするのなら、夫に断わっておいたほうがいいんじゃないか」と。

地方の、あまり大きくない市。職業がわかれば、勤務先も見当がつく。それにこの辺りでは減多にない姓。私を知らなくても、夫のことだとわかりそうである。

夫の仕事関係の人が気付いたら……。

「あの人って家庭ではこうなんだ」などと色眼鏡で見られたら、夫に申し訳ない。また、夫の耳にでも入ったりしたら、「なんでプライベートなことをここまで書くんだ！ それに、俺に対してこんなふうに思ってたのか！」と、大喧嘩になること間違いない。最悪の場合、上司の耳に入ったら、次の異動に不利になったりしたら……。

こんなふうに悪いほうに考えてしまうのは、あまり好意的ではない内容だったからだろうか（実際、他の四編には「応援しているわよ、がんばってね」という筆者の姿勢が感じられたが、私のだけ違っていた）。

また、そういうつもりはないのだが、私はどうも実際にあったことをありのままに話し（書き）過ぎるらしい。「正直ね」「ここまで知っていいのか、というくらい大井

さんちのことを知ってしまった」と言われたことがあるのだ。今回の投稿も、書き過ぎてしまったのだろうか。

「こういう内容のこと、投稿するからね」と夫に話す勇気もなく、匿名かペンネームにする決心もつかず、そのまま本名で出した。今のところ、私が恐れていたような反響はない。



これをきっかけに、本名か、匿名・ペンネームかに注目するようになった。

匿名なのは、主に夫の親との問題、不倫、性に関わる内容のようだ。こういった話題だと、名前があってもペンネームじゃないかな、と思ったりする。私も本名では書けないだろう。

また、好意的な内容は本名でいいがそうでないものなら匿名になる、ということはあるのだろうか。

ところで、本名での投稿の中で、夫や親、友人などが登場したりその言葉を引用したりする場合、本人の承諾は必要なのだろうか。この程度なら必要なくてここまで書いたら承諾を得たほうがいい、というものがあるのだろうか。例えば夫の仕事に関する内容で言うと、二五〇号「脅迫された夫の仕事」は、夫の仕事を通して家族に起こった出来事なので断わりなしでも書けそうだが、二四六・二四八号「教育困難校の実態」は夫の仕事そのものという感じになる。断わっているのだろうか。

何か考えや経験のある方、教えて下さい。

# “わいふ”の誌面について

茨城県北相馬郡

大庭<sup>えい</sup>杞子

二五〇号「ワンポイント情報」の河野道子さんの意見を読んで、ああ、こういうふうに思っているのは、私だけじゃなかったんだな。と嬉しかったです。

私は歴史の浅い読者なので、エラソーなことは言えないんですが、私の聞いた“わいふ”の評判は「素人の本音」の読める本、だったんです。けれど、誌面を読んでいると、

「特別な経験をしたことのある素人だけの本」という気がして、これだと普通の商業誌とあまり変わらないな、と思い始めたところでした。河野さんと同じように私も毎月の“わいふ”を半分以上しか読んでいません。

これについては、週刊誌を買ったところで、丸々一冊隅々まで読む、なんていうことは絶対ないから、あながち“わいふ”のことばかりを言えないかもしれませんが。



それにしてもsexがらみの読み物は、今の時代、いくらでも他で読めるので、“わいふ”の誌面でまで読みたいくないです。

まあ、最近は素人も玄人も差がないのかもしれないけれど。

そういうわけで「これから購読を続けるのはどうしたものだろう」と迷っていたところでした。でも編集だよりに「これからの“わいふ”を……」と載っていましたので、これからの“わいふ”の誌面に期待したいと思います。

最後になりましたが、西田淑子さんの

「黒潮マンガ大賞入選」おめでとうござい  
ます。

西田さんのマンガの切れのよさに、毎号  
拍手をおくっております。ますますのご  
活躍を期待しております。

## 帝王切開について

横浜市磯子区 十文字<sup>32歳</sup>孝子

二五〇号の「帝王切開から自然分娩へ」  
を読み終わって、「出産は素晴らしい」と



いう藤田さんの意見には同感だけれど、「やっと一人前の女性になった」というのは引掛かってしまった。子供を産む、ということとは、どんな形であれ同じだと思うからだ。

「お腹を切って産んだ子はいくなくないでしょう？」と聞かれたことや、お母さんに「下から産めないなんて女として恥ずかしい」と言われたことが書いてあったが、彼女自身もどこかでそう思っていたのではないか、少なくとも「帝王切開」に引け目（または負い目）を感じていたのだろう。

それは、初めのお産で彼女自身が訳も分からず切られてしまった、ということが大きいのだろう。しかし、大学病院での会話から察するに「骨盤の大きさ」にあるようだし、これはよく聞く話で、とすれば、切ることを勧めた医師たちを全面的に責めることも出来ないのではないか。

私も二年前、「帝王切開」で娘を出産した。その日まで誰もが「自然分娩」を疑わなかったのだが、予定日を八日過ぎ、入院。陣痛を自然に起こすために処置をして三日待ったが全く変化なし。ついに四日目の朝、陣痛促進剤の点滴を始めたら、急にお腹の子の心音が乱れだし切る事になった。後で聞くと、へその緒が首に二重に巻きついていて、下がってくると締まるようになっていたそうだ。

「陣痛が起きなかったのは赤ちゃんが危険信号を出していたのよ」看護婦さんにそう言われた時は、収縮の痛みも忘れて我が身の幸運を神様に感謝したものだ。

「切る」にはそれだけの訳がある。それさえちゃんと納得していれば、なんの悪いところがあるか。死産だったり、生まれても

お産の時のトラブルで子供に障害が残ったりしたら、誰が責任を取れるというのだろうか（私の子の場合は酸欠で脳性障害が残ったかもしれない）。

引け目なんて感じる必要は全くない。「帝王切開」だって「一人前」の出産に変わりはないのだから。

## 前向きの出産に拍手

千葉県流山市 福田豊子（33歳）

「帝王切開から自然分娩へ」を読んで、涙が出そうになった。出産はそれだけで一つのドラマだ。新しい生命が産み落とされる場面は、いつもスリルに満ちている。

帝王切開で産んだ人は、私の身近にも何人かいる。しかし、そのつらさを考えてみたことはなかった。妊娠、出産を経た同じ母親として、皆自分と同じようなものだと思っていた。だが、それぞれの体験は個別のものである。中絶や不妊治療のつらさも、私にとっては未知なるものだ。

出産に対し主体的な姿勢で臨む、という

ことに關しては、私にも思い当たる事がある。二人めの出産が、ちょうど院長先生の休みの曜日になり、週一回そこで診ている医師が担当してくれた。初対面の先生なので不安はあったが、この時すでに私は「まな板の鯉」。

陣痛室にいる私を診察に來たその医師は、「早く生まれるよう、風船のようなものを入れますから」と言つて、いきなり何かやり始めた。陣痛が長びいても自然に産みつかつたし、医者 of 処置があまりに痛いのので、私は「いたゝい！ やめて下さい！ いたゝい！」と叫び続けた。ようやく彼はあきらめた。「せっかく陣痛を短くしてあげようと思つたのに」そう言つて、残念そうに部屋を出て行つた。私は心の中でアカンバーをした。

このように患者を實驗材料のように扱う医者が多い中で、自分の意志を斷固として貫いた藤田さんに拍手を送りたい。

また、藤田さんは「帝王切開で一人めを産んだあと、何げなく人が口にする言葉が胸をいためた」とも語っている。同性から投げかけられる無神経な言葉に傷つく人は

少なくない。出産した人同様、していない人にもそれぞれの事情がある。「赤ちゃんまだ？」とか「子供のいない人にはわからない」とかいう軽い一言が持つ重みも、自覺しておきたい。

## 自然分娩への こだわり、なぜ？

大阪府箕面市 加藤君子

二五〇号の藤田さん、無事の出産まずはおめでとうございます。

帝王切開経験の先輩主婦として、あなたのこだわりにちょっと疑問を感じました。

まず私の場合ですが、二十三年前、私が二十八歳の時、第二子（第一子は自然分娩でしたが、微弱陣痛で三日間も苦しみ、やっと陣痛促進剤で出産できた）の妊娠九カ月末、突然の大出血で、受付即手術台に乗せられました。親子共命拾いをしたので、術後の心痛は全くありませんでした。

あなたにとってとても不幸なことは、まわりの方の無神経な言葉に傷つき、体の傷と共に被害者意識が強くなったのが、こん

なにもこだわって自然分娩を望まれる結果になったと、私は勝手に推測しました。

難産の結果、いわゆる障害児になる可能性もあり、帝王切開に切り換えられた医師に感謝してもいいと、私は思いましたが……。

もう一つ、こだわりの原点が最後に述べておられる「私はこの出産でやっと一人前の女性になった気がした」に全て含まれていると思ひました。この言葉は女性に失礼です。

とても狭い世界で一人前の女性をとらえておられるのは、やはり若さのせい、と中年女の私は昔の自分を見るようで、納得してしまいました。

こんなことを書いていると同じ二五〇号の「育児バイブル」の宇野さんのお義母さんのような自分にちょっと恥ずかしい。

## 「帝王切開から自然 分娩へ」を読んで

東京都新宿区

林 直美

人間である以上、帝王切開（以下帝切）

よりも普通分娩がいいことは、もちろんだ  
と思う。私は常々、何より自然で無理しな  
いことが一番だと考えているので、できる  
ことなら普通分娩で、息子を出産したかつ  
た。しかしながら、だからこそ、普通分娩  
でなければという、こだわりはない。

もちろん、「普通分娩でなければ一人前  
の女性ではない」そんなたぐいの言葉で、  
嫌な思いをしたこともある。だが、気には  
していない。たった出産一つで、女性とし  
ての価値を決められるのは、迷惑千万であ  
る。それに今の時代、普通分娩も、ある意  
味では帝切とさほど変わらないようにも思  
うのだ。帝切だと、確かに産ませてもらう  
という感じのほうが強い。

しかし、人によっては普通分娩のほうが  
ずっと大変なことだってある。陣痛の状態  
からたえず監視がついて、いきみ方、いき  
むタイミングなどたっぷりと指導してもら  
い、新生児の処置もおまかせで、結局は誰  
かに産ませてもらっているも同じではない  
だろうか。会陰切開の傷も相当な痛みと聞  
いた。誰しも自分が産みたいのだが、現実  
はこんなものである。

私は妊娠中、特に臨月になると、逆子  
だった息子の頭、肩、背中をはっきりとこ  
の手に感じることができ、しょっちゅう  
頭をなでていた。その頭で、私は私の息子  
を確信できた。感激のあまり、涙がぼろぼ  
ろでた。息子は私の宝である。私に言わせ  
れば、帝切の傷跡で子供が憎らしいなんて  
嘘だ。子供がかわいくない理由を、帝切の  
せいにしてほしくない。



帝切がいいとは決して言わないが、帝王  
切開という医療技術のおかげで、死なず  
に、無事生まれてこられる赤ちゃんが、ど  
んなに増えたことだろう。私の場合も普通  
分娩であのままだと頑張っていたら、母子とも  
にあの世行きだったかもしれない。普通だ  
帝切だと言っている場合ではなかった。た  
だ、そのような緊急の場合は別にして、帝  
切を利用するかの如く、医師や病院の都合  
で、陣痛促進剤を使って誘発したり、いと  
も簡単に帝切にふみきってしまう、今日の  
医療体制には、非常に問題があると思う。

私はかつて、医療従事者として第一線で  
働いたことがある。だからこんなふうに思  
うのかもしれない。大きな手術後の苦痛に  
あえぐ患者を何人も見てきた。我が子も頑  
張っていると思えば、帝切後の痛みなど、  
私にはたいした苦痛ではなかった。しか  
し、手術は手術だ。身体に大きな負担がか  
かったのは事実である。

私もいずれは第二子を考えてと思うが、  
普通分娩で出産できればよしとして、その  
時、神様にまかせようと考えている。

(え・鳥居慎子)

# 精神科外来の窓辺から

東京都練馬区 安斉みちよ

## 牛込弁天町晴和病院

ある日、いつものようにバスに揺られていて、自分が奇妙な特技を獲得していることに気がついた。バスに乗っている人達の中から、自分と同じ停留所で降りる人がわかるのだ。顔を覚えていたわけではない。その人の仕草や、連れがいる場合は会話から判断できるのだ。そわそわしていたり、視線が空をさまよっていたり、語尾がもたついたしゃべりかた。ああ、この人もそうだなと思うと、ほぼ十割の確率で同じ場所で降りた。

「次は牛込弁天町。晴和病院前です」アナウンス

の後に降車した。いつも、バスが信号に引っかからないで、すぐに発車してくればいいのにと、かすかに願った。バスの乗客が、病院の門を入っていく私の背を見ているような気がしたからだ。ここは、精神神経科専門の病院。長年の通院で精神科へのこだわりは薄くなっているものの、どういう所か知らない世間の人に色メガネで見られるように勝手に思っていた。

大きな窓からは、樹々の葉が揺れているのが見えた。

都心でもっとも排気ガスのひどい区域のひとつであるそこで、木が枯れないのが不思議でしょう

がなかった。

窓の前には手垢で汚れた白っぽいビニールツファが並んでいた。診察を待つ人々は、ここで背を丸めて雑誌を読んだり、外を眺めて時間をつぶしていた。

来院する人とは対照的に、外来受付の看護婦さんたちは明るく健康な表情で働いている。

## どんな人がいくところ？

いったいどういう人が集まっているのだろうか。

世の中の人は精神病院というと、なにか怖いと



ころのように思っているのだろう。しかし、その中是非常に穏やかな世界だ。

私たちは心の障害者なのだ。からだに障害のある人が日常の動作に不自由するのと同様に、ごく普通の、他者とのやりとりに不自由する人が精神科にくる。

車椅子が数センチの段差を乗り越えることが困難なように、こころの障害者はささいな人間関係で悩み、傷つき、どこにも吐き出せない思いをかかえている。

専門的に言えば、精神病と神経症というふたつの層に患者は分かれる。ただ、この境目は非常にあいまいで、患者であり、専門家ではない私には明確にすることはできない。

あえて言えば、神経症は精神病より軽く、そして誰にでもかかる可能性がある病気だ。

晴和病院は私にとって、三番目の神経科であった。睡眠障害に詳しい医師がいるとのことで紹介された。その数カ月前から、抑うつや不安感、外出先では水一滴すら飲めない拒食状態の治療のため、都立病院に通っていた。

さまざまな不快な症状がやわらいできたので、職場復帰のために、乱れきった睡眠リズムを直したいと考えた。何時に眠れるか、起きられるか、

まったく自分でコントロールできない状態だったのだ。これでは会社勤めができない。

だが、あせって職場復帰したのがわざわいしたのか、再び不快感にしばしば襲われるようになって、晴和病院で集中して治療を受けるようになった。

## 私の病歴

私が最初に内科から精神科を紹介されたときは、ああ、やっとこれで楽になれる。専門家が私自身にもわからない心の奥底をのぞき込み、分析し、この苦痛の元を探り当てて治してくれると思った。

しかし、その期待はあっという間に裏切られた。医師は患者から病状を聞き、表面の苦しみをやわらげる薬を処方するだけなのだ。その薬でさえ二週間飲んでみて、次の診察で症状に変化があったかどうか聞き、それによって同じ薬を続けるか、他のものに替えるか決めるのだ。

医師とてもまったくの試行錯誤なのだ。ましてやカウンセリングとなるともっと複雑である。

一応心理テストは受けたが、その結果を基に問題点を患者に指摘し、どう改善したらいいか指導するわけではない。

基本的には患者は自分の生い立ちや現在の生活について話し、カウンセラーは聞く。物静かにメモをとりながらうなずき、ときおり発言を復唱する（メモではなくテープに録音するカウンセラーもいた）。ごくたまに励ましや慰めの言葉を言う。

私の場合は、カウンセラーといっしょに色鉛筆を持って、てきとうにぐるぐると描いた線で思いついた絵を描く療法も行なった。病院によっては、動物や建物の模型を使つての箱庭療法というものもあるし、音楽や作業による治療もある。

はっきりとこれという原因をつかむのが難しい精神科では、治療方法も確立しにくい。

結局、こころの病を治すちからを持っているのは患者だけなのだ。

医師もカウンセラーも、その手助けとして存在しているだけにすぎない。

## こころを病む人たちへ

あまりの苦しさに、脳にメスを入れてしまつて欲しい。どんな手段を使つてでも、今すぐにこの苦しさから逃れたいと思ひ詰めた時期もあった。ああ、もうだめだ。いっそ自分を投げ捨ててしまおうとすら思った。

こっ、そりと山間を走る路線とその時刻表を調べ、早朝だれにも気づかれずに家を出よう。失敗は許されない。そんなことすら考えた。

その夜は本当に実行してしまいそうな自分が怖くて、処方より多めの睡眠薬を飲んで強引に眠りの世界に逃げ込んだ。

全ての治療はむなしく、もどかしく思え、自分にとってなんの救いにもならないようにさえ感じた時期だった。三回目の発病であり、治るまでの経過も苦しみも、抜け出したときの壮快さも知っている私ですら、今回は特別だ。もうだめだ。と思ってしまうぐらいだった。病気をかかえなが



ら、その後妊娠、出産、子育てをした私であるが、初めて発病した人、神経科にいくのは特殊な人だけだと思っている、知識が全然ない人のつらさは、かなり壮絶だと思う。

こしはらく今までにはなくよく眠れない。食欲がない。新聞にも目が通せない。他人と顔を合わすのが億劫だ。苦痛だ。などという感じに悩まされている人は、まず、かかり付けの内科医に相談するとよい。多分軽い薬を出してくれるだろう。

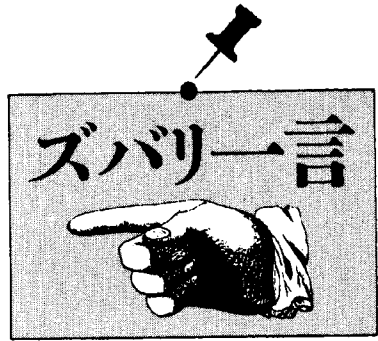
それでも心身の不快感がとれなかったら、主治医に精神科の先生を紹介してもらうことになるだろう。

そのときあなたは、決して落ち込んではいけない。ああ、あんな病院のお世話になってしまったのかなどという罪悪感を持つてはいけない。

立ち止まって考えることを許されないあわただしい社会の中では、だれしも心の病をかかえる可能性を持っているのだ。そして発病を機に、今までの自分の生き方、これからどう生きていくか。本当は自分は何を望んでいるか、心の奥底をとことんのぞき込んで考える機会なのだ。

ここでの脱皮をする時なのだ。

(え・田沼千恵)



## 生まないのは 個人の自由？

岐阜県本巣郡●千藤順子

最近、子供を生まない女性のことがよく問題になるが、それに対する彼女らの反論がどうも気になる。「子供を生むかどうかは個人の自由、人に強制されることではない」

本当に自由なのだろうか。人

間は社会をつくらなければ生きていけない動物だ。子供を生み育てることはすなわち社会を維持すること。社会の中で生きていく人間が、社会を維持する役目を放棄して、それが「個人の自由」なのだろうか。

子供を生むのは社会のため、などと言うとずいぶん前時代的な発言に聞こえる。では言い方を変えて彼女らに質問してみたい。「もし日本中の女性があなたと同じ選択をしてもあなたはそれを支持しますか？」

ばかばかしい、と一笑に付されるかもしれない。それでもこの質問にイエスと答える人は少ないだろう。察するに彼女らの本音は「私が生まなくても他に生む人がいるから大丈夫」ということではないのか。

今年の夏は記録的な水不足だった。水が豊富にあるときは朝シャンも洗車も「個人の自

由」だったろうが、水不足になってからは真っ先にやり玉にあげてしまった。自然破壊でも動物の絶滅でも、危機的状況になってからやっと、それが個人レベルの問題ではなかったことに気づくのではないだろうか。

批判的なことを書いてしまっただが、少なくとも今の時点で「生まない女性」を非難する気はない。生まないことが個人の自由だとは思わないが、人口が多すぎるから、これだけ社会が



豊かだから、生まない女性は今のところ少数派だから、母子福祉が充実してないから、もう少し様子を見てほしいと思う。

しかしこの状況がいつまでも続くわけではない。子供を生むことの個人的な意義はかなり討論されているが、社会的な意義も考えてみるべきだと思う。それは単に一人の老人を何人で扶養するという問題ではないのだから。

## おれたちの運動 が悪かったのか

愛知県刈谷市●横山昭子

私の人生のテーマは、私が長く生きるにつれて少しずつ変化してきた。二十代の私は「水俣」や「三里塚」の記録映画を見、部落民である石川青年の冤

罪裁判に怒り、未解放部落出身の教え子たちと共に差別について考えていた。

子どもを産むことの選択が自分につきつけられた二十代の終わりごろには、女の性の問題と関わるものとして人口問題を意識した。三十代の私は子育てに悩み、母と子の問題、幼児虐待、妻の神経症、分裂症へと関心は揺れ動いた。四十代には職場に戻ったことも契機となつて、主な問題意識は学校教育に向いた。母親となつてみると、

It's the... of re-  
so a founding amb-  
service, a nongov-  
organization dedicated  
e outdoor for musc-  
recreation.  
"Profit-sharing and on  
are important smart  
, but neither  
your the s-  
ducts c-

教師だけの目で見えていたときよりずっと切実に、教育制度の持つ問題点や学校の荒廃を感じて苦しんだ。

今年、子どもは二十歳になり私たち夫婦の手元を離れた。子どもをめぐってその時々私に抱えたテーマは、どれもみな解決されないまま残ってしまった。差し迫った問題に次々と心が占領されて、それ以前の問題に答えが出ていないことを気にしながらも、徹底して追究することができなかった。読みかけにしたままの本もたくさんある。答えは出てなくても、せめてその時の問題意識だけでも書いておけばよかったと思う。では、今から後戻りをするかというところも難しい。「おさない子を育てる」などの投稿をなさる若い方を立派だと思ふ。今私が子育てのころの気持ちを振り返って書いても、やはりそ

れは思い出に過ぎないだろう。「今考えていることは今でないと書けない」という友人の言葉どおりである。

そこで現在の私のテーマをはっきりと自覚し、答えを求め続けるために、今の問題意識を書しておくことにした。

一九八四年、土本典昭監督のドキュメンタリー映画「海盗り」を見た。自分たちの港が原子力船「むつ」の母港となることに、下北半島の漁民が反対運動を起こした。その運動を記録した映画だ。すでに一九六四年、下北は原発の候補地にあげられている。それ以来「むつ小川原総合開発」の名のもとに、自衛隊基地、米軍基地、石油備蓄基地、射爆場、原発、核燃料サイクル基地などのために土地や海は奪われていった。六ヶ所村の一人の農民が、雪に埋もれた家の薄暗い部屋で自分たちの

闘いについて語り、最後に呟いたことは忘れられない。

「結局負けたんだよな。負けたのは俺たちの運動が悪かったからだろう。どこが悪かったんだろうか」——この問いかけがいつも頭に浮かんできてくる。

誰かがこの人に答えなくてはいいけない。答えを出せないとしても、一緒に考えなくてはいいけない。そしてこの人に、自分も考えているということを伝えなくてはならない。というような思いを抱いたまま十年がたってしまった。

建設省、科学技術庁、原子力事業団、電力業界、県などの巨大な権力と闘い続けることが、普通の個人にとってどういう感じのものなのか。何回も想像してみた。運動をする個人の日常生活はどうなるのか。運動そのものが生活となるにちがいない。個人の権力への闘いの意味

は運動することそれ自身にあるのだという気がする。

もちろん、これでは答えにはならない。

「おれたちの運動がなぜ負けたのか」という問いの答えは法律が握っているというところまで、私の考えはたどりついた。

この考えについて確信が深まったのは、「ファミ・ポリティク」のインタビューに近藤隆行氏が、「国会は民衆、国民を代表する立法府であり、立法が義務なんです」と答えているのを読んだときである。個人の運動の前にたちふさがるのも、闘う個人を守るのも法律だ。その法律をつくるのが国会であることはわかりきっているはずなのに、これを読むまでなぜか実感がなかった。

法律というのはすでに厳然としてできあがって在るもので、個人にとって抗い難いものである

るかのような錯覚を持っていた。しかし、法律は人間がつくるものだ。個人の闘いが必ずといってよいほど負けるのは、運動を妨げるように法律をつくったからだ。

ほんとうにそうなのか。確かめたい。個々の運動においてどんな法律がどんな役割を果たしたのか。その法律はいつ何をきっかけにして、どんな党の政治家がどう動いてつくったのか。知りたい。法律の知識のない私の手に余る問題ではあるが、たった一つの具体例でも明らかにしてみたい。

これからどれだけの本を読み、何をすれば、「おれたちの運動のどこが悪かったのだろ」という問いへの答えが見つかるのか。個人が権力との闘いにおいて勝つということはあり得るのか。勝つとはどういう状態のことか。勝つためにはどう

闘えばいいのか。

あまりにも大きい問題なので暗中模索の状態ではあるが、とにかく私自身の答えを出したいと思っている。私の人生の残りをすべてかけるべき余生のテーマという気持ちで、決して途中で忘れたり諦めたりすること自分を許してはならない問題だと思っている。

## 名字って 何だっけ

東京都小金井市 ●月敦子（33歳）

「ただでやっぱり、今の日本の結婚って男女不平等でしょ。だから積極的に結婚しようと思えないのよ。だいたい大抵の男の人は結婚したら相手の人が自分の名字になってくれると思ってるじゃない。そこからして不公

平よね」

「えっ、僕も自分の名字になってもらえろと思ってる。そんなことまで考えてるのかあ」

もう十年近くも前、独身のころ、男友達と交わした会話だ。

二十歳前後の学生のころから、結婚による（女性の）改姓には疑問を持っていた。名字が変わることは不便だ。しかしそれ以前に、いとも簡単に、多くの場合女性に旧姓を捨てさせる慣習は、女を馬鹿にしていると感じていた。

そんな私も、結局は結婚して夫の名字を名乗るようになった。旧姓を通称としたり、事実婚によって自分の名字を使い続けたりということも考えた。けれども結婚後、さまざまな場面で自分のポリシーを説明し続けなくてはならないこと、そしてそれに対する他人の意見を耳にしなければならぬこと、それ



らを想像したら、希望をこり押しすることが面倒になってしまった。要するに私は、夫婦別姓主義者としては骨抜きだった。

現実には、世間の逆風に耐えて夫婦別姓を貫いてきた人たちがいる。夫婦別姓問題を真剣に考え続け、運動してきた人たちがいる。この人たちの強い意思には、頭の下がる思いがする。

そして遂に、遠くない将来、民法が夫婦別姓を認めることになりそうだ。さらに、その晩には、既に連れ合いの名字を名乗っている人たちにも、旧姓を取り戻すチャンスが与えられるらしい。

そうなるからには、私も元の名字に戻ろうと思う。いや、戻らなくっちゃ、と思う。ずっとずっと、夫婦同姓は変だと思いつけてきたのだから。

けれども、旧姓に戻れることを考えても、喜々とした思いばかりではなく、重苦しい気持ちも湧いてくるのは何故だろう。

考えてみれば、旧姓だって家制度の産物なのだ。何代にもわ

たり、(多くは) 女たちの名字を犠牲にし、父方の家系を示すものとして受け継がれてきたのが、今の既婚の女たちの旧姓なのだ。それを取り戻したからといって、家制度を、そして男女不平等を否定できるわけではない。

さらに、既婚の女たちが旧姓を取り戻そうとすれば反対する夫や、その家族は多いに違いない。家庭内のもめごとがこここで起きるのは目に見えてい

現すれば、名字が結婚による家系を示すこともなくなる。極論かとは思いますが、もはや名字なんかいらないんじゃないかという気持ちになってくる。

そう考えたら、名字というのが結局何なのか、どうして必要なのか、わからなくなってしまう。

家制度の意味が薄れた今となっては、名字が家系を表す意味もあまりない。夫婦別姓が実

# 駐車違反に思う

静岡県清水市 ● 鈴木美奈

友人が先日、駐車違反で切符を切られたそう。で、カンカンに怒っていた。「何さ、ほんのちょっとした時間なのに。だいたい近くに駐車場なんて無いじゃない。大目に見てくれたっていいじゃん。ズルイよね、捕まらない人だっているのにさ。それに婦人警官の態度！ なにさあの言い方」

特にめずらしいことでもない。大抵の人は同じように言う。しかし、どう考えたって違反するほうが悪いに決まっている。一人を大目に見たら、他の人を捕まえるわけにいかなくなる。規則そのものの意味がなくなるということだ。自分以外の人が大目に見てもらっていたらもっと怒るだろう。違反者が素

直に反省しないから、婦人警官（正確には交通巡視員）もああいう態度に出ざるをえないのだ。

ニューヨークあたりの警官なんて、露骨にワイロを請求して見逃すのだから、それに比べれば立派なものだろう。「ちょっとだけ」というが、事故が起きるには一秒もかからないのだからそんな理屈は通らない。免許試験に合格しているのなら何のため交通法規があるのか

知っているだろう。違反になるかどうかぐらい判断できるし、違反したらどうなるかも知っているはずだ。「でも」「だけど」なんて言うほうがおかしいのではないか。

子供じゃあるまいし、交通法規は守りたくないわ、罰則もイヤだわ、注意されれば頭に来るわじゃ単なるワガママだ。というより人間性に欠陥があるのかも。こういう人に免許を取らせるべきではないのではないか？

どうしても違反する気なら、捕まった場合は覚悟しておくのが当然だ。また自分のほうが正しいと確信しているなら、裁判で正式に争うことだってできる。そうすればいい。

と思ったが、正直に言えばケンカになるのは目に見えているので、やめた。

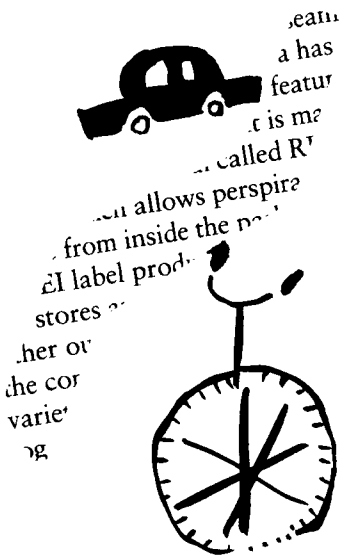
ところで私はどうかというと、確実に駐車場へ入れられるという確信が無い限り、車は使わない。バスと電車と自転車での外出も、そう不便は感じない。ぜひお勧めする。

## 女のステイタス

北沢中小倉南区 ● 前川理絵 (29歳)

ステイタスって何だろう？

先日外資系のスチュワーデスをしている義妹と話をした時の



こと。妹とはいっても同じ歳で、今年三十路。結婚か、転職か、悩みは尽きない。とりあえず現在外国在住のため、結婚相手を探すのは大変なので国内で転職先を見つけたら?という話になり、私はせっかくの英語力を生かすためにも現在求人を行なっていた大手ホテルのことを勧めてみた。すると義妹曰く、「私達の世界には仕事にもステイタスがあって、一番上がスケジュールデス、次にホテル関係、旅行会社なんかその下よ。わざわざステイタスを落としてまで転職したくない」

現在話題のアルバイトスケジュールデスなどは、スケジュールデスのステイタスを落とすものだ、と大反対だそうである。

私が以前勤めていた地元の企業で、先輩女子社員にこんな話を聞かされた。女子社員が退職する日、仕事は四時ぐらいいに切

りあげ、その後は会社内を挨拶回りをして歩く。それもエンゲージリングをはめて。つまり女子社員の退職というのは「結婚退職である」というのが前提なのである。挨拶回りを終えると部内や仲良しの女子社員たちから出口で見送られることになる。そしてその出口には婚約者が花束を持って待っている……

これが女の最高のステイタスだ、と私は教わった。その後いろいろ見聞きした中には、意地でも結婚退職するまでは、と不満たらたらで何年も仕事を続けている人、結婚退職と偽って自分の指輪をはめて挨拶回りをした人だとか、結婚退職じゃないばかりに挨拶回りもせずに裏口から帰った人だとか、そんな滑稽な話がたくさんある。めでたく結婚退職が決まったものの、婚約者の勤め先がばつとしない

とかで最後までどこの誰と結婚するのか言わずに辞めた人、あの人以上は大きなダイヤを!と婚約者に無理を言って指輪を買い替えた人だとか、退職のステイタスに賭けた女の話には事欠かない。

さて私の退職の日はどうであつたか?

その日引き継ぎの後輩の覚えの悪さに私は結局残業。挨拶回りどころではなく、私が帰る時間にはもう半分以上の社員が退社していた。さっさと着替えて出口を出ようとすると後輩の女の子が小さな花束をくれた。私の指には指輪はない。婚約者は遠い東京の空の下で残業中だろう、誰も迎えには来ていない。だけど、あの解放感! もう毎日ここに通わなくていいんだ! という晴れ晴れとした気持ちは忘れられない。

今私は社宅に住んでいる。且

那はみんな同じ会社で働く身だ。けどこの状況の中ですらステイタスが存在している。旦那の出身大学に今の肩書き、子供の幼稚園……。今流行っているのは子供の早期教育。どこまでやっているか、何をやっているかが自慢の種になっている。

ステイタスってそんな一日限りのものなのだろうか? 仕事を辞めたら失ってしまったら、旦那とか子供とか自分以外の人の業績だったり、状況が変わればそれが上がった下がったりするものなんだろうか?

そんなステイタスはいらない。もし私自身にステイタスがあるなら、どんな時でもどんな場所でもそれは私自身についてくるはずだ。たとえば、何をしたいようと、誰と居ようと、どこに住もうと。私が今欲しいのはそんなステイタスなのである。

(え・カステラネンコ)

# パリが 突然やって来た！

埼玉県浦和市 藤永洋子



ヴァンダンジュで。どこでも人、人、人。左端が私

## 夫なんか困ったって

「買わなきゃ当たらぬ宝くじ」のノリで応募した作文が、なんと私をパリに招待してくれた。

それは八月のまだ残暑厳しい日のことだった。暑さを一挙に吹き飛ばす吉報は、電話で突然やってきた。

「応募された作文が選ばれました。九月十二日からのパリ旅行のご都合はいかがですか?」

ハ? 頭は一瞬空白。そして思わず叫んでいた。「行きます! 何があっても!」

結婚六年、旅行のために十日も家を空けたことなんてない。夫は、「いつ応募したんだ」「留守中、Yシャツはどうするんだ」なんて、どーでもいいことを騒いでる。よく考えなさい。無料<sup>ただ</sup>でパリへ行けるのよ。心はパリに奪われて、とにかく強気の妻であった。

私は、とりあえず夫に洗濯機の使い方だけを教えて、さっさと機上の人となる。いざとなったらコンビニもあることだし、食べるに困ることはないわよね。

エア・フランスの旅は、なんとエグゼクティブクラス。「ワインと私」というテーマの作文に応募して選ばれた女性雑誌の読者四人と、編集部か

ら男性一人、若い女性一人、さらにスポンサーのニナリッチ、LVMH（ディオール、セリーヌ、ルイ・ヴィトン、さらにシャンパンで有名なモエ・エ・シャンドン社の総括）のブレスの美しい女性<sup>性</sup>が二人ついてくれて、計八名のツアーとなった。目的は、九月十三日の夜、パリ、モンテーニュ通りのメゾンが主催する葡萄の収穫を祝う催し「ヴァンダンジュ」の取材である。選ばれた読者四人は、帰国後、報告文を書くというお仕事が待っている。そんなものは何のその、凱旋門を目の当たりにするや、すべてを忘れ、夢心地の私なのであった。

九月いっぱいサマータイムのパリ。こちらの夜十一時に電話をかけると、日本は朝の六時である。パリ到着のその日、夫に指定された時間に電話を入れたっきり、私は家庭を忘れた。

## 上流社会の仲間入り?

無料のパリは、ひたすらにゴージャスだった。シャンゼリゼ通り近くのホテルにチェックインすると、部屋の中には、ニナリッチやラディオールやら、各メゾンから贈られた色とりどりの花束が迎えてくれる。宛名はなんと「マダム フジナガ」! 正直言って、花束なんかもらったことの

パリが突然やって来た!

ない私は、感激して記念撮影をしてみました。

おっと、花束に気を取られていたが、実は部屋の中もなかなかである。メゾネットタイプの室内は、一階がリビング、部屋の中央に螺旋階段があり、二階が寝室という造りになっている。両開きの窓を開けると、窓辺には赤い花の植木鉢が飾られ、遠くにエッフェル塔が見える。パリの香りを胸一杯に吸い込んだ。

ヴァンダンジュは、夕闇迫るころに始まる。今宵のパーティに備えて用意されたスケジュールは、まずニナリッチのビュティ・センタールでメイクアップをしてもらい、その後、「アレクサンドリア」でヘアのセットをするというもの。カメラマンが同行して、随時写真に収まる。

結婚式以来、他人にメイクしてもらったことなんてないし、「アレクサンドリア」内では、パリのマダムに交じって鏡に映る自分が何だか滑稽にも思えた。何たって、ここにはソフィア・ローレンまで現われてしまったのだから、私の狼狽ぶりを察してほしい。パリの上流社会に迷い込んだ哀れな日本人、と自分で自分を評した。

華やかに繰り広げられたヴァンダンジュは、各メゾンに社長クラスが現われるという立派な催しだった。私たちは、カメラマンに言われるまま



シェリー酒をつぐ人

に、ニナリッチ、デオール、セリーヌ、ルイ・ヴィトンと各メゾンを回り、その社長クラスとカメラに収まった。流暢にフランス語を操る美しいブレスの女性の通訳で、会話も交わした。四十歳に手が届くとはとても見えない彼女たちのスタイルと知性を前にすると、羨ましくもあり、我が身を振り返り恥ずかしくもある。よほど緊張していたのか、たいした内容のある会話ではなかったはずだが、ほとんど記憶にない。

旅行前の説明も見ると聞くとでは大違い、まさかこんな状況が繰り上げられるなんて想像もつかなかった。

モンテーニュ通り沿いの各メゾンが招待客に振る舞う、ワインとシャンパンの香りが辺り一帯に漂う。そして、とにかく美しく見えてしまうフランス人の人込みに、クラクラしてきた。

初日からこの有様でどうなることやらと思いき

や、人はなんとか順応するものなのである。洋服だんすの中身をそっくりスーツケースに詰め込んで来たかもあり、連日のランチ、ディナーのたびに、ありったけの服を総動員して臨む。読者代表の私たちは、それぞれ担当のメゾンが決められ、各自取材をしなくてはならない。連日のご招待に笑顔も引きつりがちである。

## シャトーに泊る

何といっても印象に残るのは、ホテル・クリニョンでのディナーだ。女性が圧倒的に多い私たちツアーのために、主催者側のディオールは男性を調達してくれた。夫以外の背広姿の男性に囲まれて食事をするなんて、本当に久しぶりのこと。フランスでは、夜九時ごろから込み出す一流ホテル



ディオールのメゾンで。  
世界中の大金持ちが洋服を注文するところ

ルのディナーに、女性ばかりというのは奇異に映るのだ。同性が隣同士の席に座るのはヤボというものらしい。やってきた男性陣は、日本人だったのではとした。ロウソクの赤い炎が美しくゆらめいて、気分も最高潮。

ところで、外国語を耳にしながら食事をするほど大変なことはない。パリ郊外のエベルネという小さな町に行ったときのことだ。

シャンパンで有名なモエ・エ・シャンドン社から招待を受けて、葡萄畑の真ん中に建つお城に一泊した。そこは、各部屋に鍵がない。そんなものには必要ない、素性のしつかりした人しか滞在できない由緒あるシャトーなのであった。各部屋は、それぞれ違うファブリックでディスプレイされ、バスルームだけでも四畳半ぐらいはありそうである。私たちは、一生にたった一回泊まれるだけに違いない。その私たちが、世界各国からやってきた常連さんとディナーを共にするのである。

ゴルフ場を二十四力所持しているというオーストラリア人夫妻、生後三カ月の赤ちゃんをベビーシッターに預けて週末の休暇を楽しむイギリス人夫妻、日本でも手広くビジネスをしているというアメリカ人夫妻、こんな明らかに別世界のの人たちと、日本からやってきた私たちは、ばらばらの席

パリが突然やって来た。

に座らせられてディナーとなった。ホストがイギリス人だったので、公用語は英語。通訳のプレス  
の女性が頼りだというのに、二十人ほどが囲む大  
きなテーブルとあっては、話がひとつにまとまる  
はずもない。やむなく下を向いて料理を楽しんで  
る風を装ってみたが、上流階級の方々は、とても  
気を使って下さる。隣にすわった男性としては、  
女性が寡黙に食事をするなんていうのは、大いに  
責任を感じてしまうことなのだ。

パリ初日から、食事といえばシャンパンに始ま  
り、白ワイン、赤ワインと、連日の胃腸の疲れも  
手伝って、ほとほとまいったディナーとなった。  
それにしても、上流階級の方々って、初対面に  
もかわらず、どうしてあんなにしゃべることが  
あるのかしら。それが社交ってものなんだろう



一泊したシャトーの前で。  
“サラン城” という名の白ワインが出た

かねえ。まあ、持たざる者にはわからない世界で  
もあります。

翌朝、朝日に輝く葡萄畑を眺めながら、静かに  
味わったルームサービスのカフェとクロワッサン  
のほうが、よっぽどおいしかったぞ！

夢覚めやらぬまま、我が家の三LDKのマン  
ションに戻ってきた。時差ぼけ治らぬ週末の朝、  
私は聞き慣れた音で目を覚ました。それは洗濯機  
が回る音。ふと気付くと、隣に夫がいない。私は  
思わずニンマリして、また眠りに就いた。幸せは  
人それぞれよね、なんて思いながら。

たった八百字ほどの作文がもたらしてくれた、  
十日間の夢物語はあつという間に終わってしまった。  
それにしても、書けばこんなにいいこともある。  
書きたい同志よ、頑張りましょう！

# おひなご子を育てる

## たたかいをきこう 男の子

神奈川県中郡●石井しのぶ（35歳）

ある日、幼稚園年長組の息子が、  
「バラ組の子たちは自分が何もしないのに  
けったりぶったりしてくるからいやだ。幼  
稚園に行きたくない」

と私に訴えてきた。春の遠足のころ、朝に  
なるとおなか痛いから幼稚園を休むと  
いって困らせた時期があったが、かぜ薬と  
おなかの薬を飲んでいううち言わなくなっ  
たので、そのことはすっかり忘れていた。  
でも今になってそのころも、毎日のように

おなかをけられるので幼稚園に行きたくな  
かったのだと言うのである。まさか登園拒  
否の一種だったなんて思ってもみなかった  
ので、少しショックを受けた。

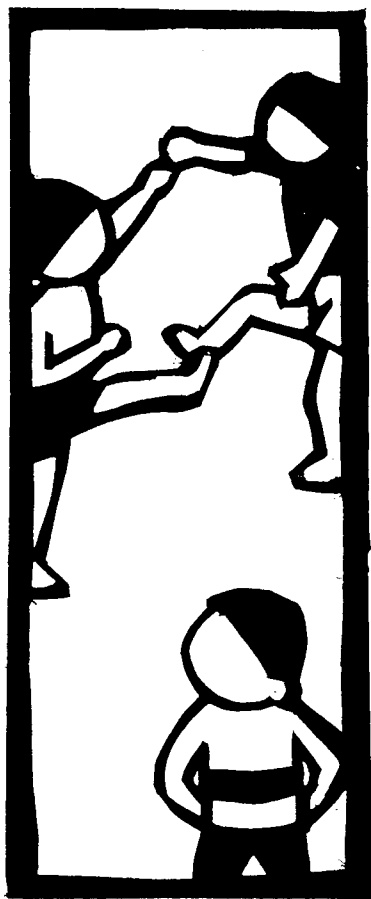
保育参観の日、園での様子を見ていた  
ら、おとなしい子の多い息子のクラスに比  
べて隣のバラ組の男の子は活発で、知って  
いる子をみかけると飛びげりで近づいてい  
き、頭をたたいたりお互いに体をぶつけ  
あったりして楽しんでいるようすである。  
見た限りでは、何か意味があつてたいて  
いるのではなく、乱暴なつきあい方が親し  
さの表現であるようだった。でもそれを息  
子に言っても、みんなより体格も小さめで  
やられるばかりになってしまふ息子は、痛  
さも強く感じるらしく、いくら遊びでもた

たかはいやみたいだった。

息子の場合、上が女の子で小さい時から  
女の子と遊ぶ機会が多かったため、たたか  
いごっこにはあまり慣れていないというこ  
ともあるだろう。それでも走るのも速く、  
体を動かすことが好きで、親の目から見れ  
ば決しておとなしすぎる子供というわけでは  
ない。

夫に相談すると、「アイツは男にしては  
軟弱すぎるんだよ、いつまでも赤ちゃん扱  
いして膝に乗せたりしているからそうなる  
んだ」

と逆に言われてしまった。確かに男の子に  
しては気がやさしすぎるかもしれない。そ  
こがかわいくて私もつい甘えさせてしまふ  
のだが、別にままごとの好きな男の子がい



てもいいのではないか……とも思ってしまった。一度、「やられたら、今度ガツンとやり返してみたら」とすすめてみた。でも息子は、

「痛いとかわいそうだからできない」と言う。そして、

「前に先生にやり返してもいいですかと聞いたら、いけませんと言ったので、やり返すことはできない」

と言うのである。やはり少し生まじめすぎるところがあるかもしれない。でもあまり毎日、息子がたたかいはいやだと訴えてくるので、幼稚園の先生に相談してみた。すると、「悪気があってしているわけではな

いので、注意したりすると逆によくない場合があってむずかしいですよね」ということだった。昔から男の子はチャン

バラやすもうなどたたかいを遊びにとり入れて体をきたえていたのだから、たたかいごっこが一概に悪いとはいえないと思う。

たたかうことで危険からさっと身を守る反射神経が養われることもあるだろう。だからといって、たたかいはしたくないという息子に我慢してやりなさいとは言えない。

どうしたらいいのか、母親として私も困ってしまった。

そこでいつもたたいてくるという一人の男の子の家に思いきって電話してみた。そ

この母親はPTA役員もしていて考え方もしっかりした人なので、それでは子供同士話し合いをさせましょうと電話で二人が話せるようにしてくれた。その子は「もうしない」と言ってくれたらしい。その子の母親は、

「うちのはたたかীগごっこがすごく好きなのよ。でもいやがっているなら教えてもらってよかったわ」

と言ってくれた。息子もほっとしたようだった。以後は明るく登園している。

今回、息子が悩みを話してくれたことでうまく問題は解決できたが、人から言われた言葉などにも敏感に反応して傷ついてしまふところがあるこの子が、この先小学校にあがってから、たくましくやっていけるだろうか……という心配は残った。

## 子どもは便利？

埼玉県上尾市●金子由美子（38歳）

あまりほめられた表現ではないが、私はこのごろ子どもって（こ）で言う子どもは

小学校低学年までの子に限る）便利なものだとつくづく思う。

便利といってもいろいろお手伝いをしてくれるとか、そういう類いのものではない。うまく言えないが、子どもそのものの存在が役にたつときのことをいうのである。

では、どんなときに子どもの存在が役にたつかというと、第一に来客との応待のときである。接客がにが手な私は、義母が不在のときに来客があるとうろたえてしまう。こんなとき、子どもが私のまわりをうろうろしてくれば、会話もどうにか成り立ってくるというものだ。

客曰く「あら、もうこんなに大きくなったの？ よその子は早いもんだね。今、いくつ？」

私「七月で六歳になりました」

客「それじゃあ、来年は学校だね。今が一番かわいいときだ。上のお姉ちゃんは何年生になったの？」

私「今年、中学に上がりました。テニスクラブに入って、毎日暗くなるまで練習しますよ」

途中、子どもが別室から絵本を持ってきたり、お茶をこぼしたりするとそのたびに会話がはずむ（お行儀の悪い子ほどこんなとき役にたつ）。

二つ目は外出時にきちんとした身なりをしなくても、子どもを連れていけばどうにかサマになるところである（これは、はなはだ主観的であるが）。

夏など、そばかすだらけの素っぴん顔にヨレヨレのＴシャツといった格好で、デパートにさえ行ってしまふ私であるが、後ろから子どもがぞろぞろ（私は四人の子持ちである）ついてくれば、なんとなくゆるされるのではないかと思ってしまう。つまり、ああこの人は毎日育児におわれて、おしゃれするひまも金もないんだと世間様はみてるのではないかと？と虫のいいことを考えてしまうのだ。

三つ目は散歩のとき、子どもを連れて歩くといったって自然で格好がつくということ。以前、何かの雑誌に「散歩、散歩というが、大の男がひとり、新興住宅街を歩いている姿はどうもサマにならない。怪しげな人物を見るような視線を感じる」とさえ

ある。やはり、犬か子どもを連れて散歩をするのに限る。特に幼児といっしょならば怪しまれることはまずない」というような主旨の投稿文が載っていたが、私はこれを読んだとき、その情景を頭に浮かべて、つくづくそのとおりだと思った。

中年の男が、日曜日の昼下がりなどに幼児を連れて散歩する姿は、うしろに平和な家庭がみえてくるようで、いたって自然であるし、もちろんだれも怪しまない。女の場合もそうで、トレーニングウェアにウォーキングシューズと正装しているならば別だが、ちょっと散歩といったとき、横に幼児や犬（いっしょにしては失礼だが）の姿があったほうがサマになっているような気がする。

そんなわけで私は、隣の家（といっても五十メートル先）へ回覧板を届けに行くにも、ポストへ投函しに行くにも子どもを連れて歩く。

こう並べてみると、私はずいぶん子どもに助けられているのに気づく。また、見方をかえれば、これこそ子離れできない親そのものではないかと思う。

まあ、それでもいいか。ここ二、三年は、子どもといっしょに持ちつ持たれつでいってみよう。

## ドイツに暮らしてみて

ハンブルク市●三野 友子（31歳）

「おかあさん、みてみて、わんわんがでんしゃにのってきたよ」

「おかあさん、ドイツのひとってみんなかみのけちゃいろいろいよ。さきちゃんもドイツにおったらちやいろいろいかみになると？」

「おかあさん、どうしてにちようびはぜんぶお店しまると？」

五歳になる少し前にここハンブルクにやって来た娘には、見る物、聞く物全てが新しい経験だ。

今年の正月明け早々に夫のドイツ転勤が決まり、その半年後の六月二十四日に私と二人の子供はドイツのハンブルクにやって来た。

しばらくして案の定、娘はホームシックになってしまった。まだ友達がいなかった



彼女は毎日のように、

「たあくんにあいたい」

「さおりちゃん、みーちゃんとあそびたい」と、東京に居た時の友達の名を繰り返した。

「さきちゃんひとりでひこうきにのったら、とうきょうじゃなくて、まちがえてへんなところに行く？」

と、涙ぐみながら質問されてきた時には、

そこまで思いつめているのかと、私まで泣きそうになってしまった。

ちようどそのころ、私はなかなか幼稚園が決まらず焦っていたし、引越しの疲れや、慣れないドイツ語での新生活に精神的にも肉体的にも参っていた。近くに日本人がたくさん居ると聞いてきたのに、ぜんぜん日本人を見かけないし、日本人の知り合いはいないし、夫は仕事で忙しく帰りは深夜になるので私自身もホームシックになりかけていた。

しかし有難い事に役所の保育課で紹介してもらった私立の小さい幼稚園にたった一つ空席があり、娘はそこにすべり込んだ。始めは「さきちゃんどういつ語わからん、とうきょう語しかしゃべりきらん」（彼女が話しているのは博多弁）

と泣いていたが、しばらくすると広い庭と、犬と猫がいるこの幼稚園に喜んで行き始めた。日本人は彼女一人で、周りは皆ドイツ語の中で毎日元気に遊んでくる彼女に、私は我が娘ながら心の中で拍手を送った。そして、子供の環境への順応の早さにただ脱帽した。

## 子供の世界は 大人社会の縮図

大阪市旭区●宮崎 貴子（30歳）

どんな子になってほしい？

先日テレビで、ある芸能人が長女出産の記者会見をしているのを見た。どんなお子さんに育ってほしいかという質問に対して、「他人に対して思いやりのある、優しい子に育ってほしいです」と言っていた。あらま、いいこと言うじゃないの、と感心したと同時に、そんなことじゃあ世間は生きていけませんわよ、という気持ちにもなった。

誰だって、人の気持ちの分かる思いやりのある子に育ってほしいと思う。私だってもちろんそうだ。しかし、そんな当たり前のことさえ最近では疑問に感じてしまうのだ。

本来子供の社会性を育てる場でもある公園を例にとってみると……。

息子の中の矛盾

もうすぐ三歳の息子は、私や夫、近くに

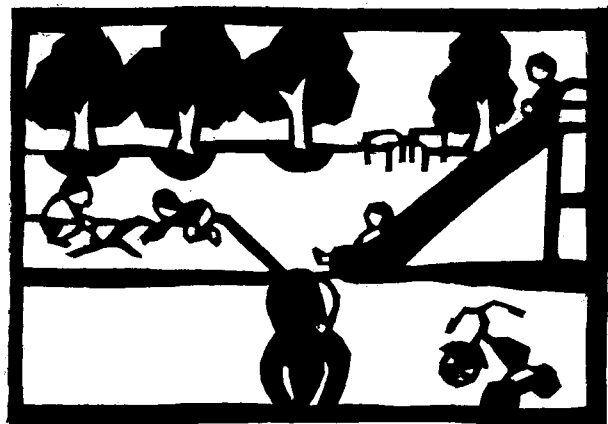
住む私の母や弟に可愛がられ、自分中心に世界が回っている。だから、同じくらしいの子と交わり、いつも自分の思い通りにならないことを遊びを通じて教えたかった。体験することが一番だと思っていたから。

「順番ね」「小さい子には優しくしてあげてね」「私がいつも息子に言ってきた言葉だ。弱いものをいたわる気持ちが無かったり、自分さえよければそれでいいという気持ちがあるから、「いじめ」なんて問題が起くるのだと私は思っている。

一歳になるころにはきちんと順番を守って、小さい子がいたら、待ってあげることができるようになり、親として喜んでいた。

ところが、ところがだ。自分より大きい子が、平気で滑り台の順番を無視して、息子を押しつけ先に滑ってしまったのだ。一瞬息子は何が起ったのかよく飲み込めない様子で、ぼかんとしていた。押しのけられた時に、尻もちをついたその姿勢のまま、滑っていく男の子の後ろ姿を見つめている。その息子の表情にははっきりと、「何かおかしい」という理不尽な気持ち

が現われていた。初めて見る表情だった。子供心に、「ママはいつも順番を守ってね、って言うてるのに、どうして僕、突き飛ばされて後ろになっちゃったんだろう。僕がもしそんなことしたら、きっとママはすごく怒るくせに」とでも言いたそうなのが痛いほどよくわかった。



また、誰も使っていないおもちゃで遊んでいると、持ち主（息子より少し大きい子）が帰ってくることもある。そしてその子供が力ずくで取り返す、すると息子が泣く。当然母親は「○○ちゃん、小さい子に貸してあげなさいね」と言ってくれるとはかり思っていたら、「この子、人に貸すのいややねん。返さなたくで。はよ返し」だ。自分は小さい子に優しくって言われるのに、全然自分は優しくされない。自分は順番を守っているのに、よその子は平気で自分を追いぬかす。これはおかしいって息子が気付かないはずはない。

乱暴者、まかり通る

そんなことが一度や二度ではない。砂場では遊んでいると、いきなりバケツを奪っていつてしまう女の子。ボール遊びをしていたら、横はいりしてわざと反対のほうへ蹴るおにいちゃん。ひどいときは自転車でひいていくし、シャンプーだっていつて砂を頭からかける子供だっている。

そんな子供には注意したって利き目がない。「自転車がきたら、よけたらいいねん」とか、「取られるほうがアホじゃ」な

どと言いつ返すだけだ。大の大人に向かってよくもそんな口がきけるもんだと呆れてしまう。そして、そういう子供の親は大抵寄り集まってくっちゃべっていて、万一そんな光景を目にしても、自分の子供を叱る人が何人いるだろうか（現に叱らない母親が何人もいた）。

結局弱い立場の子供を持つ親達は絶えず子供について回り、守ったりかばったりしなければならぬのが現状である。いつまでも親に頼ってばかりでなく、子供を自立させたいと思っても、放っておいたら弱い子供はカモにされてしまうのだ。公園にはそうした、強い者（乱暴者）と弱い者といったはっきりとしたカラーがある。それは年齢的な問題ではなく、性格の問題なのだと最近気付いた。乱暴者は二歳の時は二歳なりに三歳の時は三歳なりに、といったようにたえず乱暴者なのである。そして弱い者は一歳の時は〇歳の子をかばっているのに二歳の子にやられる、二歳になれば自分より小さい子に優しくしているのに三歳、四歳の子にやられる。ルールもなにもあったもんじゃあない。

社会で生きていくために

自分の子は優しく思いやりのある、ルールの守れる子に育てようと思って、そうしつけてきたつもりだけれど、最近本当にこのままでいいのか、疑問に感じている。

公園でみる限り子供達の世界は、「正直者はばかをみる」という大人社会の縮図そのものではないか。単に、優しくしようね、と教えるのではなく、ちよっとくらいは人を押しのけてずるくなっていいのよ、と教えないければこれから先子供は生きていけないのではないだろうか。キリストのよううに右頬を打たれたら左頬も出しなさい、なんて教えるはもはや通じない。そんなことしたら乱暴者は面白がって調子にのってきつと殴る蹴るの暴行を楽しむに違いない（ちよっと言い過ぎう）。

やられたらやり返すのが当たり前なんて考えを、こんな小さいうちから教えないければならないなんてんだか悲しい。

たとえ一部であろうとも、母親達があくまで自分の子供を野放しにし好き放題させるといふのなら、こちらもそれなりの育て方をしないといけない。でなければそれこ

そいつかは、自分の子供は破滅してしまうだろう。

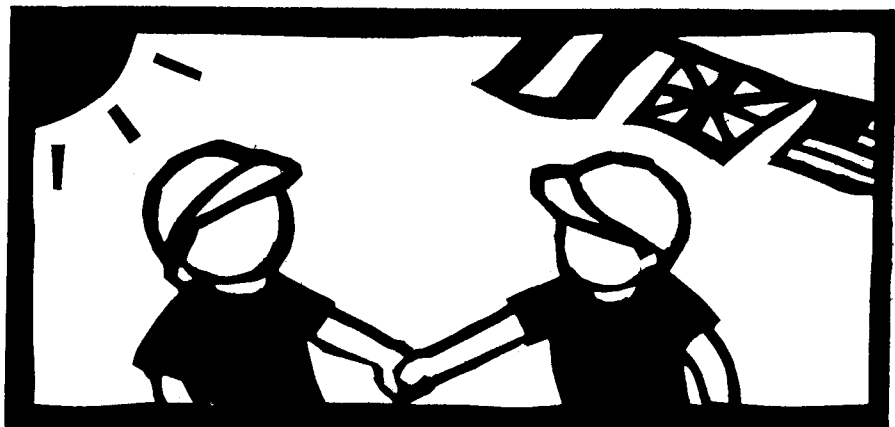
自分勝手大賛成、うちもそれでいい！と方針を変えればいいのかもしれない。しかしそう簡単に割り切ることもできず、自分の中で答えてないまま、複雑な思いで暮らしている。

## 最後の運動会

鹿児島県鹿児島市●新坂 英子

平成六年九月二十五日、日曜日、最高の運動会日和でした。昭和六十三年秋の長男の運動会に始まった我が家の運動会も、幼稚園の部は今年で最後になりました。三人兄弟の末っ子の二男は、子育ての要領もなんとなくわかり、余裕をもって親が接することができたせいか、明るく活発で、本当に子どもらしい子どものような気がします。その彼が、幼稚園最後の運動会でどんな活躍してくれるのでしょうか。

かけっこにリレー、お遊戯と一つ一つプログラムが進むにつれ、「これが幼稚園で



は最後なんだ……」と一人感傷にふけていました。最初の運動会でも、何を見ても胸がジーンとなり、目がウルウルとなったのですが、今年はまたそれ以上のものが胸をよぎりました。

息子と同じクラスに、生まれつき体の不自由なY君がいます。装具を付けてはいるものの、みんなと同じように活動している姿には、いつも感心させられていました。

私たちは今年四月に引っ越してきて、息子は転園生。だから、昨年入園したY君の存在はまったく知りませんでした。息子もそのことについては、何も言いませんでした。私がY君のことを知ったのは、長男（小学五年生）の家庭訪問の日でした。なぜかという、担任の先生がY君のおとうさんだったのです。お兄ちゃんの家庭訪問で、一緒に座っている二男に先生が尋ねました。

「Y君って知ってる？」

「うん、知ってるよ」

「先生の子どもなんだよ。仲よく遊んであげてね」

「いつも遊んでいるよ。でもね、おかあさ

ん、Y君、足をけがしているんだよ」

私は、てっきり、転んでけがでもしているのかと思ったら、

「あれは、けがをしたんじゃないなくて、生まれつき足が不自由なんだよ」

と先生が言われ、そのとき初めて知ったのです。

そのY君と息子とは体格も同じくらいで、かけっこも同じグループで走り、リレーも、Y君からバトンを受け取って走らし、お遊戯も隣同士で踊っていました。ただY君はみんなと同じようには走れないので、スタートの場所がずらしてありました。いよいよ、ヨイドン！　かなり前からスタートしたY君をゴールのほんの前で抜いて息子が一番、Y君が二番。リレーでは、一生懸命走ってくるY君のバトンを受け取って、ぼくに任しとけという感じで、走っていく我が子のように涙が出てきました。

お遊戯も、いっしょにスクラムくん——という節で、いっしょにスクラム組んでニコニコ。まったく障害のある子と接しているという感じではないのです。こ

くく自然に当たり前のように接していました。だから、Y君と同じクラスになっても、別に他の子と違うという意識がなく、前もって私に言うこともしなかったのでしょう。

障害のある子はその施設へ入れるようになっていきます。機能訓練など、必要なこともあるでしょうが、すべてを施設で行なうのではなく、健常児といっしょに過ごすことも、お互いにとっても大切なのではないかと思います。幼稚園を卒園するたび、同じ小学校で学ぶことはできないでしょう。そういう意味では、息子は、今、本当によい経験をしています。子ども達が、これから先も一緒に学べる場をもっともって作って欲しいものです。

一緒に笑ったり、ふざけあったりしている姿、本当に最高でした。ごく自然に接している子どもたち、またそのように指導してくださった先生方も立派だと思いました。一緒にいることで、いたわりの気持ちも生まれるはずです。心暖まる運動会の一コマにふれ、我が家の幼稚園最後の運動会は、幕を閉じました。

## 跡継ぎ様ご誕生

名古屋市中区●村瀬 智子

平成五年七月十三日。この日からおむつをかえるたびに「ああ、私は男の子を産んだのだなあ」と実感している。上二人が女であることを知っている友人にはもちろん、三人連れて歩いていると見知らぬ人にも、三人目が男の子でよかったわねと声をかけられる。私自身男の子ではっとしているのも忘れてちょっと複雑な気持ちになっしてしまうのである。

夫は男三人兄弟の長男。生まれたときから長男＝跡継ぎとして家業を継ぐように育てられてきた。夫の両親もはやく跡継ぎを産んでほしいと思っていたようだ。二人目が女の子だと知ると次はぜひ男の子をと言っていたそうである。そのころから自分は跡継ぎを産むために結婚したわけではないとか、跡継ぎがどうして男でなくてはならないのだからとか、考えるようになった。そして何よりも、三人目を産むとし



て、もし男の子だったらその子の将来を親が決めてしまってもよいのだろうかということ。夫自身は跡継ぎと期待されたことがブラスとなったようだが、自分の道は自分で見つけるべきだと思っている私は、考え方のちがいを感じてしまうのだった。

二人目の出産から二年。そろそろタイム

リミットが近づいてくる。やっと自分の時間が少しは持てるようになったところへ、行動半径の狭くなる十カ月間と、新生児の世話から始まる育児。ゼロからの出発には気が重くなるばかり。夫は私が産みたいと思うようになるまで待つと言ってくれてホロリとしたが、結論を引き延ばせばそれだけ負担が大きくなるだけだ。私はこんな約束を夫ととりかわし、ついに産むことを決意した。

一、男でも女でも無事に産まれたらそれだけでしあわせだと思ふこと

一、もし、男の子が生まれて跡継ぎにならなくてもその子の意志を尊重すること  
一、子どもの世話にできるだけ協力すること  
と

まだ生まれてさえない子どもの将来のことを、いろいろ思い悩むのは早すぎるかもしれない。様々に揺れる思いを打ち明けた尊敬する方からは、子どもには親や環境の力が及ばない、自分自身の力があるというアドバイス。子どもたちが成長していくうちに今の男社会も、すこしずつ変わっていくかもしれない。長女か次女が家業を継

ぐことになるかもしれない。とにかく、可能性は未知数なのだ。三人目を産もう。できれば男の子を……。私の中に、「跡継ぎ男」に反発しながらも、早く男の子を産んで見えない圧力から解放されたいという思いがあったようだ。夫と産み分けの本に目を通し、指導してくれる医師を訪れた。三カ月基礎体温を測り、リンカルという薬を飲みつつ、ほぼ計画通りに妊娠した。

こうして長男がめでたく誕生したが、夫の両親はこちらが拍子抜けするほど冷静で、これまで男なんだからといって姉たちと差別することはない。今は別々に生活しているせいかもしれないが、近い将来同居することが決まっているので、それからが正念場だろうと思う。男女の差別なく、自分で歩く道は自分で決める自立した人間になってほしいというのが私の願いだ。空気のように漂うであろう「跡継ぎ教育」のなかで、どう私の願いを実現させていくか？考えるのは、同居してからでも遅くないだろう。

(え・小林正子)

# 母校の「停学事件」を考える

横浜市磯子区 十文字圭子（32歳）

私も疑問を感じてはいた

この夏、いわゆる「昭和女子大学付属高校、大量停学事件」というのがあった。それを知ったのは九月も半ばになるうとする時だったが、普段はあまり真剣に見ないお昼のワイド・ショーについて、見入ってしまった。

かくいう私は昭和女子大学の卒業生なのだ。私の場合は大学のみであるが、何だか、人ごととは思えなかった。

ご存じの方もあるかと思うが、「昭和」はなかなか特色のある学校である。大学でさえも、通学時の服装に制限があったり、講義以外に年間行事の出欠を取られたり、慣れるまでは常にぴりぴりしたものだ。親元から通学の出来ない地方出身の学生は、一年間は必ず学生寮に入らなくてはならず、そこでは毎日就寝時に点呼があり、門限は七時。私は自宅から通っていたので詳しくは知らないが、寮の友人は常に忙しくて（色々な当番があっ

たらしい）、仲よくなったのは寮を出てからだ。四年間を過ごしてみれば、それほど

いつも緊張していた訳でもなく、楽しい学生生活だったとは思う。しかし、思い返すと確かに「何で？」と疑問を感じることも多かった。

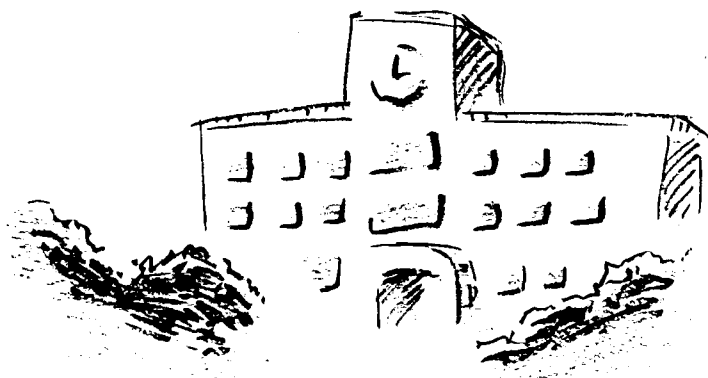
こんなことがあった。新校舎が完成し、今まで四大が使っていた所を短大に明け渡すことになり、講義を一日全部休講にし、全員で掃除をする事になった。それまでも大学の構内は学生

がしていたのだが、その日のやり方は徹底していた。

土足で歩く廊下や教室内を、掃いて拭いてワックスをかけ、その上、から拭きをして、最後には皆ハイヒールを脱いで歩き、重い木の机や椅子も全部運び、やすりまでかけた。そして何と、学長以下、数人の先生方の点検があったのだ。塵ひとつ落ちていない廊下のほんの少しの黒ずみに、チヨークで丸を付けられた時にはさすがにワナワナと震えが来た。

自分たちで使った所を掃除する、これはいいが、ここまでする必要があるだろうか。こんなことをするために、貴重な講義を休んで、何の意味があるのだろうか。二十歳を過ぎた大人に対して、軍隊か宝塚まがいのこの点検はあまりに失礼な話ではないか。そんなことを後で多少興奮しながら皆で話したものだ。それでも、誰も表立って抗議しようとはせず、「ここに限りは仕方がない」と諦めていた。

それは、学長に刃向かえば、どんな



ことになるか、まことしやかにいろいろな話が伝わっていたからだ。最終学年時にある、学長の講義を三回以上特別の事情がないのに休んだものは、いかなる理由があっても卒業することは出来ず、構内にあるその邸宅の門前で三日間立ち尽くしてやっと許して貰えたとか、そんな嘘か本当か分からない逸話が山ほどあった。

付属高校の校長でもある人見楠郎氏は、それほど厳格なイメージを私たちに与えてはいたが、それは教育者というものではなく、経営者というものだった。私学の特色を全面に押し出して、「前進これあるのみ」の姿勢で日夜邁進しているといった感じだった。

付属高校からの飛級で、成績優秀な生徒は高校三年で大学入学を許されたり、豪華な記念講堂では世界的なオーケストラやオペラ、バレエから落語まで色々な公演を行なって、学生に安く見せたり、英文科におけるポストンへの留学等々、数え上げたらキリがないくらい、数々の魅力ある記事で入学案

内は埋め尽くされている。

「昭和」の教育理念は、幼稚園から大学まで一貫しており、それはそれで見事なものだと思う。しかし、今回の事件はそこに問題を投げかけた。

## マスコミにも問題はあるが

始まりは東京新聞の「教育110番」に記事が掲載されたことだった。八月中に五回ほど、特集が組まれ、その後はテレビや週刊誌が後を追った。そこで、東京新聞の記事の要旨を簡単に紹介してみる。

「八月九日付。高校生の主催するパーティーに参加した生徒、三十余人が停学処分を受け、そのうちの十人ほどが『復学なし』であり、困った親が他の高校に転校しようと同校に証明書類を請求すると、『曲がったままの子を他校に任せるのは失礼なので転校は認めない』と応じない。そこで、東京都学事部に訴えた」

「同十三日付。懇談会が行われたが、学校側は態度を変えず、かえって父母



側をその『権勢』を楯に脅かすような姿勢で解決はみず。今までの同校の厳しい指導の数々をいくつか例をあげ紹介し、『息が詰まるような管理教育』と書いている」

「同二十六日付。都の学事部に訪ね、話を聞く。都は『希望があれば、学校は証明書を送付しなければならない』としながらも、『両者の話し合いで』と、逃げ腰」

「同二十七日。『高校生パーティー潜入ルポ』と題し、学校側が『不良化の温

床』としている実態に迫る。表向きは禁じられているものの、実際には『酒も煙草もあり』のパーティーを『禁止されるがゆえのやってみたさ、背伸びしてみたさがある』と好意的にまとめている」

「同三十一日付。学校側は転校を認めないという従来の方針を全面的に撤回、父母側の要求を受け入れた。しかし、既に都立高校への編入には間に合わず『遅すぎた方針転換』と結んでいる」



学校側を始めから批判的にみる新聞の姿勢は、父母側から新聞に訴えがあったということもあって仕方がない気もするが、それにしても、マスコミの「正義の味方面」にはいつもうんざりする。もう少し、冷静に公平に、事

実を伝えるべきだと思うのだが、どうもセンセーショナルになり過ぎている。が、そこを考慮しても、問題なのは「復学なしの停学処分」「転校を認めず」という学校側の態度である。どう考えたって「かたくな」だし、理解に苦しむ。

厳しい校則、それが「昭和」の「売り」になっていることは事実だ。子供の数はどんどん減っていくのだから、私学は特色を打ち出すか、偏差値を上げるか、何かしなくては、生き残ってはいけない。しかし、こんな功名の挙げ方は、いかがなものだろうか。

いくら校則で縛ったとしても、それによって「躰け」ることは、学校が思っているほど、出来ないだろう。かえって、逆効果ということだってある。もし、それが分かっているながら、一部の生徒を犠牲にして見せしめ効果を狙っているとしたら……恐ろしいことだ。

親は「厳しい躰けをしてくれる、しっかりした学校」に弱いものだ。子

供が不良になるのは、よくない学校に行っているから、先生の指導が甘いから、と、自分の事は棚に上げてそういったりする。しかし、そうだろうか。

思春期には心と体のバランスが崩れて、思い悩むことも多いことは、誰でも皆経験して知っている。ただ、どうも何十年かすると忘れてしまうのだ。一度や二度、羽目を外してしまうことだってまま、あるのだ。それと「曲がってしまった」ことは、根本的に違うと思う。

今回の事で、宙に浮いてしまった生徒たちの今後のことが思いやられる。復学しても、最後には方針を撤回した学校側への不信感が残るだろうし、転校は今から難しいかもしれない。しかし、若いうちの一年、二年は、どうということはない。躰いてしまった、などとは思わずに、一歩を踏み出していつて欲しいと、同じ学校に学んだ者として思っている。

(え・田村幹代)



## 加代ちゃんの話

埼玉県浦和市 佐藤ゆかり

ここに一枚の色あせた写真がある。

赤いワンピースを着た私と蝶ネクタイを締めた弟、そして桃色のセーターを着た加代ちゃん（仮名）。昭和四十一年春、私の小学校入学式の時に自宅で撮った記念写真。一人だけ普段着のままで写る加代ちゃんは、それでもその細長い顔にふんわりと笑みを浮かべ、少し気取っている。

## 人間マンドラ

昭和三十四年、故郷の北海道である病気が流行した。ポリオ（小児麻痺）・ウィルス。そのころお腹に私を抱えていた母は、慌てて遠く離れた実家に戻ったと言う。「ポリオを運んできた」。母は陰でそう囁かれた。

結果として、私はそのウィルスに感染しなかった。健常者として生まれた。だけ

ど、私の二カ月あとに生まれた隣に住む加代ちゃんは、その病を背負ってしまった。加代ちゃんは一人では歩けない。一人では立てない。声は大きいのに言葉がはつきりしない。それでも年かさのいかない私たちは、よく一緒に遊んだ。加代ちゃんは下半身を引きずりながら這い回り、カラカラと笑った。あのころ、私たちは確かに友だちだった。

もし、進行性小児麻痺というものがあるのなら、加代ちゃんはまさしくそれだったのだろう。遠い町の養護学校（地元には養護学校がなかった）に入学した加代ちゃんが変わっていく。会うたびに障害が重くなっていく。小学校に入った私も変わった。学校に友だちができる。家でままごとをするよりも、外で遊ぶほうが楽しくなる。二人の接点が、少しずつ消えていった。小学校六年の夏、自宅で寝たきりの祖母を介護していた母が胃潰瘍で入院。わが家は、絶体絶命のピンチに立たされた。このピンチを救ってくれた人たちの中に、元看護婦だった加代ちゃんのお母さんがいる。彼女の看護婦としての手慣れた介護に、祖

母は何度となく目を細めた。父が仕事で遅くなる日は、私たち姉弟を自分の家の夕食にも誘ってくれた。それなのに……。

あの日……。加代ちゃんのお母さんに夕食を誘われた、あの日。家には学校から戻っていた加代ちゃん。何年かぶりに会う加代ちゃんと、一緒に囲む食卓……。

病魔は昔よりもずっと顕著に、加代ちゃんの体をむしばんでいた。加代ちゃんの握りしめたスプーンが揺れる。覆いかぶさるようにして手元に顔を近づける加代ちゃん。だが、その一連の動作はどこかチグハグでもどかしく、こぼれ落ちる食べ物物の速度には間に合わない。それでも加代ちゃんは食事を続ける。何度も同じ動作を繰り返す。笑っているような怒っているような、不思議な表情で。そして、やっと口の中に食べ物が出た。ただ、その口からも汁が流れ落ち、よだれが後を追いかけた。合間に響く、彼女の素っ頓狂な声とぶつかりあう食器の音。

上目遣いで盗み見た加代ちゃんのお母さんは、それがハビリの一つでもあったのだらう、娘に手を差し延べながらもけっし

てすべてをしてやろうとはしない。加代ちゃんの弟は、何事もないかのように夕食を取っていた。私の弟の様子を確かめる余裕はなかった。

頭の中で思う。私も食べなければと。食べ終わらなければと。だが食べられない。何か胸につかえ、口に含んだ食物を飲み込むことができない。ようやく一口、二口……。

かわいそうとか切ないとか、そんな優しい気持ちじゃなかった。そんな生易しい言葉で言い表せるような現実ではなかった。もっと残酷な、もっと冷たい、もっと無神経な思いを心の中で、昔一緒に遊んだ加代ちゃんにぶつけた。

(どうして、そんなに、きかないの)

大人になると、子供特有の残酷さが一枚のベールに包まれる。ましてや今は、優しさが尊重される時代だ。

私も、街角で重度の障害を持つ人に出会うときりげなく、車椅子の通行に邪魔な自転車をとく。段差で車椅子を押すこともある。なぜなら、私は普通の優しい人でありたいから。優しい自分だと、自分のこと

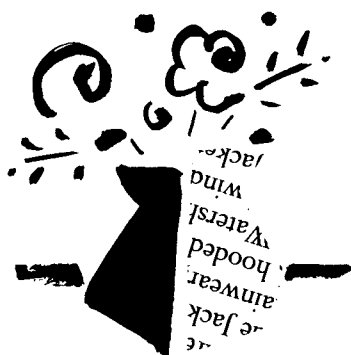
を認めたいから。

だけ……。自転車を動かしながら、自分に問い掛ける。

(私はこの人たちと差し向かいで、食事をすることが出来るだろうか)

頭で大変さを知っているつもりでも、心で同じ人間なのだとわかっているつもりでも、私の中にある生理的な何か小さな声を出して、この問い掛けに「ノー」と答える。その瞬間、私は「優しさの偽善者」になる。

この言葉に写真の中でふんわりと笑う加代ちゃんが重なり、それは苦い痛みとなつて、今も私の体を突き抜ける。



# お姑さん

北海道旭川市 香山なおみ(33歳)

昭和四年生まれ。身長一五〇センチ、体重三七キロ。「夫は外、妻は内」に徹し、一男一女を育てあげた女性。

結婚八年目になるが、夫の実家は九州。帰省は多くて年一回なので、彼女と共に過ごした時間など数えるほどしかない。しかしその中で私が遭遇した「?」や「!」は、数えあげたらきりがない。多分かなりユニークな、私のお姑さんを紹介したい。

まず第一の特徴は「清潔好き」。ただし、生活全てに関してはではない。掃除や洗濯は週一回でも平気な彼女が死ぬほど嫌っているのが「<sup>ばい菌</sup>菌」なのである。これが、彼女の父や姉が化学者だったことに関係するかどうか、定かではないが。

驚くなかれ彼女は、家族全員(と言っても普段は老夫婦二人)の食器を洗った後「煮沸消毒」している。結婚して初めて夫

の実家を訪ねた時、台所の奥のほうから、カチャカチャと何やら慌ただしい音が延々続くのを聞いた。そしてそれがコンロで加熱中の大鍋のものと知り、一体何の料理だろうと不思議に思ったものだ。まさか、鍋で少量の水が煮沸し、箸やスプーン、伏せて重ねた茶碗や皿が小踊りしている音だったとは。



曰く、「何度もやめようと思ったが、その度に誰かが風邪を引くもんだから、やめられなくて」。つまり、家族の一員が風邪の菌を保有すると、食器を通して他の家族に感染する。それを防ぐための殺菌とのこと。

しかしこの殺菌も、実は命がけである。彼女の夫は決して仕事中毒ではないが、家庭内で妻がすることには一切、手も口も出さない。その舅がこっそり教えてくれた。時間のかかる作業なので、点火後、台所が無人になるのはいつものことだが、ふと見ると木箸が焼死体になって煙が上がっていることが一度ならずあったとか。「消毒もいいが、火事にも気をつけてもらわんとな」笑えない。

第二の特徴は「話し好き」。きつと多くの女性が同様で、私も決して例外ではないが、彼女はなかなか凄いい。

一、二週間に一回は我が家に電話が来る。一時間で切れれば、短かったという印象が残る。内容は、向こうの孫、つまり義妹の子供達の近況、彼女の好きな民間療法や生活の知恵あれこれ、あとは他人の噂話など。ただ話が長いだけではない。切れ目がないのだ、話題が変わっても。あのきやしゃな身体の、一体どこからあれほどのエネルギーを発生させるのだらう。

電話は大抵、子供の寝静まった夜にかかって来るが、休日の朝、一家で外出する

寸前ということもある。しかし切れない。「あー」の「あ」の字を発する余地すらない。たまに決死の覚悟で開口一番「あ、お母様すみません。ちょうど出かけるころなんです」と早口で先手を打つ。そんな時は「あ、そう」と、三十分ぐらいいで釈放してくれる。

たまの帰省の時も、親孝行のつもりで聞き役に徹している。特に到着日の深夜は眠い目をこじ開け、出発日の早朝は荷造りの手を休め、ひたすら聞いている。「そうなんですかー」ばかりの、芸のない相槌でも、彼女は喜んでくれる。

第三の特徴、これは「子離れしていない」ということだ。私の見る限り、彼女の唯一の生きがいは、子や孫の成長・成功への期待である。特に男児は「直系」として別格になる。私が大してよい嫁でもないのに丁重に扱われているのは、彼女の長男を内助の功で支え、そのまた長男を養育すべき女だからに違いない、と思う。

私は第一子でいきなり「直系」を産んだ。彼女の、名付けへの介入の執念は、喜劇的でさえあった。すったもんだの挙げ句、結

局はこちらの言い分を通すことになったけれど。

これだけはやめてもらいたいと思っただけのことがある。彼女は私達の仲人はおろか、夫の上司にも中元、歳暮、さらに春秋の果物の発送を欠かさない。差出人名は夫の父。私は既に反論する気力も失せてしまったが、夫はまだ根気強く怒り続けている。中止させるには至っていないが。

私は、はでに衝突するのが面倒だという事無かれ主義で、大抵のことは聞き流しているが、夫は実の親子なのだから当然、言い争いもする。そんな時、彼女は必ず言う。

「よかれと思ってしているのだから」

愛する子供や孫のためによかれと思っただけの手出し・口出しが、必ずしもプラスに働くとは限らない。こんな単純な理屈が、当事者になると見えなくなる。

我が身を振り返れば、息子は三歳。母親として何をすべきか、すべきでないのか、悩みの多い時期に差ししかかって来た。また、子や孫だけを生きがいにしない「私自身の人生」を考えていくことも、これから

の大きな課題だと思っている。

彼女とおつき合いは、あと何年残っているのだろうか。実は「当分、九州と北海道に離れた状態が続くそうだから」決心した結婚なのだが、いつかはこの快適な距離を解消せざるを得ない可能性も十分ある。今はただ、その日の訪れが限りなく遠いことと、それまでに私自身が少しはオトナになり、彼女と平和な関係でいられることを願うばかりである。

## カズおじさん

栃木県鹿沼市 神山寿子

カズおじさんは母の兄である。

カズおじさんは一言で言って、困った人である。

兄弟が十人もいると、一人くらいこういう人ものいるのかもしれないけれど、家族も持たず、職を転々として、大ボラを吹いてはひんしゅくをかい、ちゃらんぽらんなことばかりしているのに人当たりがよく、い

つのまにか人の懐にスルリと入りこんで、いくらのお金を借りて消えてしまう。そんな人である。

ずいぶん前に、母方の祖母の法事があった。精進落しの会食をどこでしようかと、母の兄弟が相談していたら、カズおじさんが、上野の東天紅でやつたらどうだ、と提案した。

「あそここの社長はオレの学校の先輩で、よく知っているんだ。あそこに頼めば、いいようにやってくれるから」

「社長をよく知っている」というのはマユツバとしても、同窓であるのは事実だった。だったので、一同カズおじさんに手配を任じた。

法事の当日、カズおじさんは急用で来られなくなった。

幹事が来なくてどうするんだ、とおじ達は文句を言ったが、法要の後、皆で東天紅に向かった。

「予約していた〇〇ですが」と案内を乞うと、予約はされていないという。何かの間違ひではないかと、「〇〇の名前でなければ、××で予約されてませんか」と、もう

一度尋ねた。

やはり、ない。

「社長と同窓のはずだから、もう一度調べてもらえませんか」

「予約なしでも、なんとかありませんか」

「本当に困っているんですよ、この人数ですから」

「どうしても、だめですか」

「今さら、そんな……。どうしたら……」

ゴールデンウィークの初日であった。上野の山はゴック返していた。子供も入れて、二十人余を受けいられる店は、容易には見つからなかった。

やっとのこと、ある料理店の片すみ、に、ギューギューに詰めこまれ、座るやいなや、カズおじさんへの攻撃が始まった。「あんな人にまかせせるなんて、どうかしているわよ、まったく」

「そんなら最初から言やいいだろう、今ごろになって、そんなことを！」

「前からあいつはどうしようもないヤツだった」

「もう口もききたくないね、ロクデナシだよ、本当に」

いくら悪口を言っても、本人のいないことには、空振りもいいところで、料理が運ばれてくるころには、カズおじさんの欠席裁判も尻すぼみになってしまった。

私の知る限り、カズおじさんは「いいかげん」ということで皆の評価が一致していたのに、何かことがあるたびに、カズおじさんの言うことに振り回されるのは、カズおじさんの口がうまいだけでなく、他の兄弟が人がいいというのも原因だったのではないだろうか。



カズおじさんが音信不通になって、数年たった。

カズおじさんが亡くなった、という連絡をしてきたのは福祉事務所の人だった。カズおじさんは、最後は福祉の世話になって、亡くなったのだった。

亡くなってしまえば、故人の思い出が胸に……と思う暇もなく、福祉事務所の人はとんでもない話を切り出したのだ。

お金に無頓着なカズおじさんは、年金や保険の受け取りなどもおさなりにしていた。福祉事務所の人が手続きをしたところ、亡くなる数カ月前に、五百万円近くのお金がカズおじさんに渡ったそうである。

お金を手にして、おじさんは言った。「長いこと借金して、迷惑をかけた弟に、金を返しに行きたい」

しかし、お金を返しに行ったおじさんに對し弟は、「こんなハシタ金はいらない」と、たたき返したそうで、おじさんはその言葉に発奮して、「この金を元手に競馬でパツと儲けて、弟にバンと返してやるんだ！」と話したらしい。

亡くなったあと、福祉事務所の人が調べると、お金は五十万円ほどしか残っていなかった。そこで、こう尋ねてきた。

「失礼ですが、お金は受け取られましたか？」

「ハシタ金をたたき返した」と言われた当のおじは、カズ兄とは何年も会っていない上に、「バンと返して」もらってもないかった。

普通なら、ここで話は終わり、何にお金を使っちゃったんだろうね、で済むはずなのだが、話はまだ続く。

事務所の人は、カズおじさんがサラ金に借金を残していた、と伝えてきたのである。

分かっていただけで、百万になる。分かっている借金もあるのではないか。

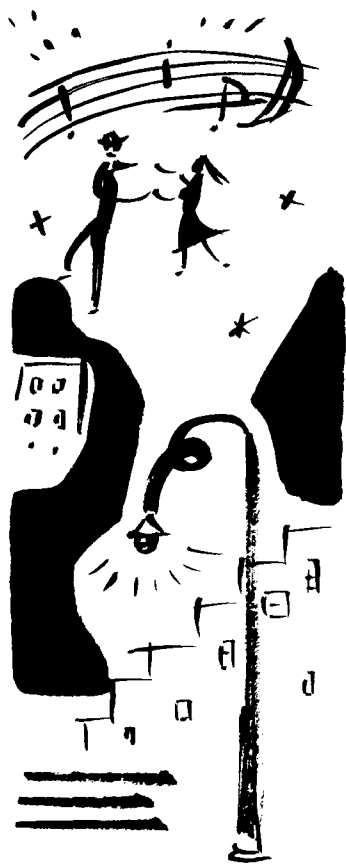
兄弟たちはビックリした。今までさんざん迷惑をかけられた上、死んでからも借金を返済させられては、たまらない。

カズおじさんの兄弟は、八十を越えた姉から、還暦の妹まで、相続放棄の手續にゃんやわんやである。

最後の最後まで、カズおじさんは困った人であった。

本当に困った人だったのに、案外憎まれでもない。カズおじさん、徳な人生だったんじゃないかな、と思っている。

(え・カステラネンコ)



# 現代お見合事情

東京都

Y・M

日本シリーズも終わり朝夕寒さを感じ始める今日このごろ。

電話が鳴る。出るときまって「お話は何もないのよ」「どなたかいらいっしょいませんか」とお母様達からの催促の声。

そのうち郵便が配達されてくる。一通り目を通してノートに身上書を写す。送り先の決まっている人は送り先をメモして発送する。話がまとまらずに返送されてきた身上書をまたノートに記す。

一枚の身上書をめぐって、適当な人はいないかと写真を繰りながら探し、

見つかるとにかく電話をして相手の様子を確かめて、知る限りのお薦め言葉を書いて送る。とにかく溜め込みたいように、その日の内に整理することが大切なのだ。これが現在の私の日課。でも一通も届かない日もあるのである。

## PTAがことの始まり

もう十年以上も昔、娘が高校のころPTAの集まりの後、お茶を飲みながら誰かがお嬢さまのお相手探しを言い出した。すると皆からわいわい色々の男性の話が出てきた。こんなこともあ

るんだ、と昔、自分も見合結婚だったことを思い出していた。

その後間もなく、主人の伯母が息子の縁談を頼んできた。そこで先日のお母様をお願いしたら、一度でうまくことが進んで結婚した。割合簡単ではないか！これが私の仲人第一号だった。

そのうち、昔社宅で一緒に過ごしたMさんのお嬢さんに、お相手はいませんかということになった。このご一家には大変親切にしてくださる、娘の小さい時はよく預かっていただいた。

恩返しと張り切ってお母様方にお願



が、お嬢様の背が高く、二十八歳ということもあって今度はなかなか思うようにいかない。

でも乗りかかった舟とばかり、学校時代の友人や、その方の知人にと少しずつ輪を広げてお願いしていった。久しぶりに話をしてまた仲よくなった友人、新しい友人もできて楽しく、子供の教育、家事のことなど教えられることがたくさんあった。その結果Mさんも結婚が決まった。結婚式にもご招待いただいて友人と共に出席した。

お世話できてよかったとしみじみ思ったらうれしくて、色々の人に「ねー決まったのよ」と話して歩いたら次第にあちこちからお頼まれするようになった。その間何度となく、「もうやめよう」と思って整理もした。でも断わり切れないこともあって「この人が決まったら」と思っているうちにまた、書類が集まってくるといふ繰り返し。

いずれ娘の時に役立つこともあるかと思ひ、同じようなことをしている友人達と写真を交換したり、集まったり

して続けていたけれど、そんな調子だからなかなかまとまらない。一年に一組も成立しなかったこともある。

その後平成二年春、娘も結婚し一段落ついた時、お料理教室仲間のお母様から、「うちの娘をお願い」とお頼まれた。娘が結婚のお世話になったIさんをお願いをして、頼んだり、頼まれたりしているうちに、二人のお嬢様がめでたくゴールインとなった。

このIさんは、私以上に経験の多い方で、話の伝え方、表現の仕方、お世話をする人達の中にも色々な考えがあるということなど、たくさんのことを教わったのである。

さて我が家の一人っ子が家を去り、主人と二人の生活にもなれ、少しは暇もできた。字を書いたり、記憶したり、電話で話したりで頭も使うし、新聞や本で若い人達の考えを知ったりで、結構ボケ防止にも役立っていると思います、今はどっぷりお見合の世界にのめり込んで、お見合おばさんをやっている。

## 変わるお見合の世界

十二、三年前と今ではお見合も変わってきた。前は男性は一人でやってくるが、女性はお母様と一緒にが多かった。今は本人達で出逢うことが



多い。ただ昔は男性も女性も、真剣に相手に向き合って一生懸命、一度でお断わりということは少なく、お見合の日時を決めるのも楽だったように思

う。今はとにかく、自分の予定が優先でなかなか日時が決まらない。昔はお母様達も子供達とよく話しあって、親の意見も考えも伝えていたし、お見合の結果の報告もきちんとされた。写真の郵送時も返送時もお礼の言葉が添えられていた。

今は写真を送っても、気に入ったかどうかなかなか返事がない。我慢してひたすら待っていると身上書がそのまま戻ってくる。中にはこちらで書いたメモがそのまま入っていることもある。返事がこないのに遂に催促をする、と、「まだ本人に話していません」といわれることまである。

親が子供に気を遣いながら話すことが多いし、ノーと言えば決して逆らわない。このごろは私のほうが強くなっている。「そんなことをしていらない」は決まりませんよ。男性も女性も選ばれる時代ですから」というと、「すみませんが、今度お見合の折にでも本人に話してやって下さい」と逆に頼まれてしまふ。

親が子にどうしてこんなに遠慮するのだろう。男性も寮暮らしなどで親と別に住んでいる場合、仕事が忙しく返事が一カ月ぐらいかかることはざらである。まして医者や役人だったりするとなおのこと。

時折友人達と「何しているんだろ」と言い合ったりしながらひたすら待ち続け、時折催促を入れる。中には身上書が本人のところまで行かないで、母親の手元から戻って来ることも。

女性は何しろ条件が多い。せめて私立大学なら早稲田、慶応大学の卒業生を（世の中にはそれ以外の私立卒業生のほうが多いのに）、商社か、金融関係の人、海外に赴任する人、明るいスポーツマンなどなど、条件は日々増え続ける。男の子はまず相手の顔、学校よりも性格よりも好みの顔と、先のことなど考えない人が多い。

こんな二人が出逢うまでが大変で、写真と書類で逢って見ることになってから日時の調整、前日に確認の電話をして、当日の洋服の色を伝えておく。

それでもどこそこのホテルの花屋さんの前、というのを間違えて逢えず、後日もう一度ということもある。出逢ってもその日のうちに返事がくるのはごくまれで、翌日になっても言っていない。こちらから電話をするに「フィーリングが合いません」という答えでがっかりする。それなら早く言うてくれればと思いつながら、お相手の方にひたすら電話口で頭をさげ、伝えてホッとする。

今年もあと二カ月たらず、何回ぐらのお見合があったかとノートを繰った。一月三日に始まって十月末まで八十九回、それで決まったのは一組。どういう訳か毎年一組しか決まらない。三十三年生まれの男性と四十年生まれの一人っ子の女性である。昨年は三十四年生まれと四十年生まれの背の高い人同士のカップル。友人が四組、ベランの方でも五組か六組、それほど、相手選びは大変なのだ。

こういう人たちは決まらない理由があるのかもしれない。学生時代のコン

パでも職場でも出逢いがなかったり、仕事が忙しくて気がつく周囲に誰もいなかったり、そこでお見合の仲間入りをする。

背の高い、明るいスポーツマンでハンサムな男性は、職場の女の子がどんなアタックしていくのでまずお見合では見かけない。女の子はそれでもそんな男性をとひたすら望んでいる。

しかし現実には、自分で相手を見つけれない、おとなしい優しい男性としっかり者の女性という組合わせになる。女はひとつひとつ細かく、厳しくチェックして、一つでも気になるところ、納得できないところがあるときはすぐに断わってくる。決して妥協しない。

男性は食事をご馳走し、ドライブ、音楽会、デイズニランドなどと一生懸命デートの計画を立て、楽しく家まで送り届け、大サービスするのだが、次の日フィーリングが合いません、と断わりを受ける。さっぱり分からないと嘆きつつ、また新しい出逢いを探し

始める。今年中に結婚したいといいたが……。

東京近郊の人はまだいいけれど、転勤で地方に行った人は本当に大変だ。これと思う女の子はまず「イヤよ」と言う。千葉や、群馬あたりでも住みたくないと言う。

母親も結婚してからの転勤は仕方がないが、初めから地方は困りますと言いつ切る。

地方でもどこでも行くと言う子には男性のほうが振り向かない。接点を探しながら年を重ね、女性の一つでも若い男性をと定年までの年数をかぞえて、それでも決して自分の意志は変えない。男性は若い可愛い女性を望みつつ、だんだん疲れて、もういいかと言いつ始める。しかし年々相手を見つめるのがむずかしくなる。「待っててよかったね」「頑張ったかいがあった」と言える女性はあるが、そう言える男性には出逢ったことがないように思う。今、どうしても相手にめぐり逢えない人達を幾人かかかえており、機会あ

ることにPRにつとめている。そして親ごさんには、必ずお相手はいるのですからと慰めている。

どんな人がだめなのか。それは女性も男性もしゃべれない人、しゃべりすぎて人の話を聞かない人、スポーツをしない人、友達のいない人、趣味のまらない人、暗くぐちっぽい人達だ。

今どき友達がいらない人などいるのか？と思われるでしょう。だが、だがいるのです。話題のない、自分の考えもない、言われたことしかできない人がいるのです！

## いったいどうなったんの？

Y君は三十一歳、事業家の次男で背も高く感じのよい青年である。一級建築士でいずれ父親の別会社を継ぐ。小学校は渋谷の松濤、中学校は麴町、高校は私立男子進学校、大学は日本大学建築科。彼は初めてのお見合の日、二人でホテルを出るとどこへ行つてよいか考えつかず、見かねた女性が銀座に連れて行った。銀座も初めての彼はた

だ歩くだけ、お茶を飲む店も彼女に決めてもらった。

テレビにも映画にも無縁の彼は話題も見つからず、帰りましようと言われ外に出たが、「僕の乗る駅はどこ」と聞いて彼女に呆れられて断わられた。その後何回となくお見合を続けているがなかなかうまく行かない。

銀座は知らないということが一番よく分かる池袋に場所を移して頑張ったけれど、職場と家をただ往復する彼はただ真面目なだけ、言われたことは出来るけれど、というタイプである。

いろいろテコ入れをしてお見合十五分前に待ち合せ、計画を立て、話題を探し、食事をする店を決めて関西の事業家のお嬢様と出逢った。回数も重ね練習をした効果もあってお付き合いが進んだ。デート三回目の時彼女が「一度大阪へも来てください」と誘った。彼は「ホテルを取るのはどうすればよいのですか」と聞いて、「僕一人で行けるかナア」と心配し始めた。一人で遠くへ行つたことも、一人旅の経験





気が合わないので結婚退職を切望しているが、なかなか思うようにいかない。心優しい素直な可愛い娘に、お逢いいただける男性はいらっしゃらないのですか?と今日もお便りが届いた。

この方には、そんなに東大卒の方はいらっしゃらないのだから……とさんざんお母様にお話しして、少し条件の

幅を広げていただいたのである。でも年齢差は五歳まで、慶応の経済学部ならよし。医学部は慶応と慈恵医大まで、理系大学はすべてだめ、ということとで慶応大学卒の三菱信託と三井不動産にお勤めの方のお話をお薦めしたら、私共の考えとは違いますがとお断わりを受けた。仲人役の知人の一人、Hさんに改めてお願いしたら、ご器量のこともお考えになって、少しはご辛抱なさらなくては、と厳しいお返事。ああ難しい、とお嬢さんの写真を眺めながら改めて思う。でも絶対にご縁がないとはいえない。何処かで素敵な出逢いがあるかも分からない。

親は子供にこよなく手を掛け、お金を掛け、大切に育てていく。そして望みを託す。男性の親は、せめて早稲田、慶応、上智大学ぐらいを卒業した頭のよい可愛いお嬢さんをついて、女性の親は、自分の子が育ってきた生活より一つ上の生活と、一流大学、一流企業に勤める気楽な人で、家の頭金ぐらいいは出してくれる親とか、実家の近

くに住んでくださる人を、と希望する。足かけ十三年、相手探しをした男性の結婚式の時、司会をした友人には中学生の子供がいると聞いた。何と無駄な時間。でも八年かかってやっと結婚した医者、七年目に今まで目標にしていた人とまったく違った女性と結婚した弁護士さん、五年、六年と時間を費やす女性、男性はたくさんいる。でも女性は独身の友人と堅く結束し、決して妥協しないことを誓い合っている。「私達、決して安売りしないようにしましうね」と……。

今まで誕生したカップルは十六組、その内二組が離婚した。私がお世話したのは女性のほうだ。その二人とも一年後にはそれぞれ見合で再婚し、一人は初婚の男性と出逢って幸せに暮らしている。男も女も今や離婚はキズにならず、かえって三十八まで一人だったのはおかしいのでは?と初婚のほうが敬遠される。

今の勤めをやめた時、妻の実家の事業を手伝って優雅に暮らしていきたい

から、と事業家のお嬢さんで一人っ子か、男の兄弟のいない人を希望する男性も増え始めた。これも時代の変化なのだろう。

## 人とのつながりが希薄な女と男

それにしても決断力のない女性と男性が多いのはどうしてだろう。それぞれ皆心の表現が下手だ。家庭では思っていたことを全部話さなくても、周りが察して用が足りる習慣がついているからだろうが、言葉が足りない。一言が足りないために誤解を生み、せっかくのご縁も途中でだめになっていく。お見合がうまく進んで付き合うことになったとき、電話番号と一緒に電話をかけるタイミングから話題まで仲人が教えてスタートさせることもある。

それにしても有名中学から一流企業と歩いて、さて結婚ときて、一度交際しただけで女性に振られる男性の何と多いこと。一度も失敗を経験せず、決して人と違ったことはせず、卒からはみ出さずに来た人に魅力はない。それ

も、男性ばかりのエリート校から東大、一流官庁、企業に行った男性はとくにまずいようだ。東大卒を条件にする女性も、一度逢って魅力のない男性は容赦なく振ってしまう。会話のつまらない男に、女が惹かれるはずはない。

一方友人と比べるだけで相手に望むことばかり多く、何もしない、何も考えていない女性も多い。グループで海外旅行、ショッピング、グルメ、おしゃれ上手で遊び上手。自分が楽しむことだけで相手を思いやる心のない女性が増えている。しっかりと仕事に生きているS子さんも、転職にふみ切ったA子さんも、自分の今の生活を変えなくてもよい結婚を望んでいた。そんな身勝手なと思っていたら、二人とも思い通りに尽くしてくる五、六歳年下の男性と職場で出会い、結婚した。驚いたものだけれど、こうした女性の数は増えているのだろう。

## 見合結婚も変わる

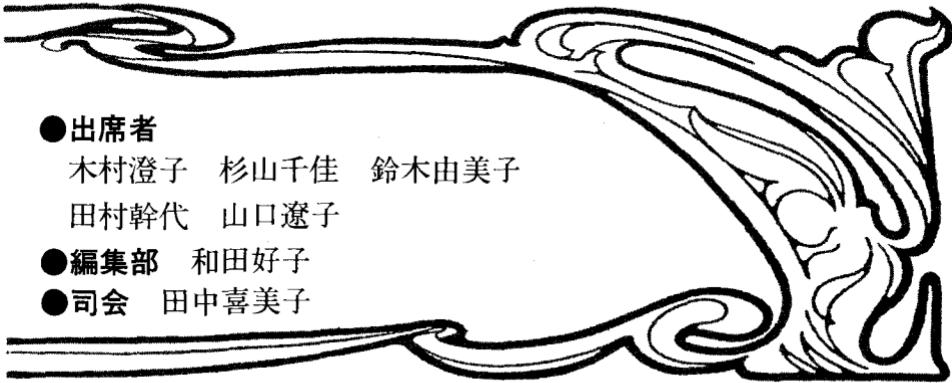
友人の娘さんがついに結婚した。

おめでとう、よかったねと話し合ったら別居結婚とか。夫の赴任地には行かず仕事を続けるそう。これもお見合結婚と聞いて驚いた。生活費は主人からもらい、週末は友人達と旅行やゴルフ、たまに帰京したご主人と外食、食事は作らないと始めからの約束とか。

見合結婚も若い人達の考えで少しずつ変わっていつている。でもどこか違っているように思われてならない。健やかな時も病める時も、お互いに助け合つてと言う誓いの言葉はどこへ行つたのだろう。

明るく逞しい、頼りになる男性と、芯はしっかりしているが、優しくて気だてと頭のよい女性。大切なものをはっきりと見きわめられる若い人々。そんな人達が社会に巣立ち、幸せなカップルとして誕生するために、少しは自分の力が役に立てば、と思いがら、私は友人達といっしょに赤い糸を今日もまたつないでいく。

(え・小宅昌枝)



●出席者

木村澄子 杉山千佳 鈴木由美子

田村幹代 山口遼子

●編集部 和田好子

●司会 田中喜美子

司会 今日はいつになくたくさんの方の出席があって、この問題は皆さんにとって、非常に興味のあるテーマなんだと改めて思いました。

この呼びかけ文は和田さんが書いたんですが、ひどく大きなことが書いてあるんですよ。「夫に危機感を持たせよ」「ミズ色の人間模様」の連載が終わって、「ここには現代の性の自由の実態が表われているのではないでしょうか」とあるんだけど、「夫に危機感を…」は、怒りの声が非常に激しくてね、「下品だ」と言われました。

確かにちょっとマズかったなあ、と思いましたけど、「毒食らわば皿まで」って感じで掲載しました。今日はそれも含めて、「性の自由」について思う存分議論していただきたいと思います。

まず、「夫に危機感を…」「ミズ色…」の感想からお話してください。

●風俗産業に直結している夫婦の性

田村 「夫に危機感を…」は、一般の世の男の人たちの本音じゃないんですか。その

本音をよく書けたな、って感じですよ。

「ミズ色…」は水商売の世界では当たり前のことで、ただこの世界を知らない人にとっては興味深いだろうな、と思いました。

和田 「ミズ色…」は、ひどくおもしろかった人がいるのよね。

司会 うん。私もやっぱり、おもしろかった。じゃ、木村さん、どうぞ。

木村 「夫に危機感を…」は、最初のうちはおもしろかったですけど、どういう人なのか、よく分からなかったですね。肉体派っていうか、私、やっぱり売春の感じが嫌だった。

杉山 「夫に危機感を…」は、あの年代の男の人は恋愛がヘタなんだなあと感じました。もっと自然にできるはずなのに、ギクシャクしている。

「ミズ色…」は、「ヘエ」なんて感じでもしよかったんですけど、日常臭かったのでもっとテンションが高くてよかったかなと思います。

和田 もっとと波乱万丈の物語があってもよかった？

# 「性の自由」

杉山　そうですね。結局、最後は妻になっちゃって、なあんだかと思っちゃった。

司会　作者は、黛さんのことを中心に書いていて、あまり自分のことは書いてませんよね。ナンカ、隠している部分があるんじゃないかという感じがした。

和田　きつとそうでしょう。なかなか言えませんよ。

山口　「夫に危機感を…」はだんだん内容がつまなくなっちゃったから、最後のほうはあまり記憶にないんです。

「ミズ色…」は、こういうのが「わいふ」に出ること自体がおもしろいな、と。今は普通に家庭を持って生活していっちゃるんだらうけど、水商売時代と今の生活がどう関わっているのか、知れたかったですね。最後に、コトツと現在にタイムスリップしちゃった感じで、それほど新鮮な印象はなかった。

鈴木　「夫に危機感を…」は、ごく一般的な出来事だと思います。ただ若いときに、いい男女関係を持った経験があまりにもないので、考える力量がない。みんな女性たちはお金をもらってああいうことを望んで

いるんだとか、非常に技術的なことに走ってしまったりする。

「ミズ色…」に関して言えば、十年前に「性・妻たちのメッセージ」を書いた時、夫婦の性が風俗産業と直結しているということが分かったんですよ。

夫婦の性って、本当にミズ色で、風俗産業で行なわれていることはすぐ家庭の中へ入ってくる。だから、特殊な世界という感じはしなかったですね。労働システムとか、そういう部分では興味深かったけれども。

この間、雑誌社で三十歳前後の女性を対象にしたアンケートを読んだのですが、女子学生売春をしていた女性が田舎へ帰って高校の先生の奥さんになったとか、そんな話はいっぱいあるんですよ。

## ●近代的な恋愛は日本にはない

和田　昔はネ、芸者になったら芸者だけで、他の商売にくら替えするということはほとんどなかった。じゃ何になるかといったら、お妾になるか、どこかの女将、お師匠さんになるか、この三つですよ。だけど



田村幹代さん

といっぱいいると思う。

司会 あの人が感心なのは、悔しさがデコにはなっているんだけど、ともかくこの問題を突き詰めてみよう、と。それは私、買うのよ。だけでも、どうもその方向がヘンなわけ。

和田 プロの女性としか、そういう考えを起さないというのがおかしいですね。

山口 普通の女性との恋愛の失敗を恐れているんじゃないですか。

和田 恐れてるというよりも、やったことがないんですよ。

司会 だけどサ、周りの女にアプローチしようという気が全然ないわよね。恋愛っていうと、水商売へいくのが私、分かんない。和田 いや、分かんなくない。データがある。

一つは男女関係、夫婦の性が非常に貧困だということ。二つ目は家庭の中のセックスと水商売のセックスが重なりあっているんじゃないか、ということ。  
「夫に危機感を…」の男性は、男の中でもかなり不器用だと思いませんか？  
和田 あんなふうには不器用な人って、きつ

要するに、江戸時代を通じて恋愛は禁じられていたんですよ。結婚も恋愛結婚はいけなかった。恋愛を許されているのはプロの女性とだけで、そこで恋文の書き方とか言葉の使い方を教わった。だから日本の男って、恋愛はプロのところへいくという無意識の伝統がかなりあるんじゃないか。

## ★わいふバックナンバー

- 241号 こうして夫を変えました
- 242号 私のマスコミ体験
- 243号 病氣とのつきあい
- 248号 ウマイ話にだまされた
- 249号 夫の職業と妻の生活
- 250号 女の友情

最新刊！

シリーズ 老後の暮らし ②

老人ホーム／お金と介護

一〇〇〇円

核家族のための

子育てガイドブック 三〇〇円

書きたい女たちへ

体験的文章入門 一六〇〇円

変わる主婦・

変わらない主婦

—投稿誌「わいふ」の描く女の三十年—

一五〇〇円

お申し込みは電話でどうぞ。

☎〇三—三二六〇—四七七—

三二六〇—四七七三

明治時代になっても奥さんとは見合いで、色恋ざたは芸者とかプロの女性とする。近代的な恋愛は日本にはないですよ。

山口 日本人で多分、いまだに恋愛は反社会的な行為だと思っているんですよ。で、一回だけ許される。結婚に結び付く恋愛だけはいいことになっている。

和田 そうそう。

山口 結婚しちゃったらもう絶対に恋愛はやっちゃいけないことだし、あんまり若いときもやっちゃいけない。

司会 そりゃ、ちょっと古かない？

和田 それが全体的な合意ではあるのよ。だけど今は、それをみんなが破っている最中だから。

司会 セックスを伴った恋愛って、今はかなり自由になっていると思う。少なくとも婚前交渉は。

鈴木 処女性重視は団塊の世代で終わりますよ。

和田 ただ、親の世代は公認はしていないし、世間的にも公認されていないわけよね。

司会 まあ、日本は黙認くらいね。でも黙

認のところまでいったというのは、かなりスゴイですよ。二十年前までは絶対禁止だったんだから。

和田 今は実力突破して黙認のところまできちゃったわけよ。

今度の連載で、性の自由に関しておもしろいと思ったのは、売買春のほうへいく場合と、婚姻生活の中へ不倫という形で割り込んでいく場合と、両方のケースが出てきた。

普通女の人は、売春は汚いことであるとして、なるべく見ないで暮らしているでしょ。売春をした女の人を卑しんで非常



木村澄子さん

差別するし、売春婦を買う男もまともじゃないと考える。

じゃ、解決はどうするんだといったら、男が買春をしなければいいという話になっちゃう。この問題について皆さんに論じていただきたいのですが、日本の男は今度の連載でもわかる通り、買春に少しも罪の意識がない。

## ●性の自由とは

杉山 ほかの人はともかく、私の夫には、絶対に行かないでちょうだい、という強い気持ちがあります。日本の奥さんたちも夫に、「私のほうを向いてよ」と強く言っているんじゃないかな、って。

和田 言ったら、やめるかな？

鈴木 明治以来、婦人解放運動の先駆者たちは、一夫一婦制を守って健全な家庭を築きましよう、女が守っているんだから男も守ってください、と言ってきたけれども、その方向が間違っていたんじゃないか。

最初女の出産用と快楽用の二つに分けられた。そこには性の文化なんてないわけです。確実に父親の分かっている子供を

生まなきゃならない側の女たちは極度に禁欲的で、男たちに道徳を押しつける。

司会 だから和田さんは、やめてくださいと言っても無効ではないか、と言っているわけよね。杉山さんは、ごく清潔におっしゃってるけど。

杉山 もっと夫婦でセックスを楽しめばいいじゃないの、って。もう少しオープンに夫婦でそういう話ができるといいんじゃないか。

田村 それ、男に望むの、無理なんじゃないかなあ。

今はまだ、古い社会体制を引きずった男たちが生きてる時代じゃないですか。その世代に育てられたうちの夫なんか、そういう話をして通じないもの。

女性セミナーで、性生活は昔の原始共同体の時代に戻ったほうがいいんじゃないか、女の人も自由に恋愛ができる体制をとるべきじゃないか、という話があったんですよ。

今の男の人たちは女に枠は押しつけるけど、自由は与えないもの。

司会 一夫一婦制が女に世継ぎを生ませる



山口遼子さん

ための制度であったと考えるなら、まったくおっしゃる通りなんだけれども、なんだか私は、問題の根はそれより深いような気がするんだな。

つまり男って、女のお腹が大きくなっても本当に自分のかどうか分かんないわけよね。そうすると私が男だったら、不安だなあ。女を囲い込んで、他の犬が寄ってきたら、「シッ、シッ」って追い払うと思う。

和田 オスの縄張り意識。

私は、男は、自分の子供かどうか分からない不安から種付けに走るんだと思うの

よ。つまり一人だけに種を付けてたんじゃリスクが大きいんで、ほうぼうへ種を付けようとする本能的な傾向がありますよ。何か不思議なところがある。

だから男の、深い、うかがい知れない部分についても考えていかないと、この問題は理解できないんじゃないか。

山口 性には、支配する、支配されるという側面がすごくあって、人をコントロールすることが、かなり大きな快楽の要素になっているんじゃないか。

なんで女がきれいになりたいかといったら、男をコントロールしたいからです。やっぱり女の武器って頭脳より見栄えが大きいと思う。若いころ私は、頭がよくなるより美人になりたかったですからね。頭の高さで人を支配する快楽を知っている女はどうか知りませんが。

すべての男にモテたいとか、本当は思いませんか？（笑）

二〜三人 思う、思う。（笑）

和田 子供生む側からすれば、当然女もできるだけの男を選択しようとするわけだ。

要するに、今は黙認の形でセックスがだんだん自由になってきて、みんながいろんなことをやってるわけけれども、性の自由を手にした時に、はたしてそれをどう使うべきか分かってない。そこらへん、全然プログラムがないんですよ。

性の技術的なことが分らないだけじゃないに、恋愛とか結婚、不倫、その他どう考えていいのかでんで分かっていない人がたくさんいる。その中で性が自由になっていくわけで、とにかくルールがないのよ。

## ●結婚制度のなかの性は荒れている

鈴木 私の入社する出版社の男たち、みんな恋人がいるんですよ。一体正妻は何をやってんだらうと思ったら、郊外の家で生協の卵を分けてたりする。(笑)

ところがその後、子供の中学受験につきあって進学塾へ模擬テストを受けに行ったら、そこに女たちがゾロツといて。アッ、正妻はここにいたんだって。(笑) 正妻たちのエネルギーの注ぎ場所が受験になっている。

今男の人たちはお金で済ませる売買春じゃなくて、経済力のある女性と、妻との関係よりレベルの高い、緊張感のある恋をしている。

夫婦の性って、風俗営業的な部分と、排泄の部分の二つに分かれるんですよ。風俗営業的なサービスはもちろん妻がしているんですが、結婚制度のなかの性がムチャクチャに荒れている。

田村 杉山さんがおっしゃったように、自分を一生懸命磨いて、夫を自分のほうに向かせる努力をするべきだと思うんだけど、子供の受験に熱を上げているような人た



杉山千佳さん

ちって、そういう努力を放棄しているような気がする。司会 ある男が私にこういうことを告白してくれたの。

恋人の多い人なんだけど、だいたい十回ぐらいセックスすると興味が薄れちゃう、って。最初の情熱がなくなってくる。

十回というのは、生理的にいえば女を妊娠させるに十分な回数なんじゃないか。だから男は無意識に、女を妊娠させようと励むけれども、十回くらいでそういう気持ちにはなえてくるんじゃないか、っていうわけよ。

それは単に、相性の悪い女に手を出しているに過ぎなくて、素晴らしい人に出会えば奮い立って三年も五年も持続するのもかも知れない。だけど、どんなにいい夫婦関係でも、初期の情熱は五年続けばいいほうじゃないかと思うのね。

そこへ、うちの夫がどっから聞いてきて、「今の若いカップルってのはノーセックスらしいよ」って言うの。若い男の子たちがだめになって、三十代のセックスストレスがすごく増えているらしい。



鈴木由美子さん

和田 以前私が離婚の本を書いたときに調べて分かったことは、離婚に至るまでの何年間かはほとんどセックスがないわけ。セックスストレスになった場合、男はほかに女がいる場合がすごく多い。次にマザコンでインポになる男が多いんじゃないか。

それともう一つは、練習不足が挙げられる。つまり昔は夜這い<sup>ばい</sup>が公認だったりして、女性と練習する期間がかなりあった。ところが今はそういうものがないから、真面目な男性ほど困る、ということがあるかも知れない。

杉山 仕事が忙しすぎて、通勤も大変だし、それもあるんじゃないですか。

司会 それは口実だと思う。忙しいから夫婦のセックスがない、というのは。

鈴木 恋人を持っている男たちも郊外の家へ帰れば、俺は淡白だよ、いいパパとママでいようね、って顔をしていると思うんですよ。

司会 橘由子さんの本によれば、女でも親に隠れてこそそこそとホテルへ行ったりしていた時は燃え上がっていたのに、結婚したとたんに夫に対する性愛が冷めちゃうわけよ。エロスがなくなってしまう。

田村 女も秘密がないとだめなんじゃないですか。

司会 どうもそんな気がする。何か、障害がないと……。

和田 そんなこと言ったら、昔みたいに性がフリーだったころは誰もできなくなるはずで、やっぱり性的な能力が落ちているのよ。

司会 でも、フリーってのは、いつだめになるか分からないっていう緊張感があるから……。

和田 それとね、昔は他に楽しみがなかったのよ。セックスが非常に面白いことだったのよ。

## 自費出版は

“わいふ”へどうぞ！

“わいふ”編集部では自費出版の制作をしています。本をお出しになりたい方はぜひご利用ください。

自分史、回想録、旅行記、童話、詩集、歌集、句集、同人雑誌、絵本、コミックまで、何でも作れます。

費用はモノによりいろいろ違いますが、市価よりは確実に安いです。ご事情を伺いご相談に応じますので、ぜひお問い合わせください。イラストも用意できますし、お書きになれる方のために、聞き書きのまとめもいたします。

人生の記念にご計画なさってはいかがでしょうか。

た。

山口 今にバーチャルセックスばっかしになっちゃうかも知れない。

田村 あゝ、それはあり得るかも知れない。

司会 何？ バーチャルセックスって。

山口 バーチャルリアリティってよく言うじゃありませんか。三次元の立体が目の前に出てくるやつ。

田村 イメージだけのセックス。

司会 味けない……。

## ●売春と妻の座

鈴木 以前「わいふ」の近辺でもあったけど、男に若い恋人が出来てかなりもめたときに、奥さんが離婚訴訟にかかったら恋人のほうの熱が冷めてしまった。奥さんから捨てられるような男ならいいわ、と。

これまで女の人は、ドテツと家庭にいたら安泰だったけれども、今はだれでも五年で捨てられるという時代が来ている。

我々団塊の世代はまだ高校生の子供を持っているけれど、子供が成人したら、この問題はすぐ出てくるだろうと思う。私

が男だったら、下の子供が大学へ入ったら専業主婦の退屈な妻なんか、用ないですよ。

田村 そうなると、反対に女が男を捨てて場合もありますよ。人のものだから欲しかったんであって、男が奥さんを捨てて自分の所へ来るとなると冷めちゃう人も出てくるだろうし。

杉山 恋愛の何が楽しいって、女は男のきれいな部分だけ見ていればいいところよ。パンツは奥さんに洗わせておけばいい、と。こういう考え方であれば恋愛は楽しいだろうけど、男が奥さんを捨てた時にオサ

ンドンを恋人にやらせようとしたら、女たちは逃げていくだろうと思います。

和田 だけど男女関係って、恋愛だけで終わらないと思うんだな。一生は長いし、二人とも年を取ってきて、人生のパートナーとしてどっちを選ぶかといったら、奥さんのところへ帰る男の人もいると思う。

司会 「夫に危機感を……」は、最初は妻が必ずサインを出していたと思うんですよ。やっぱり夫との関係を修復しようという気持ちがあったと思うんだな。ところが夫がわけのわかんない男で、妻も嫌になっ

ちゃってほかの男の人の所へいっちゃう。

そのとき、妻に裏切られてショックを受けた夫が、次の瞬間に始めるのが買春だというのがおもしろい。

和田 私、あれは恋愛を禁じられた世代の悲劇だって気がする。

鈴木 四十ぐらいの独身の男女を比べた場合、男はすごく汚いんですよ。買春汚れている。そういうことはっかりやっている、どこかで人格の汚れが出てくる。女でも体を売って洋服などに換えていたら、そうやっていく。

でも四十の独身女性はきれいなんです。恋をしているから。既婚男性を恋人に



和田副編集長



田中編集長

して、結婚よりも上質な恋愛のなかで生きている。それを考えたら、独身男は既婚女性を恋人にすればいいわけ。フランスみたいに。そういうコースがあればいい。

司会 こりあ、スゴイことになってきたな。

和田 昔の夜這い時代、テクニックを教えるのは男じゃなくて女なのよ。成人式を終えた若者は、その晩、女と寝なきゃいけない。で、教えてくれる女性は添い伏しといって、普通の奥さんですよ。村の奥さんが当番で教える。

お寺か神社などの大きい部屋で宗教的な儀式をやって、食べたり飲んだり、それか

らいザってことになる。昔は公認のルールとして、男も女もだいたい四〜五人経験してから、一夫一婦に収まる。だから一番最初の子は父親が誰かわからないことはよくあった。

ところが明治になって、警察が踏み込んでそれを禁じちゃったために、成人式の日<sup>ゆづり</sup>に先輩に連れられて遊廓へ行くようになった。そしたら遊廓がすごい込んだわきゃよ。それまで人の奥さんに教わっていた連中がみんな来るようになって。五分しか教わらないから、男が下手になったって話がある。

今の若い人たちの実態を見ると、かなりそういうルールになってきているよね。何人か取り替えて同棲してみたりして。

司会 「ミズ色…」を読んで私が学んだのは、水商売に入る人って、普通の女のと同じなんだなあ、ということなんですよね。その部分がとてもいいなと思った。ところが最後のほうへいくと、やっぱりこれはマズインじゃないか、いけない商売じゃないかという気がしてきた。どこが悪い

だかよくわからないんだけれども。

一日四時間働いて月収三十万円というのは、確かにいい商売で……。

和田 田中さんの言うのは、男の機嫌を取るだけでお金をもらえるのがまともな職業か、ということじゃない？

司会 そうかも知れない。だけど妻だってそういう部分、あるでしょ。

和田 今はみんな、機嫌なんか取らないで夫から金もらってる。だから、国連が売春の定義を極力狭く厳しくしたのは、ゆるくすると妻まで入るからよ。

## ●本日のパートナーを 見つける努力

木村 青臭いって言われちゃうかも知れないけど、やっぱり結婚は愛情が根底にあるべきだと思うんですね。それがなくなればセックスレスか、家庭内離婚か、ほかに恋人を作るしかない。

性が自由になって、何をしてもとがめられない社会になっても、やはり大切にしたい相手を見つけてことが大事だし、それは頑張るべきことだと思う。

和田 だけど、やっぱり当たり外れはあるわよォー。(笑)

司会 超リアリスト、和田さんは。(笑)  
木村 どんなに外れても、当たるまで頑張る、と。

だから私、結婚しても婚姻届を出すつもりはなかったし、最初は通い婚だったの。私に通ってた。子供ができたので同居することにしたんですが、やっぱり婚姻届うんぬんにかかわらず、本当のパートナーを見つけるべく、性の自由は活用すべきだと思いますね。

快楽には精神的な快楽も含まれると思いますが、今の時代は自由を本当の満足を得る方向に使わないで、試行錯誤というか浪費的に使っている。

和田 その問題は個人の努力だけではだめだって気がするのよ。

再々言うけれども、恋愛・婚姻をだれもがうまくやれるルールが必要じゃないか。個人はすごく努力してきたのよ。でも今の硬直した一夫一婦制でうまくいった人は当たった人ですよ。私は当たらない人のほうが多いだろうと思う。

鈴木 間違いないことは、三十歳以上の女を自活できるようにしたら、すぐに女たちは一夫一婦制を壊しちゃうと思いますよ。

和田さんが考えている、すごく過激なことがあるでしょ。売春をなくしたければ結婚している女を自由にしなきゃ駄目だ、っていう考え。それを言うと、だいたいクリスチャンから反発を買う。

木村 やっぱりこれも南北問題じゃないですか。

同性愛も、武士社会の「葉隠」では勧めているくらいでしょ。一人前の男と思われなければ、同性にも慕われなければだめだ、とかつて。

和田 江戸時代は男のいる表と女のいる奥があって、その間に中奥、男の私生活の部分がある。小姓しかいない男の世界で、そこで恋愛をするのが当時の男の楽しみだった。後ろ暗い雰囲気なんてなかった。

木村 だけど、キリスト教社会じゃ……。

和田 今日日本にも、だいぶんキリスト教的な考えが浸透してきて、男の同性愛を女は気味悪がるけど、昔は女の同性愛も平気だったと思う。

鈴木 小倉千加子さんの本に書いてあったんですが、杉良太郎にたかる女たちは、良太郎グッズのTシャツを買い、ほほえみかけてもらって、また性の砂漠へ帰って行く、とあるのね。

これは主婦のことで、昔は独身女性あるいは死別女性に性の砂漠はあったんだけど、現代は当然のように既婚女性を指している。それがおもしろかった。

司会 だからサ、さっきのルールの話じゃないけど、私、契約結婚をほうぼうで勧めているのよ。でも、だれ一人耳をかさない。

うちの息子にもさせたいんだけど、彼が連れてきたパートナーに、「あなたたち、契約結婚がいいわよ。十五年たったらもう一度考えなさい」なんて言ったらサア、すぐヘンだと思われるよね。

和田 それは母親が言うべきことじゃない。息子が言うべきことよ。(笑)

(まとめ・宮前 和)

(次回の座談会のお知らせは、一四〇ページをくらってください)



## 敗者復活 引き受けます とちぎの人だけ！

私は「書かれたものは読まれるべき」だと思っています。書いて一步、載って二歩。

「1995」は五年目に入る月刊超ミニコミ。ただのコピーですが、まだスペースあります。

ボツ原稿なんてもったいない。載ることに慣れると、気軽に書けるようになりますよ。編集部も当番で楽しんでやっています。

八十円切手付返信用封筒十二

枚十千円が会費です。

▼問い合わせはまず郵便で。

〒320 栃木県宇都宮市西一三

一二七 大兼孝子

## 小学館の 親子ネットに 参加してみませんか

小学館では0〜3歳の乳児を持つヤングママを対象に、情報誌の創刊を準備中です。

創刊準備室では全国の元氣な

ママさんネットワーキングに、

情報発進基地としての登録（無

料）をお願いしています。地元

の情報提供、親子でのレポー

ト、ときには親子モデルまで、

さまざまな企画にご協力いた

きながら「生き生き雑誌作り」

を目指します。もちろん原稿料

や謝礼もしっかり出ますので、

親子ネットワーキングに所属し

ている方はぜひご連絡ください。

▼お問い合わせは株式会社G.B.

☎〇三―五二七三―三二〇一

Fax 〇三―五二七三―三二〇四

担当瀬戸まで

## 学習塾の開き方を 教えます

地域の生活者として根を張りながら、家庭教師や学習塾をやってみたい、と思っていられる方は、すでに十四回の実績あるこのセミナーへ参加してみませんか。

本来なら三日分のカリキュラムを、遠方からご参加の方のため、一日に圧縮した能率的なプログラムを用意しています。

▼日時 十二月十一日九時半から五時まで

▼場所 名古屋市中高橋学習セン

ター

▼参加費五万円 定員十名

▼申し込み・問い合わせ

☎〇五二―六二二―四九二六

十一月三十日まで

## ●情報コーナー もっとご利用を！

情報コーナーは皆さんのコミュニケーションのためのページです。もっともっとご利用ください。

お友達を求める、ゆずりますあげます、本探し、求職、求人、臨時のお手伝いを頼む、など、いろいろなことで、読者相互のたすけ合いをしましょう。趣味で作りになった作品なども、PRして販売なさってください。

ただし継続的に、仕事としてのPRをなさる場合には、広告料をいただくことがあります。金額はご事情をうかがい、ご相談の上とりきめます。

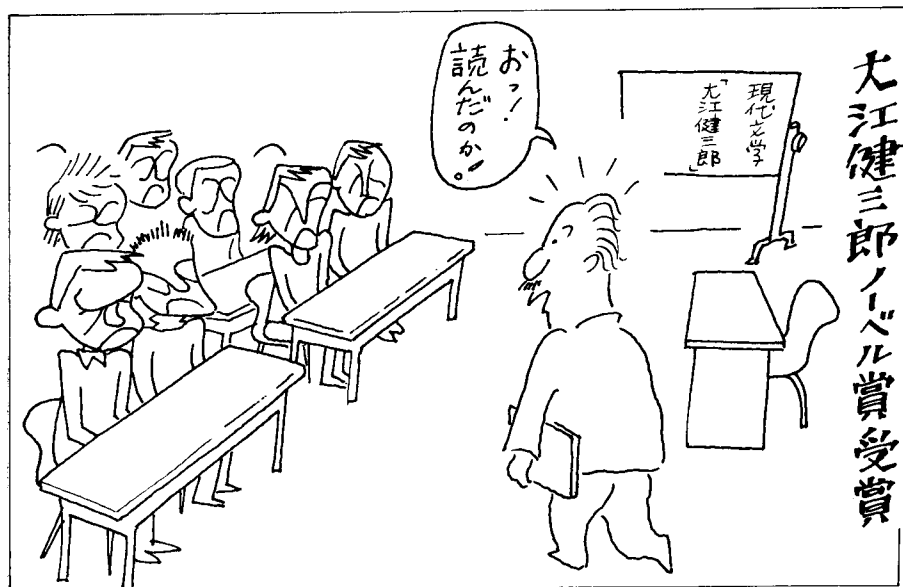
平成  
おったまげーしょん

⑪

大江健三郎  
文化勲章辞退

おおげさだな

西田七三



読・ん・で・み・ま・し・た

親だからできる幼児期のシュタイナー教育

七歳までは夢の中

松井るり子 著

東京都豊島区  
安井  
礼子

タイトルを見て読んでみたくなり、注

文したものの、シュタイナー教育についての本だなんて、送られてくるまで知らなかった。第一、シュタイナー教育というものの自体を知らなかったのだから、しょうもない。だからまず、まえがきの、「この子が七十歳になったときに、楽しく生きていられるような種を、今までの私は、蒔いたでしょうか」

という文を読んで、不覚にも涙が出そうになった。

反抗期にさしかかろうかという三歳と、手のかかる六カ月の二人の男の子を抱えて、髪を振り乱し、声を荒げていた

毎日。特に上の子には、

「どうして、そんなことができないの」

「やっちゃダメって言ったでしょう」

と口うるさくしつけようとしていた時  
だったからだ。この子が生まれた時、た  
だ生きているというだけで嬉しかったこ  
とを、笑ったというだけで幸せだったこ  
とを、すっかり忘れてしまっていた。

この本には、難しいことなど何も書かれていない。ただ、子供を愛する教育者と、それを温かく見つめる母親が書かれているだけだ。でも、読んでいるだけで、心が癒されていくのがわかった。忘れていた幸せを思い出して、子供たちを



ぎゅっ」と抱き締めてやりたくなった。

「私が優しくできた日は、子どもは強くなり、私がヒステリーを起こすと、子どもは泣き虫になって、お互いに意地悪を始める。子どもには、心優しい人になって欲しいから、私ももっと優しくなりたいと願っている」

著者の願いのように、本のカバーも優しい虹色なので（七色の虹の絵という意味ではない）、枕元に置いて、夜、眠りの友にしたい本なのである。

學陽書房 一四〇〇田

## 老年漂流

安住の地を求めて

筆内幸子 著

東京都杉並区 太田差恵子 (33歳)



数年前、地方に住む義父に「家を建てる時には、おかあさん（義母）の部屋を作ってほしい」と言われたことがある。

義父は「おかあさん」と言ったが、それはどちらかが一人になった場合という意味だったろう。とっさのことで驚いたけれど、いいかげんな約束はしたくない。何とかその場の雰囲気壊さず、首を縦に振らないことに成功した。

自分の返答にほっとしていることは事実だけれど、その時の光景を忘れることはできない。

先日、たまたま訪れた図書館で通りかかった書棚にこのタイトルを見つけ、借りてみようという気になった。一気に一晩で読んだ。次から次からの展開に小説

を読んでいるような気分になるが、フィクションは一切入っていないそうだ。

筆者は一人娘が幼いころから、自分の老後はその子に面倒をみてもらおうと決めていた。計画どおり娘は育ち、結婚。二世帯住宅で同じ屋根の下に暮らす。孫もでき安泰な老後がくるはずだった。しかし思いもかけず、娘は不倫をし、家から去る。

それは、娘家族の崩壊だけではなく、何十年もかけて築いた筆者の理想的な老後の計画の崩壊でもあった。筆者夫婦は、途方に暮れ、田舎、有料老人ホーム、都会のマンションと転々と住家をかえる。彼女たちは人の「優しさ」に飢え、少しでも優しくされると、そちらに

傾いていく。しかし、他人の優しさは永遠ではない。結果、また新しい住居を求める。次第に本人たちも人の優しさばかり頼ってはいけなさと気付くが、結局最後も親切なかつての教え子を頼り、またマンションをかわる。

読み終えて、どうか今一人が幸せであってほしい、安住してほしいと心から願う。

願いながら、老いるということは私には想像が及ばないほど孤独で寂しいことなのかもしれないと思ったりする。

文中、有料老人ホームでの生活が細かく描かれているのも興味深い。

海竜社 一五〇〇円

# 老人が使いやすい道具案内

銀ちゃん便利堂 編

川崎市宮前区 刀祢 啓子

銀ちゃん便利堂——それは京都西陣にある老人の生活用品の店である。スタッフは全員女性。書名から、カタログ的な本かと思われそうだが、実際はとてもすてきな読み物だ。

何人かのお年寄りの暮らしが綴られている。店にやって来るお年寄りや、その家族とのやりとりに京言葉が生きている。スタッフは充分時間をかけて話を聞き、その人に最も適したものを勧める。うまく使えているかと何日か後に電話してみたり、様子を見に行ったりする場合もある。

そこには、お年寄りにとって大切なことは、残っている力を使って普通の生活をする、こと、という考え方が貫かれてい

る。たとえば、失禁パンツやパッド。実に多くの種類が紹介されている。ベッドから起き上がるのを助ける移動用バー。安定性のいい室内トイレなどもある。

それらをうまく利用することによって、多くの人がおむつを使わずにすむ。おむつは、動ける人をわざわざ寝たきりにさせてしまう代物なのだ。

入浴には、入浴台や浴槽台を使えば、浴槽のふちをまたがなくても自分でお風呂にはいれる。安全な浴槽の形や、床の面からの埋め込みの深さについても書かれているので、浴室を改造しようと思う人には、ぜひこれを読んでからにすることを勧めたい。

耳の遠い人には、必要な時だけ耳に当



てる助聴器や、機械を通さず肉声を聞こえやすくするプラスチック製のじゃばら「もしもしフォン」が便利。その他、はきやすい靴、握りやすいスプーン、折りたたみ式の杖などなど。価格は一万円台とか三千円ぐらいというように示されている。同種のものもあるし、価格の変更もあり得るからだろう。

特別養護老人ホームの見学記も考えさせられることが多い。最後に付録として、銀ちゃん便利堂のスタッフが上演した劇「おもらしたかて、かまへんやん」の台本が載っている。

晶文社 一六〇〇円

自分でつくろう

## 健康茶

季節に合わせた採取法・利用法

大海 淳著

埼玉県浦和市 後藤 裕子

冷え性、不眠、腰痛、めまい、慢性疲労……。病院に行くほどではないが、健康とは言えない。老若男女を問わず、そんな不快感を訴える人が増えている。

だからこそ健康ブームは今も衰えることを知らない。なかでもドクダミ、アロエなど、手軽で値ごろな健康茶の人氣は高く、現在、十数種類が市販されているそうだ。

だが、これらは薬草のほんの一部で、本書によると日本国内に繁茂するその数は、実に百五十種類以上。薬と違い即効性はないが、効能は高血圧予防からニキビ予防までと多岐にわたる。身近な植物も薬効があり、四季の彩りを飾るサクラ（じんましん予防）、スミレ（便秘予防）、

ライラック（疲労回復）などもその一種とか。

この本はまさに、「薬草の植物図鑑」。写真と図解入りで薬草の生態と効能、採取法（栽培法）と健康茶の作り方、その飲用法と料理法をわかりやすく説明してくれる。一番困難と思われる材料の採集が楽しくできるよう、採取時期と分布範囲が細かく記されているのがうれしい。

健康茶の作り方はいたって簡単。材料を入手し、ゴミを取り除き、水洗いをし、て干しや陰干しで乾燥させるだけ。湿気にさえ気をつければ香りと効能が持続するのでお茶としてはもちろん、ミキサーで粉末にすれば香辛料と同じ要領でケーキやクッキー、ミートローフなどの

肉料理にも利用できるとのこと。粗く刻めば、スープの彩りとしても重宝する。

薬草は漢薬店や市場で購入することもできるが、本書では自分で採取する方法を強く勧めている。

自然の空気を満喫しながら、山や草地で薬草を採集するのはリフレッシュ効果抜群。運動不足の解消にもなるうえ、お金もかからない。何より、自然のとりのたての薬草で作る健康茶のほうが効能効果が高い。この一石何鳥にもなる健康法を逃す手はない。

薬草が持つ力と自然に親しむ大切さを教えてくれる一冊だ。

農山漁村文化協会 一七〇〇円

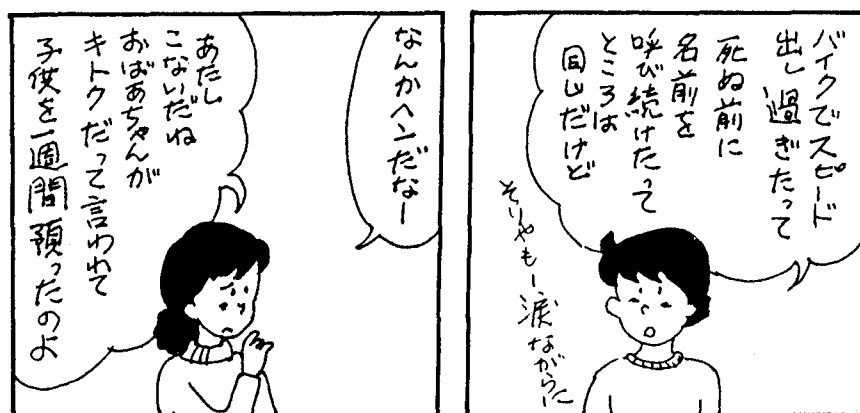


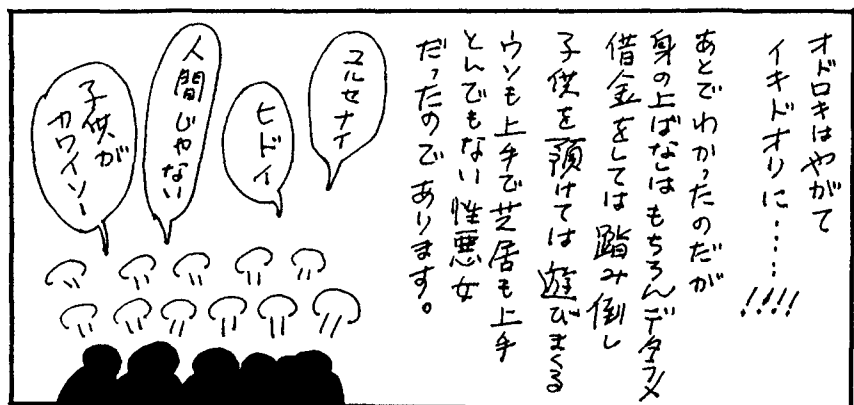
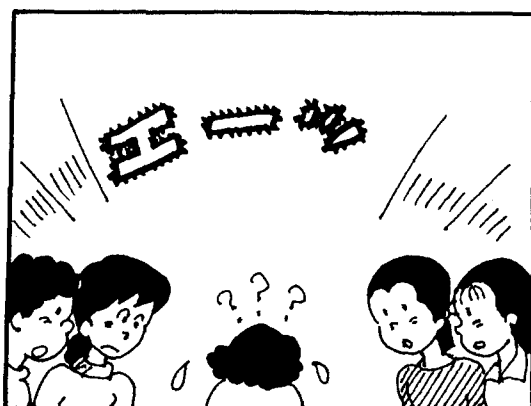
# 痛快! 離人

栗田 みけ

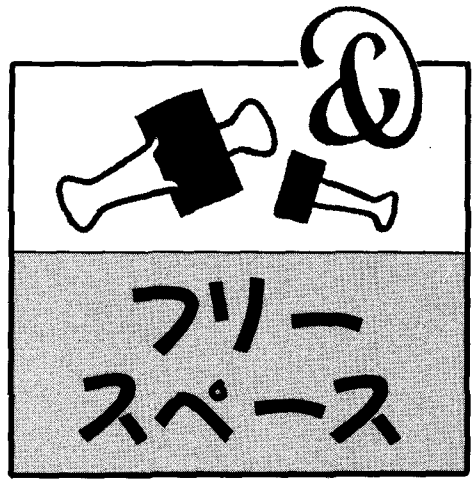
第24号











## お世話する人、 される人

東京都足立区●須賀まり子

人の手を借りなくては日常生活が過こせないとするのは、実に辛いものがある。  
ステロイド剤の副作用による大腿骨頭壊死だいたいこつどうえで松葉杖の生活になって三カ月。身近には隣の実家の母や兄、義姉、姪、また友だちや知り合いの人、と多くの人に私は何か

とお世話になっている。

自分の身の回りや食事の仕度、掃除、洗濯など、家の中の最小限のことは、痛みをこらえながらそろりそろり辛うじてこなせる。出来るのはそこまでで、外に出るのと、重いものを持つことに関してはもうお手上げである。

病院への通院に始まって、買い物全般、ゴミ捨て、布団干し、郵便物の投函から果ては庭の草取りに至るまで、全て人に頼らざるを得なくなった。

十年も患ってきたが、今まで日常生活で特に人の手を煩わすようなことはなかった。体調を見計らってゆっくりではあるが自分なりのペースでやりこなしてきた。

それが一転、松葉杖と格闘しながらの生活。どうしても人の手が必要となってしまう。

人に頼みごとをする場合、まず「悪いな」と気兼ねが先に立つ。当然相手の都合もあるからタイミングも考えなければいけないし、今すぐして欲しくても、「あとでね」と言われれば待つしかない。

私の母などは氣を利かせて食料を買って

きてくれたりする。たとえばそれが食べたいものでなくても、折角買ってきてくれたんだから、「いらない」とは言えない。それに母は年のせいとか、あれが好きだ、というように同じものを買ってくる。何度も続いた日には全く閉口してしまう。

ある時、そのことでとうとう口ゲンカとなってしまった。私は無情にも「同じものばかり食べられないわよ!」と母の買ってきたものを突き返してしまった。心の奥底では「済まない」と思っても、その時はどうしても抑えることが出来なかった。

誰が悪いわけでもないのは分かっている。するべきこと、したいことが出来ない体の不自由さがもどかしく、じれったく、情け無いのだ。その苛立ちが母に向いてしまった。

十七年前、父が床に臥したときのことを思い出す。肝硬変に加えて脳溢血で半身不随、下の世話まで人に委ねなくてはならなかった父である。入院生活はもうこりこりという父の希望で自宅療養することになった。

当時、母と嫁入り前の私とで看護に当

たった。母は髄鞘炎けんしょうえんになってしまい、また、私は仕事を辞めなければならなかった。父のことが心配な反面、看護は重く肩にのしかかっていたのは確かである。

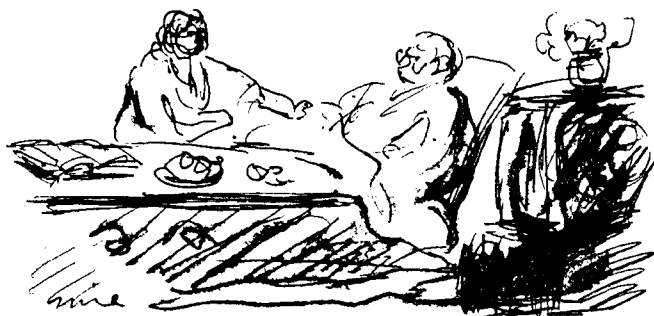
だが、あのころ、どれだけ父の気持ちがい解できていたのだろうか。今になってそんな思いが胸を締め付ける。思うようにならない体への苛立ちと無念さ、排泄さえも自由にならない屈辱。時折、片方の拳を振り上げては顔を歪めジッと天井を睨みつけていた父の横顔が、改めて目に浮かぶ。

お世話する人、される人、それぞれの立場の辛さがある。だが、多く語られるのは、する側の気持ちで、世話にならざるを得ない人の気持ちにはなかなか心が行き届かない。

先日、友だちに「動けないものは動けないんだから、しょうがないでしょ!」と一喝された。何だか今までの胸のモヤモヤがペシャッとなくなった。そうだ。諦めも肝心のだ。出来ないものは出来ない。ならば、気持ちよくお世話になろう! 心配して貰えるなんて幸せなことじゃないか。

今朝も母がいつものように私の様子を見

に来た。「さあ、きょうは天気がいいからどこへ行くかな?」と外出できない娘を



前にしてぬけぬけとのたまう。「何よ、お母さんばかり」と私はちょっとフクレて見せた。きつと帰りに、またいつもの買い物をしてくるに違いない、と思った。

## “小型爆弾”を預かる

和歌山県日高郡●中松ミナ子

娘の夫は、いわゆる一流企業に入社、三年間の東京勤務中は上司の信頼も厚く前途洋々に見えた。ところが彼の実家の父親のたつての希望で八月末をもって退職したのである。

結婚当初から「いずれはオヤジの会社に入ることに成るかも……」と娘には漏らしていたらしいが、その日は意外に早くやってきたようだ。彼はこの転職に一つの条件を出した。二週間程度、アメリカ各地の視察旅行をしたい、今後父親の会社で担当する新しい仕事に関わる勉強のため、というものだった。

一年十カ月の孫は残して行くので私に預

けたいというオチが付いていたのである。

「なに言うてんのよオ、あんな小さい子預かれるワケないよッ」と電話口で怒鳴ったが、「でもオ、あちらのおかあさんも気持ちよく見て下さるって……ね、十日余りお願い」「あかん！ アカンヨ。もしも、その間に病氣や怪我でもしてごらん。私そんなコト絶対いや！」と、こんな会話を東京——和歌山間でくり返していた。数日後、

「あのね、大変！ あちらのご両親も同じところにイタリア旅行が決まったそうよ。悪いけどお母さんにはとお世話に成るから……大丈夫かな」「ちよっと、いい加減にしてよ。私がいつハーちゃん（話の重要人物である孫）を見るって言った？ 承知してないわよ」「だって、もう決まったの。チケットもすでに手配済み。お土産買ってくるから、まあヨロシク」（なんとと言う身勝手な！ 一体私を何だと思っているのだ！）。だいたいこの孫娘は二歳に成ろうとしているにもかかわらずいまだに片言さえ話せない。夏に和歌山の海辺の家に来た時も、自分の意志伝達がままならない分癪癪を破裂させ、怒り狂ってい

た姿が目にはチラつく。

娘は「パパに似て相当な頑固者」という。

ともあれ否応なしに問題の日は迫ってきた。

私は息子夫婦に「いよいよ『小型爆弾』が到着するので何卒絶大なご協力を」と低姿勢で頼んだ。嫁は「朋子（小二の孫）もハーちゃんが来ることに喜んでるしみんなでお守りしよう」と寛大で頼もしい言葉が返ってきた。また子供好きの息子も「ええやん。にぎやかで楽しみや」と言うてくれて私は大いに感激し同時に安堵したのである。

さて、小型爆弾と称した孫も彼女の望みをいち早く察知して、それを叶えれば、この上もなく柔順である。それに母親の姿が見当たらずともいたって平気。夜も私が傍で口から出まかせの子守り唄を歌うと、お気に入りのぬいぐるみの熊のプーさんを抱いてやがてスヤスヤ。しかもひとたび眠れば朝まで天使のような寝顔は目覚めることはなかった。

こうして日はゆっくりと過ぎていった。

ふと気が付けば、二十数年振りに夫と私は孫を間にして夜ごと「川の字」で寝ていたのである。

だが日中は家業のすし店へわきまえのない孫を連れて行くのも憚られて、私は終日自宅で遊んでやった。今夏は記録破りの猛暑続きで、それは九月に入っても衰えず、私は日がかかるのを待って、孫をバギーに乗せて公園へ出かけるのを日課とした。そのつど奇妙な錯覚におちいるのだった。それは娘が二歳未満のころは商売に追われて到底母親業に専念できず、乳母車での散歩や公園で鳩とたわむれるなどのほほえましい情景は夢のまた夢であったのに……。それが三十年近い年月を経て思いがけなく娘ではなく孫を相手に、ごくフツウの母親気分（なぜかおばあちゃんであることを忘れていた）を味わえたのであるから――。

二週間後、娘夫婦は二度目のハネムーンを満喫してきたようにすこぶる上機嫌で帰国した。当然のことながら、その瞬間「小型爆弾」は娘夫婦の手に無事返還を果たすことができたのである。メデタシ。メデタシ。

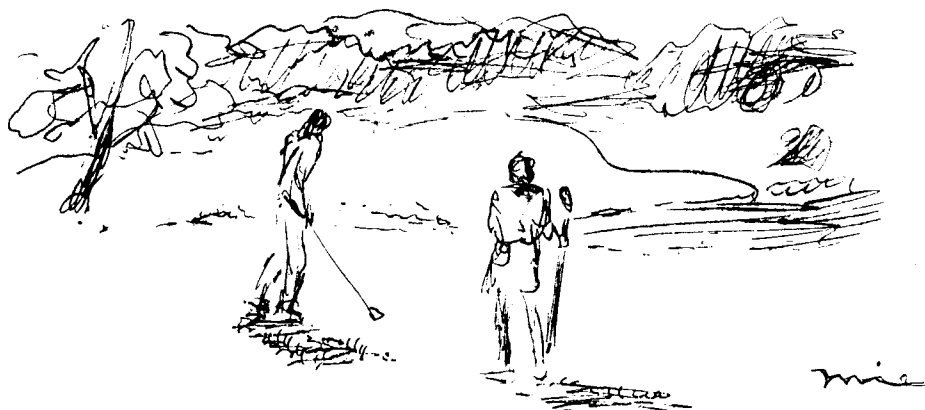
# セックスレス夫婦は やっぱり危ない？

東京都●山梨摩世

結婚して十年近かつた。夫と自分の関係はとても良好だ、と感じているし、周りもみんなそう思っている。世にいうセックスレス夫婦に近いのだけれど、他人がどう言おうとたぶん私も夫も「淡泊」だからそれでいいのだと思っていた。子どもたちの話題以外でも、しっかり二人の会話で盛り上げられる私たちには、なくてもさほど気にならなかった。例えば、今日はセックスをしたいな、なんていう気持ちすら抱かない時期がずっと続いてきた。

そんな私が不倫、浮気、情事、遊び。どの言葉をあてはめたらいいのやら、敢えて言えば、夢物語か、はたまた単なる成り行きか、という関係を持ってしまった。別に突然夫との間がまずくなつたわけでもなく、きっかけはごくありふれている。

家族がしばらくいなくなることがあつ



た。私は夕食を供にしてくれる相手を何人かピックアップし、そのうちの一人として、彼を誘った。

この彼というのは職場に今年の春異動してきた人で、私より年齢若い。前任者と私は恐ろしく相性が悪かったので、彼と替わったときは単純にうれしかった。仕事でつき合ううちに、「若いのが信頼できる」という評価は高まっていた。真面目でさわやかな好青年だ。だからといって、特別な感情を持っていたわけではない。

彼も私もお酒が好きなので、ビジネス客の多いありふれた賑やかな居酒屋に行つた。話題は仕事のこと少しと酒や肴のことなど、これまたありふれた話だった。波長があつて楽しかった。飲んだ勢いもあつて、時間はあつと言う間に過ぎて行つた。

リラックスし、本音が出始めたとき、彼は自分のコンプレックスについて語っていた。他人が聞くとそんなにコンプレックスを抱くようなことじゃなかったけれど、ちょっと重い話だったから、「その話はまた別のときにしようよ」と私が言った。彼は「めつたにこんなことはしゃべらない

よ。今しゃべらないとたぶん二度と聞いてもらうことはないと思う」そう言って続けた。

話を聞いているうち、とても彼が愛しくなった。前から気づいていたのだけれど、彼の目はとてもきれいだった。そしてそのことを口に出した。彼がきてから仕事をするのが前より楽しくなったことや、彼のことを好ましく感じていることを告げていた。別にお世辞を言うわけではなく、自然にそんなことを口ばしっていた。そのうちに、飲みすぎて疲れたから、場所を移して酔いをさますうということになった。どうせ帰宅しても誰もいないし、訳のわからない幸せな気分、その居酒屋を出た。

確かに酔っていたけれど二人とも泥酔していた訳じゃないと思う。私自身は冷静だった。駅に着いてどこに行こうか、と考え、「温泉旅行！」などとふざけながら、「いいよね」という自然な合意の下でホテルに行くことにしていた。

そのとき、動物的な感覚(?)で本当に彼の体が欲しかったのだと、後になって考えればはっきり言える。不思議なほどに夫

がどうこう、ということは全く考えなかった。ただ、避妊にはしっかり気を使っていたが。

ホテルの部屋に入って、ビールを飲みながら、なぜかカラオケまで歌って(今どきのラブホテルにはこんなものであるのか!)と感動した)。そしてもちろん、舞い上がるような心地好さのなかでキスをし、セックスした。騒ぎながら一緒に風呂にも入った。ベッドで眠りにおちるまで、彼の腕に抱かれ、ささやくように話をして時間を過ごした。それはそれは、とても充実した夜だった。

翌朝目をさますと、さすがにちよつと気がひけて、さっさと引き上げてしまった。朝ご飯くらい食べて帰ればよかったと後で思ったが、まあ仕方無い。後日聞いたところでは、彼は自宅に帰るには妙な時間なので、土曜日なのにナント職場に行っ仕事をしたそうだ。

その日以来、職場では以前と同じ接し方をしている(つもりだ)。彼のことは今も素敵だと思っているけれど、あの夜の夢はあれで楽しく終わればいいのだと思う。何

平均寿命の伸びは、  
要介護状態で生きていく  
期間の伸びでもあります。



介護費用保険は  
愛しむ自分の人生への思いやり保険です。

保険料「例」  
70歳女性一時払1,320,530



くわしくは「わいふ」あて  
電話で資料請求して下さい

★指定代理店  
東京海上火災保険株式会社

杉本保険事務所 杉本侑子 ☎03-3260-4771

と言ってもこちらは人妻。私が独身だったら、かえって深刻になってしまっただろうし、彼もあんなに簡単にはホテルに行かなかっただろう。ただ本音をいうと、体はあの感覚を忘れてはいないのか、妙におちつかない気分になる事がある。そこがちょっと問題なのだけれど。

夫には彼と飲みに行った事を話し、彼はお酒が好きで話が合うと思うから、今度我が家に招待しよう、ということになっている。そんな話を平然としてしまう自分が不思議なくらいだ。夫から見れば、これは裏切りに違いないし、夫には決して本当のことを知られたくない。夫のことを嫌いになってしまったことではないのだし、夫と別れ

るなんて考えられない。なんて身勝手なんだろうと思うし、軽蔑される行為なのかもしれない。たかが一夜の物語だと、あっさり言うのも寂しい気がするし、深追いしてボロボロになりたくないからこんな中途半端に成り行きだ、と片付けたがっているだけかも知れない。

かといって後悔もしていない。ただ、私は、本当の自分をまだ知らないのではないかと、少し不安になってしまった。

夫との間がほとんどセックスレスでいられるのは何故なんだろう。セックスはコミュニケーション手段で、よりよく相手を知するためにはやっぱり必要なのか。それよりにより、あの夜のプロセスにはときめ

きを感じた。夫のことはもう知り尽くしているから必要ないということなのか。それとも実は私はセックスレスに不満を持っているのだろうか。本当の意味で恋して焦がれているわけでもない彼と、食事をするだけでは済まずに関係を持ったのは、単なる倦怠期の欲求不満のなせるわざだったのだろうか。そして私には「貞操観」がないのだろうか。

今はわからない。自分が思っている以上にまだまだわかっていないことが多いのだと思う。

実はここまで書いてから、かなり時が過ぎた。あの夜のことは冷静に考えると、やはり一方的に私から仕掛けたことだった。彼にしてみれば、ちょっと危険な気晴らしくらいではないかと思う。私はと言えば、恋愛感情ではないかと思うのだが、今になってふとした瞬間に気持ちが騒ぐ。けれども相変わらず職場では「普通に」彼と接している。もちろん彼も全く「普通」。そしてこれまた相変わらず、夫とはセックスレス状態だ。それが不満か、というとなぜかそうでもない。夫との生活を大事に思いな



がら、彼との事もやっぱり素敵だったと思えてしまう。

どこかが間違っているように思うし、こんなことも人生にはあるということかな、という気もしている。誰にも言えないことだから、誰からも何とも言うてはもらえない。自分でなんとか納得しないとしょうがない。

そしてこうして、わいふに書いてしまった……。

## 洋子さんからの プレゼント

東京都葛飾区●田中恵子

私が誕生日に受け取った手紙である。

「恵子さん お誕生日おめでとう」

私はすっかり忘れて、形となるプレゼントを用意しなかったの、たまには手紙で心をあげたいと思います。

それは今年小学二年生になるあなたの一人娘の久美ちゃんのことです。よく考えて

みると、彼女は、ご両親や祖父母の方たちを除いて、親類の中で血のつながりがあるのは、二十三歳になるお姉さんの息子さんだけになってしまいうです。

これから久美ちゃんが、一步一步成長していく過程や、大人になってからでも必ず困ったことにつづかることがあるかと思えます。そんなとき、両親が元氣かどうかも分からないし、相談できる人はたくさんいたほうがよいと思います。

その時に、私や健司（小六）と隆宏（幼稚園年中）がその一人になればと思います。『もうおじいちゃんたちはいないけれど（考えたくないけれど、やがてそんなときが来ますね）、洋子さんの家に寄ってみよう』なんて、顔を出してくれるだけでもよいと思います。いつかそんな関係になれば嬉しいです。

また、健司のことを見ていて思うことがあります。彼は五歳のころから私の姉の家に泊まりに行っています。いつも大好きな従兄弟のところに大喜びで出かけていきませんが、帰ってくると、『やっぱり家はいいな！』と言いながら安心したように眠りま



す。子供にとって自分の家は一番なんです  
ね。

考えてみると、気心の知れた姉の家でも、生活習慣や教育方針、食事の味付けなど色々違うところがあるので、泊まってみて子供なりに神経を使っているのでしょう。これは泊まらなくては経験できないことでしょう。

だから久美ちゃんにも、そんな経験をたくさんしてもらいたいと思います。彼女は、普段は小食なのに、隆宏と競争するかのよう、今回もたくさん食べました。お好み焼き二枚、ハンバーグ半分、プロッコリ、漬け物、けんちん汁、ご飯……と全部食べました。

そんなわけで、彼女を自然の形でわが家に迎えたいと思います。悪いことをすれば注意をします。食事も特別に彼女に合わせるということはしません。お手伝いもしてもらいます。そんななかで、彼女がいやがらなければ、いつでも、何年でも、『泊まりに行くから』のひとことで来て欲しいと思います。

そして、いつか遠くの親類の人よりもわ

が家族が、彼女にとって何らかの栄養になってくれたらと思っています。何もしてあげられませんが、わが家独特の空気にふれさせて下さい。

私たちのおつきあひも十歳のときに出会ってから二十七年たちました。これは、主人とよりも長いんですね。東京と茨城では、車で三十分で会える距離ではないので残念ですが、姉妹と同じように、お互いに何でも話せて力になれるよう願っています」



私は、娘のためにも第二子が欲しいと思っていたが、ある友人に「二人っ子だって、これからいいお友達に恵まれて、姉妹以上の関係になるかもしれないじゃない」と励まされたことを思い出した。

## ギャップに アップ、アップ

東京都足立区●福田幸子

私は区主催の「女性大学」で一年間、女性学の講義を受けた。

女性差別は世の中、家の中たくさんたくさんあると聴かされた。水着のポスターしかり、職場のお茶くみしかり、わんさどある。

性別役割分業ということばも聴いた。

「女だから家事、育児をするべき」、「男だから外に出て仕事をするべき」というように性（女、男）によって役割を分けることだそう。——差別だ——

女だからって家事が得意ということもな



いだろうし、男だって仕事に向かない人も  
いるだろう。

私はもともと女だから、男だからという  
意識をもっていないと思っていた。

しかし長男が生まれた時、学資保険を積  
み立てることになった。その際男だからぜ  
ったい大学に行くであろうからと三百万円  
の契約をした。長女、次女の時は、高校受  
験の際に満期になる百万円だけのを契約し

ていた。その先のことはまるで考えていな  
かった。

次女がズボンを着てはいるが、股を大  
きく広げふんぞりかえって足を組んでいる  
のを見ると「そんな座り方しないで！」と  
注意している。洗濯物も取り込んだまま山  
になっていると娘には「どうして畳んでお  
かないの」というが、中一の息子には言わ  
ない。あー差別だ！

私の頭の中では「男も女もない。やれる  
人が家事をする」と分かっているけど、長  
年の癖がすぐ出る。

「夫との関係も対等でなくちゃおかしい。  
稼ぎが多いから偉いのもないし、男だか  
ら家事をしなくてもいいということはない  
」

そうだ、そうだその通り！ 講義を聴き  
ながら大いに喜び、にこにこして心の中で  
大拍手をしていた私がいるのに。

なのになのに「幸雄さん、今日、私疲れ  
たから食事の後かたづけしてよ」「幸雄さ  
ん、仕事に行ってくるから洗濯しておい  
て」言えません。

私は日曜、祭日のみ仕事に出かける。夫  
は地域の少年野球のコーチをしているが、  
たいいてい昼過ぎからなので午前中はゴロゴ  
ロしていることが多い。だから頼んでいい  
と思うけど、やはり言えない。言ってみた  
いのに言えない。

「自己表現トレーニング」という講座で  
は、自分の思いをきちんと相手に伝えるこ  
とを教えられたのに。あーイライラする。  
このギャップ、どう受け止めよう。

何が言えなくしているのだろうか。

ウィークデーは自分の好きなサークル活動をし、仲間たちと食事、映画、旅行と、好き勝手しているからか。

何の役にもたない(他人に言わせる)と)学習会に、昼夜問わず子供を放って出かけていくからか。

私が嫁ぐお金以上に自分のためにお金を使うからか。

私の意識下に家を支える経済力のある人には家事は頼めなと思っていいのか。

ずい分挙げてみたが、どれも当たっているようで当たっていないような。

夫はそれでもフツンの上げ下ろしはやるようになった。自分の身の回りの仕度もできるようになった。買物も一緒に行ってくれる。私のサークル活動や、学習会などの送り迎えもしてくれる。

なのになんなのだこの私のこだわりは？

息子が部活で汚したユニホームを夜、洗濯しているとなぜか後ろめたさを感じてしまふ(私が洗ってあげるとは言わないが)。娘だったら当たり前と思うだろうに。

自分が食べ終った食器を洗うことは当然と思っているので息子にもさせる。夫はしない。

夫の前で息子に「これからは男も料理、洗濯、掃除など生活自立しないといけない」と私は講義する。

なのになのにこのギャップ！自分の矛盾を知りつつギャップにアップアップしている。

## 父の危篤

京都市伏見区●飯塚真里(30歳)

病院から帰ると疲労とむなしさでいっぱいになる。

父が危篤になって一カ月たつ。もちなおしたかと思えば、また発熱する。その度に病院側から夜の付き添いを頼まれる。夜間、二時間おきに看護婦さんが検温と血圧を計り、たんを吸引する。意識はないのにたんの吸引の時はとても苦しそうだ。側でただ見ているだけで、何もできない無力を

思い知る。

そのとき五十五歳だった父は平成元年三月、脳出血で倒れた。大手術が行なわれ、奇跡的に回復し、半年後には退院した。後遺症として左半身が不自由であるが、歩行もできてしゃべることもできた。だが、人格は以前の積極的な父ではなく、何もかも諦めた様子で、リハビリを進んでしようとしなない。一日の大半をベットの上で過ごすようになった。

せつかく動くようになった手や足も、何もしていないですぐにかたまってしまふ。

「散歩いかなあかんで」と口がすっぱくなるほど言ったが父はやる気なし、食に対する欲求だけはあり、どんどん太っていった。そんな父を私は大嫌いだった。昔の大好きな父はもうこの世には存在しないのだ、とひそかに思っていた。

父は一歳にならない長女を連れていくと一番、喜んでいた。が、興味は長続きせず、またベットに横たわるのだった。長女が三歳になり、長男を出産してから忙しきにかまけて、めったに父を訪問しなく

なった。

平成四年十月、父は再発した。今度切れたところは手術ができず、薬に頼るしかなかった。危ないやまは越したが、意識は戻らなかった。若い男性の医者は「もう、あのままずっと、植物状態のようなままで、口から食べられません」と断言した。

その医者が四月に異動になってすぐ、父は意識を少し取り戻した。面会にいくと聞き取りにくい、かすかに「ま・り」と名前を言う。しゃべることはできないが、簡単なことは理解できるらしく、首を振ったりして応答した。やがて、口からヨーグルトを少量だけ食べられるようになり、半年ぶりにお風呂も入れるようになった。一進一退を繰り返しながらも回復してきたころ、病院側から転院の話が持ち上がった。

まだ暑い九月。「ついにきたか」。母と次の病院捜しを始めようとした時、父は急変した。突然、高熱をだし、一度、呼吸が止まった。口には酸素マスク、数々の点滴の管、みるみるまに父の姿は変わっていった。一週間で容体は安定したが、意識は戻



らない。

悪化してから一カ月後、父はまた、高熱がでた。今回は息が苦しそうで、無理矢理、息をさせられているようだ。

医者から「人工呼吸器をいれるか」の問いに母は迷うことなく、「必要なし」と答えたが、その後も何回か打診があった。母も私も妹たちも漠然とそこまでして延命しなくていいと考えていた。

そもそも延命措置とはどういうものなのかはつきりわからない。人工呼吸器をつけることをいうのか。ここの医者や看護婦にそんなことを聞ける雰囲気はない。「尊厳死」に関する本によると生命維持措置の具

体例は酸素吸入、輸血、経管栄養と書かれていた。医者は「いつ死ぬかも分からない状態」「手はつくした」と言っていた。

父が危篤状態になって死を身近に感じ、いくつか思うところがある。

まず、延命は無意味だと思ふ反面、意識がなくても自力で呼吸ができているのなら生きてほしい、と切実に思った。私の父はすでにいないと思っても、いざ「危ない」と聞くとつらなえた。

そして、自宅で寝てばかりの父でも今の状態よりずっと人間的だったと思った。怒ってばかりではなく、やさしい言葉をかけてあげればよかった。会いたがっていた長女をひんぱんに連れて行ってあげればよかった。次から次と後悔ばかり思い浮かぶ。

死んでから天国と地獄があるように、死ぬまえにも分かれ道があることに気づく。苦しまずすぐにあの世に行ける人もあれば、ただ生かされ、しんどい思いをしてから行く人もある。父を見ていて私はあのような最後は送りたいと思う。

また、人の一生は、それまでの人生の歩

みの積み重ねよりも、死に方によって善し悪しが決まるのではないかとも思う。

父と話がしたい。今の体から魂だけ抜け出して私の枕元に来てくれないだろうか。勝手な娘の思いと知りつつもそう願わずに  
いられない。

## 円満別居

大阪市平野区●西尾ありか

「実はさ……円満別居が決まったの」

友達との電話で、私はそう言った。

「円満別居!?!」

そう、夫の両親達と同じ敷地内に住んでいる私達夫婦は、今の住まいから車で十分ほどの所にマンションを買って自分達だけの住まいを構えることにした。

現在、私達は義父が建てた別棟の一戸建に二人で住んでいる。隣の母家には夫の祖母に伯母、そして両親が暮らしており、私達は食事もお風呂もトイレも別で、同居していると大きな顔はできないほど好き勝手

をしている。ただし、隣の物音や気配というのはよくわかるもので、お風呂の時間や寝る時間まで姑はよく知っていた。

「もっと早くお風呂に入ればいいのに……」

「昨夜は帰って来んの遅かったん?」

と、嫁である私の行動にいちいちチェックを入れていた時期があった。

それでも私はめげずに、こんなこと全部気にしてたら私の人生終わっちゃうぞと、「見たいテレビがあったから……」

とか、わざとへらへら笑ってごまかしてきた。姑もそうそう口うるさく言うつもりもないらしく、そのうち私達の生活にはとやかく口出しすることもなくなった。

でも、どうしても気配が気になるのである。いつ裏の扉を開けて入ってくるかわからない気配だけが、五年たった今でも気になって仕方ない。無意識のうちに耳を澄まして、相手の行動を察したりしていることがよくある。

姑や世間から好き勝手してと思われてい  
るわりには私の心は自由ではなく、いつも  
気配を気にして割の合わない損した気持ち

でいっぱいだった。子供ができないのは同居のせいではないだろうが、環境を変えてみることは、ひとつの転機になるとも思った。

低金利で物件が増えてきた昨今、周囲の友達の影響もかなりあったと思うが、時代的にも将来的にも、今は買いたいと思ひ、何カ月にもわたり、夫を説得した。最初はケンカもしたが、夫もだんだんその気になり、そしてとうとうこれはと思う物件をみつけたのである。五年間で頭金ぐらいの貯金はできていたし、あとは夫の両親を説得



しなくてはならないのだが、これが案外とあっさり、理解を示してくれたのだった。

五年間同居して自分達も気を遣ったのか、孫ができないんなら楽しみもないと思ったのか、突然のことで驚いてはいたが、反対はされなかった。ほとんど事後報告に近い形だったので、反対のしようもなかったのだろうが、私達の最後の切り札、「環境が変わったら、子供もできるかもしれないし……」

という言葉にはかなわなかったのかもしれない。他の家族も皆、賛成してくれて、とんとん拍子に円満別居が決定した。

気がつけば、ここにテレビを置いて、あそこにソファを置いて……と、ひとりにんまり考えている。もう食事中に誰かがいきなり入ってくることもないし、対面キッチンだから一人背中を向けて後片付けという淋しい思いもせずにすむ。「お茶」と言われても階下まで降りていくこともないので、ぶつぶつ文句を云わなくてもすみそうだ。たぶん……。

ま、ローンは払っていかなきゃなんないし、集合住宅だから思わぬ落とし穴がある

かもしれないので、いいことばかりでもないだろうけど、今は「遠足の前の日」状態であれしくて眠れない毎日だ。

## リサイクルはやめられない

東京都練馬区●歌川敦子

十月二十三日(日)リサイクルに行ってきた。場所は駒沢公園。言い出せば六年生の長女だ。

彼女はいつも近くの公園のリサイクルで小さくなった自分の服やおもちゃを売っていて、リサイクルの楽しみ方は十分分かっている。あいにく十月はそこの開催はない。

せがまれて買ったリサイクルの雑誌「ガレッジセール」(主婦の友社)に各地のリサイクルのスケジュールが載っていた。見るとこの日にあるのは、都内では駒沢公園。

私としては、ブランド品が格安で出ていくという代々木公園の日にしたかったが。

## 各地で文章講座を

東京とその周辺で、これまでしばしば「わいふ」文章講座が開かれました。編集長田中、副編集長和田が講師で、公民館などの主催です。

東京以外の各地でも、おそらく要望があるのではないかと思いますので、読者がお住まいの地域の公民館などに申し入れてくださるよう、お願いいたします。

一回の講義ですが、どうすれば素人の文章の持つ力を引き出せるかを中心に、初心者のためにわかりやすい添削の実例も取り上げて指導いたします。

くわしくはハガキまたは電話で編集部にお問い合わせください。要旨を書いたものをお送りしますので、それを見せてお申し入れたくださいと思います。

それに駒沢公園は我が家からは遠い。地下鉄を乗り継いで、片道一時間半以上もかかる。

四年生の次女は疲れそうだと素早く察知して、イチ抜けた。しかし長女はどうしても今日行きたいと言う。毎日仕事でいない私は、たまにしかできない娘孝行につきあうことにした。

長女と二人きりの外出はめったにない。電車の中では学校の話、いつも青春しているオヤジ(長女の先生)のこと、仲良しの友達や男の子のことなど、彼女は話し続けていた。

駒沢大学駅から十分くらい歩くと公園の東入口に着く。競技場の周りを半周して、中で行なわれている大学対抗アメリカン

フットボールの試合の歓声を聞きながら前方を見れば、そこがリサイクルの会場だった。

駒沢通りに面した階段広場には、二層分ほどのスペースの店が二百軒くらいあり、古着や雑貨が所狭しと並べられている。

この日の目的は、このところぐんと背が伸びた長女の普段着。私のお下がりも底をついてきたし、サイズ一六〇の子ども服は高いし可愛くない。ちょっとおしゃやれな若い子が出してる店には、長女向きのがあるはずだ。

リサイクルではないものは買わないのが鉄則。安い安いと買っていたら切りがない。と自分に言い聞かせて、わくわくしてる気持ちを押さえつつ左右の店を万遍

なく見て歩く。

最初に目についたのは、古着と一緒に好みの本を並べた店。さっそくしゃがみこんで一冊ずつチェックする。「アルジャーノンに花束を」は絶対に買い。沢地さんの欲しいけど借りて読んだから我慢。シドニー・シェルダンは一度読んでおこうと思っていたので買い。などと都合五冊、新品同様の単行本を交渉の結果、計千四百円に。この日一番の掘出物だった。

その外すべての店を一通り見て、長女にスタンドカラーの縞のTシャツとキュロット。どちらも百円。次女のおみやげにプロアメフトチームの新品キャップが二つ五百円。私にサーモンピンクのセーター三百五十円。夫にランセルのセカンドバッグが五

## 自然食通信62

隔月刊／定価五七〇円  
〒二四〇円

### 特集 軽がる食べ物・台所始末術

もうこれ以上石油を喰うクルマ、電気製品、森林を減ぼしそこに生きる人たちの暮し奪う木材に頼る暮しなんてゴメンノ。って言うてしまえば見えてくるのはシンブルな生き方。買わない、捨てない、使い切って行末見届ける。その気になればいくらでもあるワザの数々をご覧ください。

## いちじくやい

新鮮安全旨いもの屋全国版 定価二〇六〇円

旬の素材を生かしたメニューが自慢のレストランや喫茶店、お宿に飲み屋、安心して食べられてしかも美味しい野菜や加工品、充実の店。バラエティー豊かに全国三〇〇軒。地図・索引付。お待たせしました。

## アテルイ

愚安亭遊佐 著  
十又重勝彦 著  
国策に翻弄される北の地の漁民たちの哀感を独り身で演じ続けた役者の思いは、まつろわぬ民のみなもとへと。輝やける縄紋の彼方より甦る狩猟の民たち。今、文明と我らが行く手を、照らし出す。 定価一八五四円

## 自然食通信社

東京都文京区本郷2-20-8 ☎03-3816-3857 振替・東京5-78026

百円。それと娘たちお目当てのコミックが七冊で二百二十円。かなり負けてもらったが、本日の戦利品は占めて三千百七十円也。もし新品を買ったら合計で五万円以上。十分の一以下で買えたわけだ。これだからリサイクルはやめられない。

お昼も食わずに三時間歩き通し。でも私も娘も満足だった。戦利品を両手に下げて帰り道も元氣いっぱい。駅前に戻って遅い昼食を取りながら、お互いの成果を讃えた。

## 外国旅行は 脱皮の過程

東京都足立区●鈴木和美（45歳）

飛行機に乗り遅れそうになって、必死に飛行場の中を走っている。夢から覚めると、汗を一杯かいていた。どうしてこんな夢を見るのか。小さいときから漠然と、外国へ行きたかった。今いる環境から抜け出したかった。

高校時代に姉妹都市交換留学生で、カナ

ダへ行ったことがある。外国の人とうまく意志疎通ができなくて、失望して帰国して以来、外国へ行きたいと思わなくなった。外国に行ったら何でもいいことはない。自分自身が変わらなければ何も起こらない。外国へ行くのは止めようとする時思った。

あれから十八年も経っている。結婚して十二年、子育て八年目にして、どうしても夢を見るのだろう。抑圧されていたわたしの夢がムクムクと沸き上がってくるのを感じた。

その夢がきっかけで、八歳と五歳の息子たちと二歳の娘を置いて、十七年振りに外国旅行に出掛けることにした。夫が三人の子供のめんどうをみると言ってくれた。三十五歳だった。一週間のパリ・グループ・ツアーに参加した。「あなたのフランス語はとてもきれい」と太ったおじさんに言われて、パステルを買ったのは、モンマルトルの丘にある小さな画材屋だった。宿泊先だけが決まっていて、後は自由だった。

一人でレストランに入って、じろじろ見られて居心地悪いなと思ったり、スーパードどつきり食べ物を買って、ホテルで食事

をしたり、地図を片手に地下鉄に乗ったり、うろろ歩いたり、ノートルダム寺院で一日ぼーっとしたり、あちこちの小さい美術館を廻ったりしたのが楽しかった。自由の時間は、この上もなく幸せな時間。自分が自分らしく居られる居心地のいい時間。

それまで居た社会から離れて、付き合い、家事、育児、わたしをがんじがらめにするすべてのものから解放され、自由になるひとときだった。妻、母親の役割から解放されて、わたし自身になれる。外国旅行の夢に、さらに火がついた。

二年後、英語の勉強という名目で、UCバークレー・インテンシヴ・コースの短期留学を計画した。学校の入学申し込みは、留学先紹介の会社に頼んだが、飛行機の手ケットの申し込みや滞在先のホテルの申し込みは自分でやった。「地球の歩き方」やそのほかのパンフレットを参考にしながら、どこを宿泊先にするかを考えるのはとても楽しかった。

夏休みの四十日間をサンフランシスコ市内の「モンロー」というホテルに滞在しな

がら、大学に通った。英語の勉強はとにかく、ホテル「モンロー」での生活はおもしろかった。

アメリカ各地から仕事を求めてやって来た人たち、仕事で宿泊しているほかの国からやって来た外国人、観光旅行者、親元を離れて住んでいる若者たち、定年退職して住んでいる老人たち、日本から仕事を求めてやって来た若者たち、いろいろな人々と食事を共にした。

フロントの仕事やレストランの給仕や、コックの仕事を住人がアルバイトでやっていた。支配人と副支配人だけが、純粋な従業員。ホテルの住人はみんな知り合いで、友達のような、家族のような付き合いをしている。

フロントで働いていたアメリカ人女性と仲良しになった。彼女のお父さんは港に横付けになっている小さな船にひとり住んでいて、カウンセラーの仕事をしているらしい。いつもひとりポツンと食事を取っている黒人の女性とも友達になった。二人の子供さんを田舎のお母さんに預けて、今仕事を探していると話していた。一緒にバス

で岬まで行こうと誘ったが、お金が無いから行かないと、歩いている途中で引返して行行った。

アルコール中毒の人の治療を仕事にしていたという女の子は、いつもアスピリンを飲んで、二度とああいいう仕事はやりたくない頭を抱えていた。一緒に中国風レストランのうどんを食べに行ったら、こんなにおいしいものを食べたことがないと喜んでくれた。お別れの最後の夜、仲のいい友達のホテルの一室に集まって、いろんな話をして盛り上がった。気の合った仲間と一緒にいるというのは居心地がいい。「モンロー」に居るときだけだったけれど、お互いに支え合いながら、そこで生活した。確かに彼らと共に居ることを楽しんだ。

それまで、日本で友達を作ることができなかったわたしが、ひとりでアメリカへ行って何人かの友達を作ることができたというのは、驚くべきことだった。

アメリカ行きがきっかけで、日本に帰ってから、何人か友達を作ることができるようになった。M子もそのころで来た友達の一入だ。フランス旅行から二年後、M子

に誘われて、今度はニュージーランドへ十日間の旅に出た。

クイーンズタウンの町で、たまたま不動産屋の看板を見ていたら、中から気のよさそうなおじさんが出て来た。見ていただけだと言うと、「家を見せてあげる」と誘われた。クリスマス・イブなのに、このおじさんはなんて働き者なんだろう。若い女性二人が家を買うつもりなんかないこと分かっているのに。「空港まで息子を迎えに行行って帰ってくるのが、四時ごろだから、そのころ店に来たら、家や土地を見せてあげる」と言った。「どうしよう、そのまま知らんふりをしてもいいんだけど、何かあのおじさんにもう一度会いたいような気がするね、クイーンズタウン・ヒルをハイキングしてから、また来ようか」ということになった。

最初、中古の一軒家をいくつか見せてくれた。あまりきれいじゃない。次に、花がきれいに植わった、美しい奥さんが子供をあやしている家を見せてくれたが、狭いし、見晴らしもよくない。お金も無いしと、言いたい放題だった。買う気もないの



に、次から次とよく文句を言ったものだ。「それじゃあ、『ここはいい』という所へ連れていってあげる」と言っ、クイーンズタウン・ヒルの分譲地のでっぺんに連れて行ってくれた。

わたしはすっかりその土地が気に入ってしまった。二百七十度の見晴らしで、ワカティプ湖が見渡せる。値段も手ごろだった。一度ほしいと思ったら、何としても手に入れたくなってしまう。今回は英語の達者な友達同伴だったので、あれこれと手続きのことを細かく聞いてもらい、外国人で

も土地が買えること、前金をおかなくても弁護士を通して手続きすれば、契約可能ということを知った。

それじゃ、すぐに弁護士のところに行かなくっちゃあということになった。「今日はクリスマス・イブだから、早く事務所が閉まる」。みんな駆け足で、車に乗り込み、空いている事務所を探す。わたしは翌日、早くこの町を出ることになっていたので、今日中に何とかしないと、すべて泡と消えてしまう。

一軒目は閉まっていた。不動産屋のボブさんは「大丈夫、事務所はまだあるから、心配要らない」とにっこり。二軒目の事務所のドアが開いていた。しかし、受付にはだれもいない。奥のほうで、にぎやかな人の声がする。パーティをやっているのだ。呼び鈴を何回も押して、中の人が気が付くのを待った。やっと人が出て来た。不動産屋のボブさんは受付嬢に説明すると、すぐにハンサムな弁護士が出て来て、小さい部屋に案内してくれた。仮の契約書にサインした。つれあいに相談してから返事をするので、買うと決まっていらないということを

何度も弁護士に念を押した。

その夜、家に電話をし、「きみがよいところと言っなら、買ってほしいよ」という夫の返事。翌日、「OK」の返事をした。日本に帰ってから、送金の手続きをし、三百坪ほどの土地を手に入れることになった。いつか、家を建て、この町に住んでみたいという夢が膨らんだ。日本とニュージーランドが陸続きになったような、外国に田舎ができたような感覚になった。

それから二年後、わたしは四十一歳だった。三人の子供のうちの下の子二人を連れて、あのクイーンズタウンの町を訪れることになる。そして、一年間をニュージーランドで過ごす。子供は小学校へ通い、わたしは日本語を子供達に教える。家から外に出て、自分が試される時が来た。いろんな、新しい体験をすることによって、自分に自信をもつことができるようになってきた。三年前のことだった。

わたしにとって外国旅行は、青虫が成虫になるまでの脱皮の如く、一人前の人間になるための脱皮の過程だったのだ。

(エ・佐藤瑞江子)

父母と子の立場から教育・学校を考える

母と子 十二月号 五〇〇円・千五百円

今月の視点 (見本誌(旧号)進呈)

「おとな」になるって?

母と子 十月臨時増刊 一〇三〇円・千五百円

## 学習のつまずきを乗り越える

〈小学校篇〉

一年生から六年生までの各学年で、子どもたちがつまずきやすい学習のポイントをとりあげて、それをどう乗り越え、学ばしさをつかませるかに焦点を当てました。

●漢字の面白さをつかませる ●位どりの意味をどう分からせるか ●表現することの弱い子に ― 一年

●話す、書くことを好きにさせるには ●漢字のヴィジョンをふくらませる ●九九狂想曲 ― 二年

●「小数って何?」と意味がつかめない ●包含除の割り算の理解 ●実験、調査の得意な子に ― 三年

●分数がどうしても分からぬ ●単位、換算の意味がつかめない ●地図と地域が一致して認識できない ― 四年

●体積の概念が理解できない ●物が水にとける(溶解)とは ●興味をもって産業学習にとりくめない ― 五年

●文章からイメージを豊かにえがきだせない ●作文を嫌う子 ●比例、反比例が分からない ― 六年

お申し込みは書店か母と子社へ

〒203 東久留米市中央町五十四-八

〒042-0417 四十九-一二五

母と子社

女たちの情報紙

ふえみん  
f e m i n

婦 人 民 主 新 聞

WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

ご希望があれば見本紙を送ります。

〔申し込み先〕 婦人民主クラブ 週刊1ヵ月 750円(送料込)。

東京都渋谷区神宮前3-31-18 電話03(3402)3244, 3238

大阪市北区中崎西3-1-5 電話06(371)2429

アジア・おんな・はたらく・がっこう  
アジア・たべもの・せつけん・げんぱう



青木やよひ 著

一九八〇年からごく最近まで著者が書きかつ語ったフェミニズムについてのエッセイ集。フェミニズムは過去のものになりつつある、という声が高いが、それどころか、今後の社会で、フェミニズムがどれほど深い、指導的な文化的価値を持ちうるのかということを痛感させられる。

ボーヴォワール以来、欧米の

フェミニズムの主流は、いわば女が男と対等になることをめざしてきた。女は男より劣るものでなく、同じ能力を持ち、その「女性性」は後天的に作られたものだ、というところに重点がおかれていた。

しかしこの場合、女たちがめざしていた人間像の規範は、男のものがたつた。青木さんの主張は、こうした「近代主義」に

真っ向から対立する。

家族論、人口論、生殖問題と著者の論じる問題はさまざまあるが、そうしたすべてのなかで、競争と近代化ではなく、自然との共存をめざす新しい価値観を「フェミニズム」と呼ぶ著者の視点が、脈々と伝わってくる。「共生時代」の言葉には、その思いが込められている。

オリジン出版センター 三三〇円(書)



早川裕子 著

教育もののルポでは本誌にもおなじみの早川さんが、ハイスクールレポートを編集した体験をベースに、このほどこんな本を世に出した。

高校を受けるとき、誰しも自分やわが子に合った高校を選びたいと思っても、その見きわめ方がわからない。つい偏差値や漠とした世間の風評で決めてしまい、入学してから驚いたり悩んだりしている人は私のまわり

にも多いようだ。

この本は、高校受験を前に迷い悩む親子に、良質の情報をふんだんに与え、高校教育のありかたまで考えさせてくれる。最近出ている、内申書をよくするためのハウツーものなどは、わけがちがうのだ。

五十校に及ぶ高校を取材し、実名をあげながら、共学か、別学か、大規模校か、小規模校か、大学付属高は？ 宗教教育

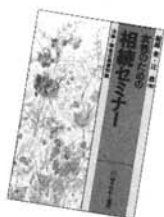
は？ など、高校選びのポイントがわかってうれしい。また、授業や生活指導やクラブ活動のありかたも、見てきたままに紹介されて、こんな高校もあるのかと、読みものとしても面白い。

取り上げているのは首都圏の高校ばかりだが、地方の人たちにも参考になるし、東京近辺の情報を知るのに役立ちそう。

教育史料出版会 一六五〇円(山)

女性のための相続セミナー

法律・税金の基礎知識



堀越 董・辻 敢 著

相続について法律編・税金編にわけたQ&A方式の解説書。「女性のための」と銘うってあるとおり、相続が発生したときおこる問題を、女性を主役にする具体的なケースにしてとりあげ、分かりやすく解説しています。「相続とはなにか?」「内縁の妻の居住権」「遺言の予備知識」「相続税がかかる財産とからない財産」「贈与税とはどんな

税金」など基本的な知識から、「遺産分割後の遺言書の発見」「貸地・貸家の評価」などむずかしい問題まで図解を交えてていねいに説明してあります。昔、相続税はお金持ちのごく限られた人にだけかかっていましたが、地価高騰の影響を受けて、最近では普通の人たちにも相続税問題が避けて通れないものになってきました。

男性にくらべ平均寿命の長い女性は子供と共にその問題を処理しなければならなくなる場合が多いはず。基本的な法律・税金の知識を持っていることは、どれほど力になることでしょう。

この本は、入門書としても、問題が発生したときも個別のケースを調べる事ができます。

有斐閣選書 一六四八円(水)

ニュースになったネコ



マーティン・ルイス=著 武者主子=訳

著者はイギリス人でBBCのニュースキャスターだという。イギリスは動物愛護の徹底した国で、ペット好きな人が多い。幽霊になっても愛犬を連れて出てくる、というくらいだが、この本を読むとネコマニアもずいぶんいるらしい。

著者も幼時からネコと暮らしていた。ネコ好きが高じて新聞やテレビのニュースに取り上げられたネコの話を生年収集し

て、面白く紹介したのが本書。イギリスでは今だに、官庁や会社、倉庫などでネズミ捕りのためのネコが飼われており、首の回りの白いネコがホワイトカラーの労働組合に入れてもらったとか、軍艦にいるネコが死んだとき、厳かな軍葬が行なわれたとか、人間なみに扱われるネコがいるのだ。ダウニング街十番地の首相官邸にもいるが、歴代の首相は再選で落ちたら困る

から、決してネコを追ひ出さないそうだ。

ティカップを前足で持ち上げてミルクを飲むネコ。いつもエレベーターが来るのを待って、上がった下りたりするネコ。人間のトイレを使うネコ。

わが日本からは、大きなワシを捕ろうと飛びかかるネコが出場している。ネコ好き人間ならナめるように読む楽しい本。

筑摩書房 一七〇〇円(和)



鈴木 剛 著

本書は「女の時代」以降、主婦たちに起きているさまざまな変化に疑問を持った著者が、なぜそうなったのか解明すべく書いた本である。著者は妻も子もある三十代の男性ライター。

まず初っ端に登場するのは、テレクラに電話して不倫したり、アダルトビデオに出演してあっけらかんとしているごくフツの主婦たち。著者は主婦の

ご乱行と称して、専業主婦の枠からはみ出ていると思う女性たちを次々と紹介する。

続いては離婚問題。増加する離婚の原因をあらゆる角度から探っていく。そして各種統計を駆使して、結婚、夫婦について考える。わが国の夫婦の歴史にまで言及して検証する。

そのうえで女性が変わりつつある、だから夫婦関係も変化し



羽生 慎子 著

自分の作っている野菜や花のこと、虫のこと、天気のこと、木や鳥のこと、身近な題材をうたって、大きなやさしい自然とそれに包まれて生きている人のいのちを感じさせてくれる詩、それが羽生さんの作品である。

ほんものの詩人として、知る人ぞ知る羽生さんは、すでに二十冊以上の詩集をものしているが、とりわけ子どもが生き生き

と、いつくしみをもって描かれているこの一冊は、読む人の心にしみとおる。

孫のまりちゃん。三歳、四歳、五歳と、月日のながれ、四季おりりの自然のなかで育っていくしなやかな、生気に満ちた姿。

庭のタンポポをとっておひたしを作る。砂と貝殻でままごを作る。柿の木にのぼって柿をもぎる。お砂場ではだしにな

り、やがて寝そべってしまふ。

子どもが育っていくとはこういうことなのだ、子どもにはこういう環境が必要なのだ、改めて自分たちの子育てと生活のありかたを振り返らずにはいられない。

詩が好きなたちばかりでなく、いま子育て真最中の若いおかあさんたちにも読んでもらいたいと心から思う。

武蔵野書房 一五〇〇円(野)

エコロジー・シンプル宣言

食卓からの50の提案



小林カツ代・林 佳恵 著

私たちの生活の中に一見定着したかに見える「リサイクル」だが「リサイクル」できるからよいという発想を根本から考えなおす時なのでは」と語るのは、料理研究家の小林カツ代、ブックデザイナー林佳恵の両氏。「生活廃棄物が環境に与える影響を最小限にするためには、廃棄物になって困るものを使用しないこと。『始』でくい止めず

に、『末』（廃棄物）で対処したのでは、膨大なエネルギーと費用がかかってしまう。お二人の対談にあるように、この問題を「始末」の発想から考え直す本書は、根本的な解決に結びつかぬ現在の環境キャンペーンに疑問を投げかける。豊富に紹介された環境を守るための具体的方法は、どれも今すぐ実践できるものばかり。

牛乳はビン入り宅配を、野菜はひたひた水でゆでる、食卓にはティッシュでなくおしぼりと台ふきを、イヌやネコの食事にも缶入りをやめて手づくりで。買い物から片づけまで、「食」をめぐる一連の行為を洗い直す提案には強い共感を覚える。エコロジー・シンプル宣言したくなること請け合いの一冊だ。家の光協会 一三〇〇円(中)

母と息子

フェミニズムの流れのなかで



森崎和江ほか著

子どものためにすべてをなげうって尽くすのがよい母。そして母が尽くせば尽くすほど、子どもは健全に育つ、これが日本人全体の信念であった。

ほんとうにそうなのか。

この一冊は、激しく自分自身を生きようとつとめた女性たちが、「母親」としての自分自身を描いた記録集である。

森崎和江、若桑みどり、永畑道子、駒野陽子、向井承子、富

永孝子、小沢牧子、高野貴子、そして田中喜美子という執筆メンバー。それぞれが仕事を持ちそのなかで子どもを育て、いま、その子たちが育ち上がって、子育てに一応の結論が出た人たちがかりである。

どの母の生活も激しく、どの母の子育ても手探りである。体当たりで生き、子どもを育てながらその子どもに支えられる母たち。子どもはみごとに育つ。

しかしそうした母たちでさえも、子らの巣立ったあとの虚脱感は深い。

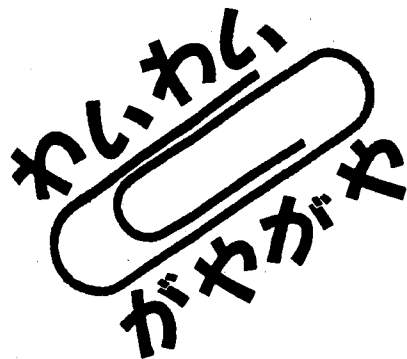
おまえから電話があったよ  
すぐそこで聞こえたよ  
おとなの声で

あ かあさん

(森崎和江)

母とは何なのか、息子とは何なのか。真実の音が、ズシリと重い一冊である。

筑摩書房 一六〇〇円(田)



## 円形脱毛症

東京都世田谷区●田中優子

「円形脱毛症」になってしまった、という人の話は身近なところでも結構耳にする。

自覚症状から言えは痛くもかゆくもないのだから、病気(?)とはいえないとしたことはない。

……が、しかし、私はまいっ

ている。これは絶対なってみないとわからない。このダメージ、この恐怖感、絶望感……。

何がおそろしいって「大きくないはしないか?!」と常に強迫観念を押しつけられていること。

「最初は小さかったけれどだんだん大きくなって……」という話を何度も聞いている。

「このハゲ、これ以上大きくなるなよ——!」私は毎日そう言い聞かせている(言うことを聞くなら誰も苦労はしない)。それに加えてもっと悪いのは「いくつもできた」という話。「円形脱毛症ができてしまった……」

と思っていたら、あれよあれよという間にポコポコと増えていって、とうとう頭髮が全部なくなってしまう」という友人がいる。そ、そんな……。

この先がおそろしい! 一体どうしたらいいの?! こいつをひとりで抱えているのはあまり

に重くて、暗くて、耐えられない。

「どなたかハゲの治し方をご存知でしたら教えてください」会う人みんなに言いふらし、教えを乞うた。「冷やすといい」「ようじを何本か束ねてつつくといい」ようするに、刺激を与えろといらしいとの意見を頂戴した。初めは「ちょっとでもさわって、広がりでもしたら大変!」と、おそろしくてかわれずにいたが、今は助言通り、色々試みている(結果、小癩状態というところか……)。

それにしても、ストレスが原因と言われているこのハゲ、こいつのせいで増々ストレスが貯まるじゃないか! ほんとうに悪循環! 人には「気にしないほうがいいよ」と言っておきながら、いざ自分のこととなるとどうしたって気になる。この心

るう?

二週間ぐらい、まいっていた。落ち込みはしなかったが、大ショックだった。人前に出てものを教える仕事なのに困ったなあ……。ハゲかくしが毎朝の課題だった。前髪の一部を無理やり後ろに引っばってきてピンで止めて……それでも穴があいているところは透けて見える。



## 赤い信女

神奈川県大和市●浅田勤子（62歳）

パラパラとめくった故事ことわざ事典で、「赤い」という文字が目にとり、調べたいものは後まわし、そのページに目を留め、びっくりした。

赤い信女（あかいしんにょ）

—— 夫に死なれた婦人——とあったから……。

今まで聞いたことのない言葉

そうだ！ まゆ毛書き（ペンシル）で黒く塗りつぶしてしまえ！ これは我ながらグッド・アイディアだった。

というわけで、今日も元気に「円形脱毛症」と出勤。ああ、しかし、できることなら一刻も早く縁を切りたい！ と願う日々である。

である。「信女」とは、仏教における女性の戒名の一つで、男性は「信士」とも書いてある。かなり前、墓石に戒名を刻む時、生きている人は赤い文字にするとか聞いた。

だから、夫を亡くした婦人は

まだ生きているわけで、女性の戒名の「信女」に「赤い」という文字がつくのは当然と理解できた。つぎに書かれてある意味・シンな文字にも興味があった。

「赤い信女が、子をはらむ」  
—— 夫を亡くした女性が、男性

と関係して、妊娠することを皮肉った句——と説明してある。それにしても、ほとんどの方が（私も含めて）赤い信女の言葉を知らず、げんんな顔をするわけだから、もし夫を亡くされた方にその言葉を伝えたところで、目をパチクリされるだけだろう。

たとえ文章の上とはいえわが夫を殺すのは心苦しいが、私もしその立場に立った時「未亡人」より「赤い信女」と呼ばれたほうが、心に安らぎが広がるような気がする。

もう一歩意地悪になり、喪の挨拶状まで考えて、その文の中に「赤い信女になりました……」と書き入れたら、世間さまの反応はいかに？ などと、ふとしたことから事典を手にして、しばしの間悪女になった私であった。

（え・奥島千恵子）



## 次号投稿募集

### ●特集テーマ原稿

次号は「うちの子のおばあさん・おじいさん」です。

孫ほどかわいいものはない、と持った人は皆言います。まだ孫がなくて、友人連の孫自慢を苦々しく聞いていた人も、いざ出来たとなるとメロメロになるそうです。

しかしその孫の親にしてみれば、自分たちの育児方針があることだし、母親が職業を持っている場合も多いし、「責任がないから孫はかわいいのよ」などと言われては困ってしまいます。

反対に、しっかりした祖父母が昭和三、四〇年代の育児法を厳格に主張して、親たちは恐れ入って息が詰まる、という場合もあるでしょう。

今回は、孫をはさんでの新旧世代の葛藤を、若い方のほうからお書きいただきたいのです。もちろん、すばらしい協力をしてくれるという例でもけっこう。

次の二五三号では、「若い世代の育児を見れば」というテーマで、旧世代からのこ

意見を載せるつもりですので、よろしく。

双方あまり深刻にならず、ユーモアを含む余裕が欲しいのですが、この問題は……。

四百字詰原稿用紙十枚前後。

●ご注意！ 今回は締め切りを早めました。印刷所の年末年始の休暇のためです。締め切りは十二月二十日必着でどうぞ。

### ●ワンポイント情報

「通信販売・私の場合」です。このごろ大流行の通信販売。カタログで注文して本当に期待どおりのものが来るのでしょうか。当たった経験、はずれた経験をどうぞ。

八百字前後。こちらも十二月二十日です。

### ●女の時事放談

「天皇と私」が今回のテーマです。

二五〇号に、伊藤琴子さんがアメリカの地で天皇・皇后にお会いして大感激した話を書いていきます。今号にはその賛否両論が載りました。あなたにとって天皇、天皇制とは何か？ 一〇〇パーセント言論自由の「わいふ」誌上で、大いに論じてください。

日時 十二月十六日（金）二時～四時半

場所未定。十二月十三日までに、電話で編集部へお申し込みください。

ご希望がしばしばあるので、原稿の添削をすることになりました。添削して欲しい方は、左記の要領でお送りください。

●添削のみ希望の方は、原稿の最初に「添削のみ希望」と赤字で書くこと。  
●「わいふ」に投稿して、さらに添削希望の方は、「投稿、添削も希望」と原稿の最初に赤字で書くこと。

●投稿して、ボツになった場合のみ添削して欲しい方は、「ボツのときは添削希望」と、原稿の最初に赤字で書くこと。

添削料は四百字詰原稿用紙一枚につき（ワープロ原稿は20字×20行で打つこと）二千円いただきます。返送の際振替用紙を入れて、返送料共にご請求します。

誤字、仮名遣い、文法、文脈などの誤りを正したうえ、編集長か副編集長が講評をいたします。

編集長の著書「書きたい女たちへ」も、基礎を勉強したい方にはおすすめてです。ご注文ください。

## シンポジウムのお知らせ

### 有料老人ホーム・老人マンションの 見分け方・選び方

講師 水落 時子（老人ホーム情報センター主任）  
時 十二月十五日（木）午後一時半～四時  
所 新宿区女性情報センター

東京都新宿区荒木町一六 都宮新宿線曙橋下  
車徒歩三分（A4出口）

☎〇三―三三三―四一〇八〇―

参加費 千円

申し込みは「老人ホーム情報センター」までお電話で。

☎〇三―三三三―五二八五四

「老人ホーム情報センター」では、詳細なアンケート調査に基づき、ホームの経営基盤、方針、内容などについて皆様に正しく、分かりやすい情報をご提供いたします。

公的ホームについても、有料ホームについても、ご相談に応じますので、どうか気軽にご利用ください。

## 私を襲った老人問題

●日々深刻の度を増していく高齢社会。

老いた親たちばかりでなく、思いもかけない遠縁の老人が、ある日突然あなたの生活をかきみだすなど、意想外なハプニングがおこります。しかも老人といってもさまざま。老いても毅然として生きる人もいれば、半ばぼけたり、ひどく勝手になったり、それも大問題。

●ここに収めた五篇は、働きざかりの世代を襲ったそうした「老人問題」の物語。

彼女たちがいかにそれに対処し、それを乗り越えたか。涙と笑いに満ち、人生いかに生きるべきかを教えられる物語です。

「わいふ」に掲載した数篇に、新たに書き下ろしを加えました。書店または「わいふ」編集部までご注文を。（03-3260-4771）

社会思想社 一六〇〇円。

# わいふ 投稿規定

●定期購読者はどなたでも(男性でも)投稿できます。原稿には住所氏名を(郵便番号、都道府県名から)明記のこと。誌上匿名・ペンネーム可。

●次のコラムを設けています。

## エッセイスト・クラブ

(一六〇〇字まで)

随筆の楽しさを十分に味わわせてくれるよい文章をお待ちします。

## ズバリ一言

(八〇〇字まで)

マスコミ、事件、商品、サービスその他、目にふれ耳にきき手にするものに、どうしてもこれだけは言わずにいられないという「もの申す」の欄。改善への具体策の

提言もどうぞ。

## 奥さんから外さんへ

(二六〇〇字まで)

いまや家から外へ、既婚の女性がどんどん進出しています。どうして、どうやって、何のために、あなたは奥を捨てて外へ出たのか。職業ばかりでなく、趣味、市民運動、どんな目的のためでもよいのです。家族の反響、得たもの失ったものetc.をお書きください。

## マイ・ジヨブ／マイ・プロフェッション

(二六〇〇字まで)

あなたのしているらしいやるお仕事の内容、どんな技能、どんな適性が必要とされるのか、などをレポートしてください。保険の外交、校正の仕事、陶芸、八百屋、何でも。

## サブレシーブ

(八〇〇字まで)

本誌の投稿や記事についての反響をお載せします。感想、反論、何でもどうぞ。

## 人間マンダラ

(二六〇〇字まで)

あなたにとって忘れられない人の姿を描

いてください。もちろん家族の一員でもよいのです。

## おさない子を育てる

(二六〇〇字まで)

子育てはやはり、女性にとっての最大の関心事です。おさない子はいかかわい、けど子育てはホントにしんどい！

現実のなかから、あなたと子供のありのままの関係を浮きぼりにしてください。

## フリースペース

(八〇〇字まで)

どんなテーマでも書けます。思想・信条にかかわらず、一〇〇パーセント言論の自由のある「わいふ」ならではのコラム。

## わいわいがやがや

八〇〇字以内で、誰でも気軽に書けるコラム。

## 読んでみました

(八〇〇字まで)

書評のコラム。女性問題にかぎらず、視野の広い読書体験を。

## 情報コーナー

(八〇〇字まで)

お知らせ、募集、お願い、探しもの、交

換、相談、何でも。なるべく短く、要点をまとめてください。

## サークルだより

(800字まで)

「わいふ」には読者が連絡をとりあい、自主的に作ったサークルがあります。作りた、というよびかけ、こんな活動をしました、これからしますからご参加を、などというお知らせをどうぞ。

●投稿は多少添削することがありますのでご了承ください。

●以上、締め切りは原則として偶数月の二十五日(当日必着)。それ以後にいたものは次号まわしとなります。規定枚数は、きっちりでなくともよく、長くても内容がよければお載せします。

## コラム以外の投稿募集

## 特集テーマ原稿

毎回テーマを設定して募集しています。

## ワンポイント情報

一つのもの、または事柄に関する読者の情報の徹底収集。テーマはそのつど設定します。募集欄をごらんください。

## 特別寄稿

ルポルタージュ、自分史

伝記、旅行記、その他の体験記、評論、小説、どんなジャンルのものでもけっこうです。枚数も自由。

本誌に適當と思われるものは掲載します。長編なら連載になります。

本誌には合わないが、価値ありと思われるものは、出版社に紹介、推薦します。

本誌掲載の場合は薄謝をさし上げます。

絵・カット・イラスト・写真・コミックも募集しています。ご自分の投稿にイラストや写真が用意

できる方は、あわせてお送りください。

## 注意

●投稿は一人一篇に限り  
ます。ただし次のコラムへのご投稿

とはだぶってかまいません。情報コーナー・

ワンポイント情報・サブプレシブ・サークルだより。

●投稿は原稿用紙に。本誌はタテ組みです。で、ヨコ書きはご遠慮ください(書き直すことになるので)。

●原稿はお返しできませんので、必要な方はコピーをとってからお送りください。

●匿名、ペンネームは原稿の最初に、住所・本名はそのすぐあとに並記してください。

また整理の都合上、住所には郵便番号を付記し、本名には会員番号(本誌送付封筒の宛名の下と、振替用紙にあります)を付記してください。

●匿名、ペンネームの場合には、理由をお書きください。とくに理由がない場合は、

本名でお願いします。ペンネームをいくつも使い分けるのも、ご遠慮ください。居住

地もとくに理由がなければ記載したいのによりしく。ただし匿名・ペンネームは原則

として自由であり、書くことの自由を守るためであれば、むしろ積極的に評価します。

濫用は困る、ということです。

●おたよりで掲載ご希望でない場合は、必ず私信とお断わりください。

●年齢をお書きそえになりたい方は、名前の下にアラビア数字で。

●二重投稿は固くお断わりします。

●ワープロ打ち原稿は、字詰め二十字で行間、字間をあまり詰めないように。また禁則処理をしないで打ってください。

●ファクスでの投稿は受け付けません。

## 編集だより

●今年もとうとう最後の号になりました。

毎回、年の暮れには早めに原稿を印刷所に入れないといけないので焦ります。というわけで、次号の原稿の締め切りはいつもより五日間早く、十二月二十日ですので、お忘れにならないようどうぞ。

●「わいふ」はこれまで、いくつかのコラムの活字をほかのものより少し小さくしていましたが、これからはどのコラムも同じ大きさ（9ポ）にすることにいたしました。年配の読者から、活字が小さい部分は読みづらく、読む気がしない、というお声が出たためです。「わいふ」全体の読者が「高齢化」？というわけでもないのですから……。

ともあれ、若い女性も熟年の女性も、そして男性も同じように楽しめて世代間交流ができるところが「わいふ」のよさだと思っています。

●今回は九十一通の投稿がありました。連載ものの四本が一度に終わったので、長いものが少なく、寂しい気がしていましたが、

締め切り間際になって「現代お見合事情」

というたび切りおもしろい話が出現、ありがたく思っています。

●事務の窓口は主に電話を通して読者の方たちとつながっています。購読の申し込み、中止、住所変更、友人紹介、そのほかさまざまな用件が全国から毎日ひっきりなしにかかってきます。珍しい地名とかお国訛りからのどかなローカルカラーが伝わってきて、忙しい中に心の和むひとときを味わっております。

「書きたい女たちへ」文庫判（社会思想社）はおかげさまで売り切れとなりました。書店でも扱ってまですので、今後は店頭でお求めください。長くご愛用いただけるハードカバー判はまだ在庫があります。千六百円です。ご希望の方は事務係までご注文をどうぞ。（事務担当から）

●「わいふ」の事業の一つ、「老人ホーム情報センター」で、十二月十五日にシンポジウムを開きます。老人ホームに興味のある方、偏見のある方（！）ぜひご参加ください。くわしくは一四一ページをどうぞ。

●では皆様、よいお年をお迎えください。

□購読申込は……

ハガキか電話でどうぞ。

すぐ本に振替用紙を添えてお送りしますので、折り返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。

## わいふNO.251.

1995年1月1日発行

編集・わいふ編集部  
定価460円（本体447円）

（年間購読料送料共4200円）

印刷・平河工業社

発行所・（株）グループわいふ

東京都新宿区矢来町115

東海神楽坂マンション406

〒162 TEL (03) 3260-4771・4773

郵便振替 00150-3-110430

加入者名 わいふ編集部

□購読中止は……

必ずお申し出ください。

送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れても引き続き送本しています。お申し出がないとお送りしてしまうので、ぜひハガキか電話を。

## 増田れい子の本 全3冊



端正で味わい深い  
人間と自然への賛歌  
女性がいきいきと  
生きられる社会への夢

自由と平和への尽きない憧れ。

女性という根を育てながら

ジャーナリストの仕事を抱いてきた

著者の初のシリーズ

大月書店 東京文京本郷2-11-9  
☎03-3813-4651

発売中

## 1 花のある場所

四季にうたう草花との交感、心を和ませ暮らしに張りをもみがえらせる四季の味ごよみ。人間の仕事と与える感動と興奮。疲れをやさしく癒してくれる日常のいとなみの発見。小さな世界を通して、大きないのちの流れを気づかせてくれる魅力あふれる語りかけ。

発売中

## 2 女たちの歌声

オトコ社会、企業社会が無数に張りめぐらした壁をひたむきにのりこえようとする女たち。彼女たちに伴走し、生き方をともに探る中で、夫婦と家族のあり方、女の友情と連帯、人権、戦争と平和、そして憲法について考える。明日を拓く女たちのたしかな歌声が聞こえてくる。

95年2月刊

## 3 一本のペン

私は何を書いてきたか

戦後民主主義と新憲法にあふれる希望を抱きジャーナリストの道を選んだ著者。そこで遭遇したことは何か。自らのジャーナリズム体験、さまざまな人との出会いを通して、戦後日本のありかた、ジャーナリストの姿勢について自らへの批判をこめ率直に語る待望の書

46判カバー・①②定価各1800円／③予価2400円

あなたの心を弾ませるたくさんの歌  
新しい時代に注ぐ熱いまなざし

# セクシャルアビューズ

家族という他人—広がる性的虐待の実録レポート

■山口遼子著 ■定価 1500円

家庭内で急増する子どもたちへの性的虐待が社会問題になりつつある。一見平和な家庭、子ども親も堅く口を閉ざす虐待の真実を衝撃レポート！

## 女性の病気と名医・病院

■医療ジャーナリスト 松井宏夫著 ■定価 1300円

現代女性がかかりやすい病気を、症状から自己診断法、治療法まで解説。病気ごとの全国の名医・病院を全ガイド。

## ふたりの男を愛すること

なぜ、ひとりの恋人では満足できないの？

■ヒロコ・カサタ著 ■定価 1300円

ふたりの男性を同時に愛したことがありますか？……Yes 43%

ひとりの女が、ふたりの男を愛する。

この現実を、あなたはどのように思いますか？

保存版全ガイド

株式会社 サンドケー出版局

〒164 東京都中野区本町4-48-13

KURIHARAビル

TEL 03-3380-1101

FAX 03-3380-1149

東振5-707169

※価格は全て税込み



東京ヒューマニックス研究所の

# ゲシュタルト・セラピスト養成講座

毎年4月開講

## 第6期生徒募集

現代の仕事のために更に自己を高めたい人や、将来セラピストやカウンセラーをめざす方のためのセミナーです。今までのカウンセリングやセラピーで避けがちな「性」をあらゆる専門分野から理解を深め、加えてゲシュタルト・セラピーの理論と技術を体験的に学習して、人の心層に複雑にからみあったいろいろな問題解決に対するきめ細かい手助けが出来る高度なセラピストを目指します。

特に、入学のための制限はありませんが簡単な面接があります。

### (開校予定)

就学期間：3年間

開講日：平成7年4月20日(木曜日予定)

受講料：申込金 30,000円

年間受講料 580,000円

教材費 5,000円

説明会：平成7年2月8日(水)、3月8日(水)、4月12日(水)の3日間

※面接日指定、説明会参加希望の方はお電話にてご予約ください。

### (指導講師)

- |            |                           |
|------------|---------------------------|
| 社会心理学      | 石川弘義 (成城大学教授)             |
| 大脳生理学      | 大島 清 (京都大学名誉教授・医学博士)      |
| 社会風俗評論     | 小野常徳 (元警視庁技官)             |
| 犯罪心理学      | 小田 晋 (筑波大学教授)             |
| 児童心理学      | 菅野 純 (早稲田大学助教授)           |
| 性教育講座      | 小林信三 (多摩大学助教授・医学博士)       |
| セクソロジー     | 篠崎信男 (元厚生省人口問題研究所所長・理学博士) |
| ゲシュタルトセラピー | 荒川旬美 (当研究所所長・心理学博士)       |

### (学習内容)

#### § 1年間のワークスケジュール

ゲシュタルト・基礎学習 毎週木曜日夜19:00~21:00

夏期、冬期休暇、休日を除く計38回

#### § 講義

セクシャリティー講座 後期より月1回 計7回

#### § 呼吸法 ホロトピック、ネオライヒアン呼吸法

毎月1回(土曜日予定 ワークスケジュールには含まれていません)

#### § 瞑想法

#### § 芸術療法

#### § ロールプレイ

#### § 各種講座(ワークスケジュールには含まれていません)

#### § 専門家養成講座合同合同

年2回 前期1回 後期1回(実費自己負担)

◎以上のお問い合わせ・お申し込みは下記まで



## 東京ヒューマニックス研究所

☎03-3986-2420

〒170 東京都豊島区南大塚3-34-6  
MOAビル402号室

